

人間科学

第38巻 第1号

研究論文

派遣留学生の経験を理解し今後の指導につなげる

—学生のライフストーリーの聞き取りを中心に— …… 飯野 令子 1

「近代」移行期の東アジア知識人の人的ネットワークについての基礎研究（四）

—「韓人筆話」をめぐって— …… 崔蘭英・北原スマ子 17

日本の高齢者における「食行動」と「健康」の関連性についての検討

—国内外の文献によるシステマティックレビュー— …… 田中 基晴・菅原 直美 31

筑波庵翠兄の俳諧道場 …… 二村 博 74(一)

研究ノート

高グルコース培養条件が筋芽細胞C2C12と間葉系細胞C3H10T1/2の骨芽細胞への

分化に及ぼす影響の検討 …… 棚橋 浩 43

日本昔話において結果の相違を引き起こす主体に関する考察（3）

—複合型— …… 永野 勇二 51

常磐大学人間科学部紀要『人間科学』編集規程

(目的)

第1条 この規程は、人間科学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）が行う編集作業に関して必要な事項を定めることを目的とする。

(根拠)

第2条 この規程は、人間科学部紀要編集委員会規程（1983年6月15日）第4条に基づく。

(公表)

第3条 常磐大学人間科学部（以下「本学部」という。）の研究発表誌『人間科学』（HUMAN SCIENCE）（以下「研究紀要」という。）は、毎年度に1巻とし、2号に分けて編集し、冊子体を発行するほか、その電子版を常磐大学のホームページに公表する。

(寄稿資格)

第4条 研究紀要へ寄稿する資格を有する者は、本学部の専任教員および委員会が認めた者とする。

(審査)

第5条 委員会は、次のことを寄稿者に確認しなくてはならない。

- 1 提出された論文等が学術論文等として相応しい内容と形式を備えたものであり、かつ未発表のものであること。
- 2 図版、写真等に著作権等の支障がないこと。

(論稿の種類)

第6条 研究紀要に掲載される論稿は、次の各号のいずれかに当てはまるものでなければならない。

- 1 論文 論文とは、学術論文に相応しい内容と形式を備えた理論的または実証的な未発表の研究成果をいう。
- 2 研究ノート 研究ノートとは、研究途上であり、研究の原案や方向性を示した未発表の研究成果をいう。
- 3 書評 書評とは、新たに発表された内外の著書または論文の紹介であって未発表のものをいう。
- 4 学界展望 学界展望とは、諸学界における研究動向の総合的概観であって未発表のものをいう。
- 5 その他 その他の論稿であって委員会が寄稿を認めたものをいう。

(編集)

第7条 研究紀要の編集は、前条までに規定された事項を除くほか、次の各号に従って行われなければならない。

- 1 必要に応じて、片方の号はテーマを決めて特集号とする。
- 2 論文の体裁（紙質、見出し、活字など）は、可能な限り統一する。
- 3 紀要のサイズはB5とし、論文、研究ノート、書評および学界展望は二段組、その他は一段組で、原則として横組で明朝体とする。

附 則

- 1 この規程の改正には、委員会の3分の2以上の委員の同意を必要とする。
- 2 この規定の改正条項は、2020年4月22日から施行する。

常磐大学人間科学部紀要『人間科学』寄稿規程

(目的)

第1条 この規程は、冊子体および電子媒体で公表される常磐大学人間科学部の研究発表誌『人間科学』（HUMAN SCIENCE）（以下「研究紀要」という。）に寄稿を希望する執筆者について必要な事項を定めることを目的とする。

(根拠)

第2条 この規程は、人間科学部紀要編集委員会規程（1983年6月15日）第4条に基づく。

(寄稿資格)

第3条 研究紀要へ寄稿する資格を有する者は、常磐大学人間科学部紀要『人間科学』編集規程（1983年6月15日）以下「編集規程」という。）第4条に定める者とする。

(寄稿希望者の義務)

第4条 研究紀要への寄稿希望者は、寄稿に関してはこの規程を遵守するほか、この規程の解釈については人間科学部紀要編集委員会（以下「委員会」という。）の決定に従わなければならない。

(原稿提出要領)

第5条 寄稿希望者は、委員会が定める原稿募集要領に従って寄稿希望書ならびに原稿を委員会に提出しなければならない。

- ② 委員会に提出する原稿は、編集規程第6条に定める論稿の種類に当てはまるものでなければならない。
- ③ 委員会に提出できる原稿は、原則として一号につき一人一編とする。
- ④ 原則として、原稿は電子媒体とそれを印刷した紙媒体とを合わせて提出する。本文は横書きの場合、1ページあたり30行・1行あたり40字に字組みする。本文・図・表・写真などのデータは、それぞれ標準的な形式のファイルとして収録する。なお本文中に、図・表・写真などの挿入箇所を指定する。
- ⑤ 原稿の長さは、図表等を含め、論文は2万4,000字以内（A4用紙20枚）、研究ノートは1万2,000字以内（A4用紙10枚）、書評は4,000字以内、学界展望は8,000字以内を基準とする。課題研究助成報告は、研究計画年次終了分に関しては、論文又は研究ノートとして寄稿する。そのほかのものについては、委員会で決定する。
- ⑥ 提出原稿は、執筆者がコピーをとり、オリジナルを委員会に提出し、コピーは執筆者が保管する。

(原稿執筆要領)

第6条 寄稿希望者は、原稿執筆に当たっては、次の各号に従わなければならない。

- 1 原稿の1枚目には、原稿の種類、題目、著者名および欧文の題目、ローマ字表記の著者名を書くこと。
- 2 論文には、200語程度の欧文アブストラクトを付すこと。
- 3 書評には、著者名、書名のほか出版社名、発行年、頁数を記載すること。
- 4 日本語以外で執筆された部分については、執筆者の責任においてネイティブチェックを行う。
- 5 数字は、原則として算用数字を使用する。
- 6 人名、数字、用語、注および（参考）文献の表記等は、執筆者の所属する学会などの慣行に従う。
- 7 図表の番号は、図1.、表1.、とする。そのタイトルは、図の場合は図の下に、表の場合は表の上に記載すること。
- 8 図表の補足説明、出典などは、それらの下に書くこと。

(掲載内容の選考)

第7条 委員会は、研究紀要の学問的水準を維持するために、寄稿論文等を検討し、必要な場合には、修正を求めることができる。

(著者校正)

第8条 初校の校正は、執筆者が行う。

(発行報告)

第9条 執筆者は、本人が寄稿した研究紀要の発行報告に代えて、論稿が掲載された当該研究紀要2冊と抜刷50部を学事センターにおいて受け取ることができる。

- ② 執筆者が前項に規定する数量を超える複製を希望する時は、本人がその実費を負担しなければならない。

附 則

- 1 この規程の改正は、委員会の3分の2以上の委員の同意を必要とする。
- 2 この改正規程は、2008年10月22日より施行する。
- 3 この規程の改正条項は、2013年12月18日から施行し、2013年9月5日に遡及して適用する。
- 4 この規程の改正条項は、2020年4月22日から施行する。

派遣留学生の経験を理解し今後の指導につなげる —学生のライフストーリーの聞き取りを中心に—

飯野 令子 (常磐大学人間科学部)

Understanding the Experiences of Students Studying Abroad and Using them
for Future Guidance: Focusing on listening to student life stories

Reiko IINO (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)

Abstract

This paper has two purposes. The first is increasing the number of students who study abroad from our university. The second is helping students who have studied abroad make effective use of their study abroad experience in their subsequent lives. This study firstly clarifies the factors that prevent our students from studying abroad. It then considers how faculty members support students in order to eliminate these factors. It also consider ways to instruct students who have studied abroad to make effective use of their study abroad experience in their subsequent lives.

In this research, I interviewed seven students who have studied abroad. I analyzed the students' narratives from five perspectives that were derived from previous research. As a result, I found that the students' experiences while studying abroad had a positive effect on their future life. However, it became clear that support of faculty members is necessary to help students connect their study abroad experience to employment and social contribution.

This research gives us insight about what students gain from studying abroad. If this understanding is used for instructing future students, some of the obstacles to studying abroad may disappear. In addition, this research was able to clarify how faculty members can support such students.

1. はじめに

1.1 日本人の海外留学の現状

日本の経済発展、国際競争力の観点から、政府や産業界からは「グローバル人材」が求められるようになった。「グローバル人材」の育成には、海外留学が大きな役割を果たすことは言うまでもない。その一方

で、日本の若者が、海外留学に興味を示さない「内向き志向」であることが問題視されるようになった。

OECD等の調査によると、日本人の海外留学は1980年代の1.5万人前後から徐々に増加し2004年に約8.3万人となった。ところが、それをピークに減少し、2017年は約5.8万人(文部科学省2020)で、ピ

ーク時から30%減少している。この数字は、各国が受け入れたとする日本人留学生の数を文部科学省が集計したもので、国によって数値の出し方が異なっているため検証が必要だが、多くが学位取得などを目指した「長期留学」とされる（小林2017:64）。この日本人の海外留学者数の減少は、少子化による若者人口の減少や、日本国内の大学数の増加による入学のしやすさも一因であると言われる（芹沢2013:26）。しかし、同じ東アジアの韓国や台湾は日本より人口も少なく、出生率も低い、日本より多くの留学生が海外へ渡っている（太田2013:71）。やはり日本の若者には、留学しにくい理由があると考えられる。

これまでの調査から指摘されているのは、日本の若者には「留学に関心があるができない」グループと「留学に関心がなく留学したくない」グループがいることである（太田2018:5）。太田（2013,2018）は、「留学に関心があるができない」理由として、①長期経済停滞による家計所得の減少、②英語圏の大学の授業料の高騰、③就職活動の早期化・長期化、④海外留学・経験を評価しない雇用者、⑤留学に必要な語学力の高度化、を挙げている。また「留学に関心がなく留学したくない」グループは、(1) 成熟した経済と社会を築き上げた日本の快適さと便利さに満足し、あえて困難に立ち向かうことに価値を見出せないこと、(2) インターネットの普及で、仮想現実での疑似体験に満足し、実際に体験することに意義を感じられないこと、(3) 危機管理を厳しく問われるようになり、リスクを回避する安全志向が高まっていることを挙げている。つまり、日本社会全体として、また国際社会における日本の位置づけによって、日本の若者が「内向き」になる状況が作られているといえる。

日本人の、学位取得を目指すような「長期留学」が減る一方で、日本人学生の協定校等への派遣留学者数は増加している。2009年度には約3.6万人であったのが、その後年々増加し、2018年度は約11.5万人となり、この10年間で約3倍となった（日本学生支援機構2020）。留学期間は1か月未満が最も多く、2018年度は約7.7万人で、全体の約7割、1か月以上6か月未満が約2.3万人で、約2割を占めている。短期間の派遣留学であれば、上に挙げた「留学に関心があるが

できない」理由の、①②の費用面、③④の就職活動への影響、⑤の要求される語学力などの壁が低くなる。また、政府の海外留学奨学金制度が整備されてきたことも後押しとなっている。

しかし、大学在学中の日本人学生の海外留学経験者の約8割が6か月未満の短期留学（多くは1か月未満）であるため、海外留学の裾野は広がってきているが、「グローバル人材」育成に対して、短期留学がいかなる効果を持つのか、検証が必要だとも言われている（太田2018:17）。確かに大学によっては、協定校の学位を取得するような「長期留学」を増やすことも検討すべきだろう。一方で、常磐大学（以下、本学）のような地域に根差す小規模な私立大学にとっては、協定校への1セメスターの派遣留学こそが、学生たちにとって手が届き、最も長く海外生活を体験できる機会となっている。太田（2018:20）が指摘するように、「国内学生の送り出しは目的ではなく、あくまでも大学が社会のなかで果たす役割の手段」である。つまり、一口に「グローバル人材」といっても、大学ごとに育成する人材像は異なるはずである。

では、本学では派遣留学によってどのような「グローバル人材」を育成するのか。それを検討するため、本学の派遣留学が、これまでどのような歴史をたどり、そこにどのような課題があったか、以下で述べる。

1.2 本学における派遣留学の現状

本学の国際交流語学学習センター（以下、国際センター）に残された資料によると、本学の交換留学制度は、2003年に米国カリフォルニア州立大学ノースリッジ校および同フレズノ校との協定で始まった。2004年に両校から本学への受け入れを開始し、2005年に本学からの派遣が始まった。前述のように、OECD等の調査による日本人の海外留学者数は2004年にピークとなっており、日本で海外留学が大衆化してきた時代背景とも重なる。ところが、国際センターに残っている2010年度以降の派遣留学生の記録を見ると、2010年度の3名から年々減少し、2014年度から2016年度まで米国への派遣留學生数はゼロとなった（表1）。

表1. 派遣留学生数 ()内は派遣定員

| 年度 派遣国 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 |
|-----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| アメリカ (3) | 3 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 |
| カナダ (3) | — | — | — | — | 1 | 3 | 2 | 1 | 3 | 3 |
| タイ (3) | — | — | — | — | — | 3 | 1 | 3 | 2 | 0 |
| 韓国 (2) | — | — | — | — | — | — | — | — | 2 | 2 |
| 中国 (2) | — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 1 |
| 台湾 (3) | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 1 |
| 計 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 | 6 | 3 | 5 | 9 | 7 |

筆者は2015年に本学に着任し、同年から国際センター委員として交換留学生の受け入れ・派遣にかかわっている。同委員会での議論や、国際センターに出入りしている学生と接する中でも、米国への派遣留学志望者がいない理由は、上述の、日本人の若者が「留学に関心があるができない」理由と重なっていた。米国への日本人留学者数は、2004年のピーク時からの減少が著しく(太田2018:4)、留学費用の高騰と、TOEFL・iBTによって高い英語力が求められることで、米国離れは本学の学生に限ったことではなかった。

米国への留学の難しさから、本学でも、米国以外の留学先が開拓され、2014年度からカナダのランガラ・カレッジへの派遣留学が始まり、その後毎年、派遣留学生を出している。カナダは英語圏であるが、米国より留学費用が抑えられる。ランガラ・カレッジでは留学生向けの英語コースに入るため、受け入れ先が求める英語力の基準はなく、派遣学生の英語力の基準は本学内で定めている。しかしカナダであっても、費用面や英語力の面で難しい学生がいること、また学生の興味・関心も多様化していることから、他の地域にも留学先が求められるようになった。そこで、2015年度にタイ、2018年度に韓国、中国、2019年度に台湾という、アジア諸国・地域の大学とも協定が結ばれた。協定校が増えたことで、学生たちの経済力や語学力、

多様な興味に合わせた留学先ができた。

ところが、派遣留学できる国・地域、そして学生の枠は増えたが、派遣留学に応募しようとする学生数は期待ほど多くない。協定校の派遣定員に達すること(各国2名から3名)は稀で、毎年、1名とも派遣できない協定校がある。

筆者は、本学の初年次必修科目である「学びの技法」や「キャリア形成と大学」を担当しているが、その中で、大学4年間のうちにやりたいことを書かせること、「留学」を挙げる学生が思いのほか多いことに驚く。リクルート(2019)は、大学進学者の3分の1は留学の意向を持っているという調査結果を出しているが、本学でも入学当初は多くの学生が留学を思い描いていると感じられる。しかし、ほとんどの学生が留学を諦める結果となる。その理由を上述の、日本の若者が「留学に関心があるができない」理由に合わせて考えると、まず①家計の面では、私立大学である本学は、学費の面で家計への負担が大きい。そのうえ海外留学となると、たとえ大学から一定の奨学金が出たとしても、残りの費用を出せる家庭ばかりではない。次に、②英語圏への留学は費用の面で手が届かなくても、アジアへの留学であれば手が届く学生は、確かに多くなる。しかし留学といえば英語圏と考える気風は根強くあり、気持ちの面で方向転換できる学生とできない学生がいる。また、③就職に関しては、当然のこ

とながら、教職免許をはじめとした資格のための科目の履修、各種資格試験の対策、および就職活動と留学との両立を考えなければならない。特に教職免許の取得を目指す学生は、必修科目や教育実習との調整は必須で、それを理由に留学を踏みとどまる学生もいる。これまでは、ある程度語学力をつけて、3年次の秋 semester に留学する学生が多かった。一方で3年次後半に留学し、4か月間就職活動ができないことは大きな不安につながる。さらに、④本学の学生が多く就職する地元企業では、海外と直接関係しないためか、留学経験を積極的に評価しない企業が確かにある。そのため、学生にとっても留学して就職を有利にしようという気持ちが起きにくい。最後に⑤英語圏に留学するための英語力をつけるのは本学学生が多くにとって難しい。アジアの協定校は語学力の条件があっても、柔軟に対応してくれる場合がほとんどだが、本学として、派遣留学生にふさわしい、一定の基準を設定している。留学の意向があっても、その基準に達することが難しい学生もいる。

派遣留学に申し込む学生が増えないことについては、教職員の間でも、本学学生の「内向き志向」や、県境を越えた経験もない学生がいることなどを理由にする声もあった。しかし、ここまで述べてきたように、本学学生が留学に関心がないわけではなく、留学を阻害する要因は、日本社会に通底した問題である。その上に、大学大衆化の時代に開学した、地元根差す私立大学であるがゆえの、国立大学や全国区の私立大学とは異なる、本学ならではの問題がある。それを解消していくためには、本学が海外留学を通して育成する人材像に意識的になり、教職員が、本学の学生が「留学に関心があるができない」理由を取り除く努力をし、学生たちを鼓舞し、指導していく必要がある。

2. 問題意識と本研究の目的

本学は地域に根差した大学として、地域での存在価値を高めてきた。本学のディプロマ・ポリシーでは、「社会や地域に貢献するための社会適応力および社会活動力を身に付けた人材を養成」すること、その人材像として、「グローバル化の中で展開する知識基盤社

会において、豊かな国際感覚で問題を捉え、その問題解決に真摯に取り組むことができる」ことを挙げている。「豊かな国際感覚」を持って、「社会や地域に貢献」するためには、海外留学は最も有効な手段である。

本学のほとんどの学生にとって4年間で卒業することは、学費を最小限に抑えるために絶対的な条件である。そして、多くの学生が県内の企業や自治体に就職することを志望している。実際、2018年度は就職者の80%近くが県内に就職している。本学の学生にとって、在学中の協定校への1 semester の留学は、休学する必要がなく、費用面からいっても、就職活動への影響の少なさからいっても、最も長く海外経験ができる機会となる。本学が育成するのは、最長1 semester の海外経験を持って、地元企業・自治体に就職し、グローバル化が進む地域社会で活躍できる人材であるといえる。

本学では、国際センター職員や国際センター委員の教員を中心に、教職員の連携で、学生への働きかけを行ってきたが、派遣留学に申し込む学生が教職員の期待ほど増えていない。上記のような「留学に関心があるができない」理由を踏まえたうえで、本学の学生の特性に合わせて働きかけていけば、そのいくつかは解消し、派遣留学生を増やすことができるのではないだろうか。

そして、解消すべきもう一つの問題は、これまでの本学の派遣留学生がその経験を、後の学生生活や卒業後の進路に、必ずしも有効に生かしていないことである。これまで筆者が接した問題を具体的に挙げると、留学を経験した学生は、その貴重な体験によって、周りの留学未経験の学生とのギャップから孤立し、帰国後、有意義な学生生活が送れないことがある。また、視野が広がることで進路の多様な選択肢に気づいて迷いが生じ、進路をなかなか決断できなかったり、その逃げ道として目的もなく再度の留学や進学をしようとする場合もある。さらに、留学で英語力が伸びたことによって、英語が生かせる職種に挑むが、それには力が及ばなかったり、適性ではなかったりして、かえって就職に苦戦を強いられることがある（飯野 2019）。こうした問題が起こることを教職員が理解し、学生たちを指導することによって、留学経験者がその経験を

有効に生かすことができるのではないだろうか。

そのために教職員ができることは、派遣留学生、留学志望者が留学経験を生かせるような指導をするための事前、事後の研修である。これまでの派遣留学志望者は、まず、国際センターが行う派遣留学説明会に出席したり、関係する教職員に相談したりすることから始める。そして事前準備としては主に、留学に必要な語学試験の点数に達することである。その点数に達した学生が派遣留学に申し込み、国際センター委員会の審査を経て派遣が決定すると、学科教員と、留学中の科目の履修などについて、相談をする。そして渡航前に、留学に必要な手続きや危機管理に関する講習を国際センター職員から受ける。つまり教職員の派遣留学生とのかかわりは、多くの場合、語学試験対策や科目の履修相談、危機管理などの実務的なサポートであった。そのため、派遣留学生は基準となる語学試験の点数に達すること、そして留学することそのものが目標になってしまい、何のために留学するのか、留学をその後の人生にどう生かすか、などを考える機会が作られていなかった。そうした機会を事前研修、事後研修として作れば、留学経験を、その後の人生に有効に生かすことにつながるのではないだろうか。そして留学経験の有効な生かし方を、留学生本人や教職員が後輩に伝えていくことで、多くの学生が、現実味を持って留学を考えるきっかけになるはずである。

したがって本稿は、本学の学生が「留学に関心があるができない」理由、つまり、留学を阻害する要因を少しでも取り除き、一人でも多くの学生が留学を実現できること、そして留学した学生が留学経験をその後の人生に有効に生かせること、その経験を後輩の学生に伝え、留学志望者が増えること、という循環を作り出すための研究の一部である。そのために本稿を通して、本学の教職員が、学生の留学を阻害する要因を取り除くために、どのような働き掛けを行っていくか、そして留学経験者や留学志望者をどのように指導していくかを検討することを目的とする。

3. 先行研究と本研究の視座

これまで日本の留学に関する調査・研究は、外国人留学生の受け入れに関するものが多かった。しかし近

年、日本人の海外留学に関する調査・研究も、国内外で海外留学の効果を大規模に調査するものや、大学ごとに留学プログラムを評価するもの、学生にとっての海外留学の意義を調査するものなどが行われるようになった。国際社会や日本社会の情勢を踏まえ、大きな視点から大規模な調査を行い、留学に関係する国内外の諸問題を論ずるものとしては、横田・小林 (2013)、横田・太田・新見 (2018) がある。また、日本学生支援機構 (以下、JASSO) は、留学経験者に留学の満足度などを問うインターネットによる追跡調査 (日本学生支援機構 2019) を行っている。さらに文部科学省の委託により行われた「日本人の海外留学の効果測定に関する研究」成果報告書 (学校法人河合塾 2018) では、JASSO の海外留学支援制度や「トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム」、そして、いくつかの大学で行われている留学プログラムの効果などが調査されている。こうした大規模調査の結果から、日本人の海外留学の国際社会、日本社会の情勢との関係が浮かび上がり、全体の傾向をつかむことができる。その他に、各大学の留学プログラムを評価するために、大学の教職員の視点から、参加学生にアンケート調査や聞き取り調査などを行うものがある。本学においても、大津・佐竹 (2016a、2016b) が4週間のアメリカ研修での英語力の伸びを調査した結果が報告され、海外研修のプログラムとしての評価をしている。

留学事業の関係者や研究者、大学教職員の視点からの調査・研究は、留学プログラムのよりよいあり方を検討したり、数値から全体の傾向を理解したりするうえで重要である。しかし、本稿の目的である、本学学生の留学の阻害要因の解消や留学経験を活かすための指導に関しては、大規模な調査でも、留学プログラムを評価する調査でも、答えを見つけないことが多い。そのため、本学の、派遣留学を経験した学生一人ひとりの実情に目を向け、学生自身の視点から、質的に調査する必要があると考えた。

学生一人ひとりに調査し、質的に留学の効果を検討した研究としては、まず、前田 (2017) が、1セメスターの留学をした英米語学科の4名の学生のインタビューをもとに、英語力に関する学びよりも異文化適応能力に関する学びが多く浮かび上がったことを示し

た。また新見（2016）は、4週間のオーストラリアへの短期海外留学を経験した学生9名に帰国後、半構造化インタビューを行い、質的に分析した結果、短期海外留学が就職・進路に関する認識に影響を与えることを明らかにした。その結果をキャリア支援に結び付けることを目的としていた。以上は、留学の効果を留学後に調査した結果であるが、岩城（2017）は交換留学候補生19名を対象にインタビュー調査を行い、交換留学決定後から出発までの支援について考察した。また、岩城（2014）は、留学前、留学中、留学後のそれぞれで学生に意識調査を行い、その結果から、学生自身が留学経験を文字化し、整理させることが留学教育の一環として重要であることを指摘した。

本研究は、上記のような質的研究の先行研究にある視点を、統合的に取り入れていく。つまり、派遣留学生の留学経験についての認識を、留学前から留学中、留学後、そして将来の自分を含めた、長期的視野に立って調査する。それによって、派遣留学生にとっての留学経験の意味を、語学力や異文化理解、キャリアに限定せずに、幅広い視野からとらえ、留学生自身の経験の振り返りと、人生における意味づけを促す。同時に、留学にまつわる困難も含め、すべてを教職員が理解することで、今後の留学指導につなげることを目指す。

そうした視点で、筆者は2017年度から、本学の派遣留学生にライフストーリー・インタビュー（やまだ2000）を開始し、2018年度以降の派遣留学生には、帰国後、全員に実施してきた。生育歴を含め留学に至る背景、留学中の経験を聞き取り、その経験がこれまでと今後の自分とどう関係づけられるか、留学にまつわる困難も含めた経験の意味づけを調査してきた。それを教職員が理解することによって、後輩学生の留学の阻害要因を取り除き、派遣留学を志望する学生を増やし、学生にとってより意義のある留学にするための指導の方策を立てることを目的としてきた。同時に、インタビューで語る行為自体が、派遣留学生自身が留学経験を今後の人生に生かすための意味づけをする機会となることを狙ってきた。

その研究の一環として、飯野（2019）では本学の派遣留学生一名のライフストーリーの分析をした。その

結果を、本学の他の学生や教職員の参考となるような留学経験の意味づけ方の一例として提示した。さらにインタビューの場での相互行為によって、派遣留学生本人の今後の人生に、留学経験が位置づけられることを示した。この事例では、学生と教職員が共に語りを生成することで、学生自身の経験の新たな意味づけが行われることが示された。それは、留学後のインタビューが、教職員が学生の経験を知るためだけでなく、学生自身の事後研修としても有効であることを意味した。ただし、この研究では、ライフストーリー・インタビューという方法の有効性を示すことはできたものの、語りの内容と分析の視点が、語り手と聞き手の認識の枠組みを出ないことに限界があると考えられた。そのため本稿では、ライフストーリーを分析する視点として、先行研究を参照枠とすることで、指導の新たな方向性を探ることとした。

4. 研究方法

筆者は2017年度から派遣留学生の中で、承諾が得られた学生に対して、ライフストーリー・インタビューを行ってきた。ライフストーリーを聞き取ることは、その人の人生における出来事をどのように組織し、意味づけるかを理解することである（やまだ2000）。特に、聞き手との相互作用で、語りの中で経験が新たに意味づけられたり、意味づけが変わったりすることは、語り手のその後の行動にも変化を与えるという。そして個々のライフストーリーは、その一つひとつが代表性を持ち、ライフストーリーの受容者の経験との重なりが生まれ、受容者の人生にも影響を与えていくとされる。

ライフストーリーを語る場での相互行為によって、留学経験のある学生にとっては、その場が、留学を振り返り、それぞれの経験を人生の中に位置づけ、今後の人生における意味を見つけていく場となり、将来へ向けての前向きな認識の変化が期待できる。そして留学経験者の経験の意味づけ方を、他の学生が知れば、それが個々人の持つ経験と何らかの形で結びつき、影響を与えていくと考えられる。そのため、教職員がこうした語りを生成する場を作り、留学経験者の語りを開示していくことは、留学経験者に対しても、他の学

表2. 協力学生一覧

| 学生 | 学科 | 学年 | 性別 | 派遣国 | インタビュー日 | 録音時間 | 場所 |
|----|-----|----|----|------|------------|------|------------------------------|
| A | 英米語 | 3 | 男 | アメリカ | 2019年2月13日 | 114分 | 国際交流 語学学習 センター 小ブース |
| B | 英米語 | 3 | 女 | アメリカ | 2019年2月12日 | 109分 | |
| C | 英米語 | 3 | 男 | カナダ | 2019年2月19日 | 118分 | |
| D | 英米語 | 3 | 女 | カナダ | 2019年2月12日 | 84分 | |
| E | 心理 | 3 | 男 | カナダ | 2019年2月22日 | 131分 | |
| F | 経営 | 3 | 女 | タイ | 2019年2月12日 | 93分 | |
| G | 教育 | 2 | 女 | タイ | 2019年2月21日 | 116分 | |

生に対しても、留学指導の方策の一つとなる（飯野2019）

本研究の協力学生は、2018年8月から1 Semester（4～5か月）間、派遣留学を経験した7名、A～G（表2）である。留学からの帰国後、1か月あまりが経過した2019年2月に、一人ずつ、1時間半から2時間程度のインタビューを実施した。本学入学の経緯、入学後の学生生活、留学に至る経緯、留学中、留学後までを基本的には時間軸に沿って自由に話す、非構造化インタビューである。インタビューでは初めに、このインタビューが、留学指導にかかわる研究を目的とすることを説明した。そのうえで、インタビュー内容を録音し、そのデータを研究に使用することに承諾を得た。インタビューの内容は文字化したうえで、分析した。

さらに本稿では、インタビューの補足資料として「派遣留学振り返りシート」（以下、振り返りシート）の記述を用いる。振り返りシートは後輩学生や教職員が派遣留学生の経験を理解すること、及び派遣留学生自身の経験の振り返りを目的とし、国際センターに関係する教職員の検討により作成した。その試行として、2020年3月から4月にかけて、在 student で、すでにインタビューを実施した学生に記入してもらった。記入の際に、振り返りシートの記述を研究に使用する承諾を得た。本稿では、インタビューで語られた内容を補足する形で、インタビュー時の語りにはなかった

記述に注目した。振り返りシート記入時、2018年度の派遣留学生は、帰国後1年余りを経ており、7名中6名の学生が大学卒業を迎える時であった。

5. 分析

本稿では、7名の学生のライフストーリー・インタビューの録音データを、新見（2018）が、主に国外の大規模調査の研究に基づいて示した、留学のインパクトの主要な5つのカテゴリーに従って分析する。それは（1）異文化間能力・外国語運用能力、（2）学業、（3）社会性・人としての成長、（4）雇用され得る能力、（5）社会貢献、である。以下に、7名の学生が、どのカテゴリーでどのような経験を語り、どのように意味づけたかを具体的に記述する。その分析から、本学の学生の特徴を理解し、教職員のこれまでの指導を見直し、今後の指導の方向性を検討する。なお、分析の視点とした項目について、インタビュー時にはそれを、筆者自身も意識していなかった。あくまでも話の流れに合わせて、筆者が適宜学生に質問しながら、語りを進めていた。

以下に、（1）～（5）それぞれについて、学生の語りにそれが表れていた部分を適宜取り上げ、解釈を加える。なお、発話の記述の先頭のQは筆者、A～Gはそれぞれの学生の発話であることを示す。

(1) 異文化間能力・外国語運用能力

異文化間能力や外国語運用能力の伸長については、留学に関する研究で、特に多く行われている分野である。まず、学生たちの異文化間能力についての発話に注目する。新見(2018:29)は「異文化間能力は単一の定義が存在しない複雑な概念である」としながら、「異文化に関連したさまざまな態度、スキル、知識全般を指すこととしたい」としている。本稿においては、学生が留学先の人々に対して、認識や態度の違いを感じたことについて語った部分を取り上げる。

そうした語りがあったのは、学生A、C、Dであった。まず、学生Aは、アメリカの人々の個人を尊重する文化に触れて、日本の単一的な文化を意識し、それに対して、アメリカの重層的な文化に気づき、人と人との関係性の違いを意識するようになった。

A:(他人への)気にし方が違うんですね、きっと。つまり、完全に僕の考えなんですけども、われわれは同族意識があるんです。つまり、顔そっくりですし、言葉もほぼ90%以上は日本語を話すわけで、大きな同族意識の中で動いてるので、多分、日本っぽいものがある。いいものも悪いものも。でも、アメリカはもっと小さいグループで同族意識を持ってるので、そのグループ同士がぶつかったりとか、もしくはくっついていたりとか。それで新しいものができるんだろうな。ただ、気にし方がもっと違うんですね。

また学生Cは、クラスメイトになった他国から来ている留学生たちが、国の事情、家族の事情など、困難な背景を抱えながら留学している実情を知り、自分が恵まれてきたこと、自分が置かれてきた環境が当たり前ではないことを意識した。

さらに学生Dは、留学生仲間が時間や約束を守る感覚が様々であったことから、多様な文化への気づきと共に、その許容と、共生していく態度の必要性を語った。

D:それで国によってやっぱり育ってきた環境が違うと優先順位とか。

Q:違う?

D:何を大事に思うのかとか違うんだなって思っていて、その違いで別に悪いことじゃないと思うから、ある意味多様性みたいな。

Q:それ認めていくみたいな?

D:許容する力を身につけました。

Q:多様性を許容する力が身に付いた。

(中略)

Q:じゃあいろんな国の人に出会って。

D:違っているのも個性だなと。

Q:そして認めていく。

D:そうですね。

学生A、C、Dは、留学中に知り合った友人などとの関係から、学生Aは日本とは異なる多層的な文化の在り方に気づき、学生Cは国による置かれた環境や貧富の差に気づき、学生Dは多様な文化への許容と共生する態度を身につけたという。それらが、学生自身の留学中の行動と共に語られた。

次に、外国語運用能力については、すべての学生が向上したと、具体的な例を挙げながら実感として語った。しかし、向上の感じ方の程度は、学生によって異なっていた。英語専攻である学生A、B、C、Dは率直に伸びを実感しているが、英語専攻ではない学生E・F・Gは伸びを感じているものの、まだ不足も感じている。

率直に伸びを感じている学生Cは、日本では苦手であった英語のライティング、スピーキングなどで、特に伸びを実感した例を以下のように語った。

C:例えば、ライティングの技能であれば、1つの日本語の意味に対して、英語が何単語か出てくるみたいな。書きたい時に、自分でこうやって書いてる時に、これとこれどっち使おうとか、3つのうちどれ使おうとかっていうのをやったりとかっていうのが、ものすごく実感しました。

Q:書こうとする時に、単語が幾つか浮かぶと、これだけっていうんじゃないかと。

C:だから、さっきこれ使ったから次はこれ使おうみたいなとか。

Q:すごい、語彙を選ぶところまで。

C:そうです、来て。あとは、単純に話してる、友だちとかとしゃべってる時に、ちゃんとすらすらと出てきたりとか、もし分かんない単語、相手に分かんない単語があった時とかは、その単語の意味をちゃんと説明できたりとかってというのが、すごくありました。

一方で英語専攻ではない学生Gは、タイでタイ人学生と共に英語の科目を履修し、タイ人学生や他国からの留学生と英語で話さず中、ある程度「できる」感覚を身につけてきた。しかし、まだ自信がないという。

G:(帰国後) この前バイト中に外国人のお客さんが何人か来た時に対応してたんですけど、私に押し付けられちゃって、そんな時、普通に話ができたら、一応大丈夫になったのかなとは思いました。

Q:現地では、英語で普通に、タイ人はもちろん、外国から来てる人も英語で話すことについては、そんなに躊躇なくできるようになっていた。

G:なったとは思いますが。でも、ただやっぱ自分の中で、今でも発音があつて いうのがあるんで、日本人のいる前とかでは話したくないって。(後略)

Q:恥ずかしいのかな。

(中略)

G:自信がないんだと思います。

英語専攻ではない他の2名も、英語がある程度できるようになった感覚は身につけて帰ってきたものの、苦手意識を完全には吹っ切れていないことを語った。

(2) 学業

本学の交換留学は、専攻に合わせて学術分野の知識を得るものではなく、1セメスター間、主に語学系の科目を履修するものである。そのため、新見(2018:32)が「留学先で勉学に励むことで学習意欲が向上することを含む」としたのに合わせて、語学力向上への

努力や、語学学習への意欲の向上などに注目した。その発言をしたのは、英語運用能力の伸びに率直に満足していない、英語専攻ではない3名であった。まず、学生Eは、英語学習の意欲の向上を強く語った。

E:留学を通していろいろな国の人としゃべって、英語って、こんなにいろんな人としゃべれるんだってという動機にもなりました。

Q:さらにやっついこうという動機?

E:そうです。本当に英語って使えるんだっていう。

Q:使えるっていうのは。

E:使えるっていうか、伝わるんだっていうか。いろんな国の人たちも、ちゃんと英語勉強して、話そうとして勉強してるんだって。世界に友達が増えたっていうか、一緒に英語を勉強してる。動機が、モチベーションが上がりましたね、留学全体を通して。英語自体は、そこまで上がらなかった印象なんですけど、英語に対するモチベーションは結構、上がりました。

また、これまで英語を苦手としてきた学生Fは、英語に向き合う態度に変化があったことを語った。そのきっかけは、頑張りすぎて、精神的に一番つらかった時に、胃腸炎で入院したことであった。

F:(入院後) 勉強はあんまり追い込んでなかったですね。いつの間にか英語やんなきゃ、じゃなくて、やりたいなってふうになってきたんですね。

Q:なんか変わったのね。

F:変わったのはびっくりしたんですけど、英語ってそんなに歯食いしばってやるもんじゃなかったんだって。

Q:なんで変わったんだろう。

F:一番変わったなって思うのは、外国の人たちが集まるカフェ、(中略)みたいな場所があるんですね、川沿いに。(中略)ネイティブじゃない人、韓国人とか中国人としゃべれたんです。趣味の車で盛り上がりたりできて、通じんの、みたいな。

一方、学生 G は上記 2 名とは逆に、タイでタイ人学生と一緒に英語を学び、毎日英語に触れているうちに、英語が好きであった自分を思い出したという。そして、以前思い描いていたキャビン・アテンダント（以下、CA）になるという目標が浮上し、その後は、その目標に向かうための学習に意欲的に取り組んでいることを語った。

(3) 社会性・人としての成長

新見（2018：34）は留学経験が「個人の社会性や自立心、成熟度合い、自信、自己肯定感などを含む、人としての成長にも影響を与えうる」ことが議論されており、その効果を検証している大規模調査が多いことを指摘した。7名の学生の中でも A、B、E、F が社会性の向上や人としての成長について語った。

まず学生 A は、もともとインドア志向であるが、海外という特別な環境で、ここで動かなければ損をするという気持ちで積極的に動き、実際、得たものがたくさんあったことを語った。それによって帰国後も、これまでは面倒だと思っていたことにも、自分で自分の背中を押す積極性を得たという。

また、もともと自分に自信がなかったという学生 B、E、F は、留学という経験をする中で、自信や自己肯定感が向上したことを語った。例えば学生 B は、留学先で小さな経験を重ねるうちに、自分を持つようになったという。

B：ちょっとうまく言葉にできないんですけど、自分を持つっていうか、そういうのを。

Q：自分を持つ。

B：何かに対して、私はこう思うとか。

Q：自分の意見を持つってこと。

B：（前略）自分の意見を言うとか、私はこう思う、それ好き、それはちょっと苦手とか、そういうふうに表示することが、すごく生活の中で何回も経験できた気がして。ほわほわしていい人、いい人っていうか、ちょっと簡単な人みたいな感じよりかは、もう少しちゃんと芯を持てたかな、芯を持てたっていうか、良くないと思うとか、ちゃんと、私は

こう思うとかっていうふうに、元々思ってたことはあったけど、それを必要以上に隠さなくて、隠さないようになったと思って。だから、そういうことはすごく役に立つのかな。役に立つかっていうか、ちゃんと育てていけば、育てていけば、何かの役に立ってくれるっていうふうに思います。

また学生 E は、大学受験をはじめ、これまで何度も失敗をしてきて自信がなかったが、自分で留学すると決め、行って帰ってきたことで、自信がついたという。そして留学に関する一連の経験では成功が続いているため、ポジティブな感覚を持ち続けていると語った。

学生 F も大学受験の失敗、そして本学入学後にも、いくつも挫折をし、続いていた後ろ向きな感覚を、留学したという事実により封じ込め、前に進めるようになった。

Q：例えば英語に対するコンプレックスとか、あとは入試のとき挫折したこととかは今思うとどうですか。留学でそれを払拭できたと思いますか。

G：払拭することが留学の意義だったと思ってるんで、時々こうやってよみがえってはくるけど、留学したんだからも考えないって。それを乗り越えられなかったら私何のために行ったのよみたいに。

Q：そうか。むしろそう言い聞かせる。

G：そこで一回遮断をできるようになったので。（後略）

(4) 雇用され得る能力

雇用され得る能力について、新見（2018：35）では、「留学後に仕事に実際についた経験を踏まえることなく分析はできない」としているが、本稿の7名は、大学3年生と2年生であり、実際の仕事と結び付けて論ずることができない。本稿では、留学経験を卒業後に有効につなげられるようすることも目的の一つであるため、ここでは学生が留学と卒業後の進路との関連を語った部分に注目する。

まず、学生C、D、Eは留学前から、留学の目的として卒業後を見据えていた。学生Cは、海外と貿易ができる会社への就職を目指し、そのために英語力をつけようとしていた。学生Dは、英語教員になることを目指しており、留学は、そのために英語力を高め、異文化体験することであった。学生Eは心理系の資格を取るために大学院へ進学することを決めており、大学院進学のための英語力をつけることを目指していた。この3名は目標が明確であった。

学生Gはまだ2年生ということもあり、将来については、迷っている状態で留学した。しかし留学中に、教員になることへの迷いに答えを出し、教員ではなくCAを目指すことを決意した。

学生A、B、Fは帰国後、就職活動に留学経験を生かす方法を模索しながら、インタビュー時点ですでに行動を起こしていた。学生Bは英語専攻のため、英語が生かせる仕事に就ければよいと思いつながら、就職課程も履修しており、教員という選択肢もあった。まだ悩んでいるが、とにかく「動いてみる」こと、それは留学準備からの一連の経験から得た積極性であった。

B：すごく考えてると悩み始めちゃって、全然答えが出ないので、だから動いてみようって思ってた。実際に動いてみて、行動が始まったっていうか、どんどんつながっていったっていうことも、やっぱりTOEFLとかの例もあるし、意外とそういうふうにするといいのかなって (後略)。

Q：何か方向、こういう業界に行きたいとか、こういう職種でやっていきたいとか、何かそういうのって希望はあるんですか。

B：英語を使って何かできることがあればいいっていうのは、やっぱりあるんですけど、人と関わるのも好きなので、何か自分にできることを増やしていけるような、(中略) 自分も学んでいくとか、得るものがあるようなことができればいいと思ってるんですけど。だから、教員も完全に捨てたわけではなくて、(中略) 参加できるものには参加して行って、実体験を積んで詰めていこうか、絞っていこ

うかって感じですよ。

学生Fは留学前から就職に対する意識が強く、留学中も就職活動の準備をしていた。3年次後半は、日本にいれば大学の就職ガイダンスを受け、就職活動に向けて動き出す時期であり、留学した学生の中には、就職活動に遅れを取ることを心配する者も多い。学生Fもその一人であった。帰国後すぐに就職活動に動き出しており、すでに1か月以上経っていた。最初の頃は企業で留学経験を話したが、地元企業では評価されず、話さなくなったという。

Q：Fさんは行く前からなんか就職のこととかすごく考えて、就職に向けて。だって、タイで就職試験の勉強。

F：はい。SPI。ずっとやりましたね。

(中略)

Q：なんか留学したことを何か将来の就職に生かそうとか、そういう考えはありますか。

F：それができたら最高だなと思って、インターンシップ行って留学したことを話すっていうのは最初のころはしてたんですけど、この辺の企業ではあんまりそれは評価されないというか。

Q：そう？

F：いまいち。「行動力はある方なんです」とは言われるんですけど、海外に向けてグローバルにやってる所ってあんまり少ないんで。

地元企業が留学経験を積極的に評価していないことが、学生Fによって実感を持って語られた。

(5) 社会貢献

これまで海外留学に関する調査の多くが、留学経験者個人への影響に焦点を当てていた。新見(2018: 38)は、「留学がより一般的になり、国際教育分野に公的な資金が費やされる場面が出てきたことを背景に、留学経験が留学した個人の変化を超え、地域社会や世界全体に与える波及的なインパクトに注目が集まっている」という。そもそも派遣留学は大学間の協定によるもので、派遣先では学費や、大学によっては寮

費が免除され、本学からはすべての派遣留学生に奨学金を出している。それは上述のように、本学のディプロマ・ポリシーに照らして、一人でも多くの学生に海外留学をしてほしいからであり、その経験によって、将来は社会や地域によい影響を与えてほしいからである。しかしこれまで、個人を超えた留学経験の影響が意識されることは、本学教職員の間でもほとんどなかった。インタビュー時点で、筆者にもその意識はなかった。

分析に当たって、その点に注目すると、派遣留学生個人を超えた影響についての語りがいくつか見られた。まず学生Dは、自分の経験を将来の職業と結び付けて、多様な文化に対する寛容さや共生する態度を、教師として子どもたちに伝えていきたいと話した。

D：やっぱり日本人って壁が厚いってうか。

Q：人との？

D：何かそんな気がしません？（カナダで）バスとか乗っても向かい側、こういうふうには席があるんですけど、座っちゃったらみんなしゃべるみたい。な。（中略）やっぱり教師の感じなんですけど、日本って、はぶかれたりするじゃないですか。他の人と違うとちょっと距離を置かれちゃったりするじゃないですか。それカナダで見てきた多様性みたいな、許容する気持ちとかを教員になって教えられたらいいなって思います。

Q：生徒に伝えていきたい、それを。

D：違いじゃなくて個性だよみたいな。

そして学生Eは、派遣留学を本学の多くの学生に経験してほしいと言い、自分の経験をもとに、本学の学生の内向きの姿勢を変え、視野を広げることを強く願い、派遣留学生を増やすために協力したいと語った。また本学に来る交換留学生も助けたいという気持ちを持っていた。学生Fも日本に来る外国人を助けたいと言い、道で困っている外国人がいたら、今なら躊躇なく声をかけるだろうと語った。

6. 考察：学生の留学阻害要因を取り除き留学経験が有効に生かされるために

上記インタビューの目的は、留学経験者が留学を振り返り、自分の人生にその経験を位置づけること、それと同時に、教職員が学生の留学経験をその困難も含めて理解し、後輩学生に留学を勧める材料にすることであった。インタビューを分析する視点とした5つの項目について見ていくと、7名の学生たちは留学経験を、前向きに位置づけることができていた。7名にとって留学は今後の人生につながる貴重な経験であったことがわかる。

そのうえで分析の中で、いくつか特徴的なことがあった。それは、英語を専攻する学生と英語を専攻としない学生との間に、認識の差があったことである。（1）の英語運用能力については、英語専攻生4名はもともと英語が好きであったり、得意であったりして、本学でも毎日のように英語の授業を受けている学生たちであった。そのため留学は、これまで蓄えてきた知識を実践的に使う機会となっていた。ネイティブの発音を聞き、話したり書いたりする部分で、大きな伸びを率直に感じていた。他方、英語を専攻としない3名は、もともと英語に苦手意識があったり、コンプレックスを持っていたりした。実際、1セメスターの留学によってそれをすべて払拭することは難しかった。しかし、それは（2）学業の語りに直結していた。英語運用能力の伸びを率直に感じられなかった3名は、その分、今後の英語学習への意欲、英語学習への態度の変化、英語も含めた将来へ向けての努力の方向性を語っていた。こうした、英語学習や今後の努力に前向きな気持ちで取り組めるようになることは、1セメスターの留学によって得た産物であることは間違いない。英語を専攻する学生は、もともと留学に対する意識が高い学生が多い。むしろ英語を専攻としないことも、1セメスターの留学で、外国語学習に対する態度の変化や、その後の学習に前向きな気持ちを持つことは今後、学生に留学を勧めるために強調すべき点である。

次に、異文化間能力に関する発言は、いずれも「英語運用能力以外に留学で得たものがあったか」という筆者からの問いかけをきっかけに語られたことであっ

た。英語については、すべての学生に、それを学びに行ったという意識があり、筆者から質問しなくても、自然とその話になった。しかし、英語以外に得たものについては、意識的に筆者からの問いかけを行った。学生Aはアメリカの大学で、アメリカ人と一緒に授業を受け、寮でアメリカ人学生と同室になり、アメリカの多層的な文化に浸っていた。また学生CやDはカナダの大学の留学生向けの英語コースに入り、世界中から集まる留学生と一緒に授業を受けていた。カナダではホームステイをするが、ホストファミリーが移民であることも多い。2人はその中で、世界中の人々が持つ文化の多様性を感じていた。いずれも、日本では感じる事のなかった文化を感じる機会となったことがわかる。

また、(3) 社会性・人としての成長に関する語りも、英語以外に留学で得たことを質問した結果、語られたことであった。学生B、E、Gは、これまで自分に自信がなかったり、成功体験が少なかったというが、留学によって、自分に自信をつけたり、負の気持ちを払拭したりできた。他にも、学生Dは、留学中の体験ではないが、留学前に学内選考で選ばれるかどうかかわからない不安な時期についての語りで、これまで失敗ばかりしてきたが、努力の末に派遣留学生に選ばれたことの喜びを語った。これまで筆者がインタビューした本学の派遣留学生は、この7名も含め、ほぼ例外なく、もともとは国立大学や首都圏の全国区の私立大学を志望していたが、第一志望には合格できず、本学に入学した学生である。その挫折をバネに、大学生活で何かをやり遂げるために、留学を目指す学生が多い。本学の学生にとって留学は、本学に入学したことを前向きにとらえ、自分に自信をつけ、今後の人生を前向きに進んでいくための装置にもなっている。その面も本学における留学の効果として強調していく面であると考ええる。

次に(4) 雇用され得る能力に関しては、卒業後の目標と留学との関係が明確であった3名と、留学によって進路の迷いが吹っ切れ目標が定まった学生F、進路への迷いがあるものの留学経験をもとに行動していた3名に分かれた。これについては、約1年後に実施した振り返りシートの記述と、学生たちの実際の進路

とを合わせて考察したい。まず、英語運用能力の面で、留学が進路に結びついたとした学生は、もともと卒業後の目標を明確にして留学していた学生D、Eであった。学生Dは志望していた英語教員になることはできなかったが、英会話学校への就職が決まった。一貫して英語教育関連で就職活動をしていたので、留学経験はどこでもプラスに捉えられたという。また学生Eは大学院進学を決め、そのための英語力を留学で得られたと記述している。

また、学生BとGは英語運用力以外に留学経験で得たものが、就職や進路に向けた態度につながった。学生Bは英語教員の道は選ばず、就職活動の末、県内の企業に就職が決まり、貿易事務をすることになった。もちろん、英語運用能力があつてこそ貿易事務という職に就けたのであるが、いろいろ考えずに「まず動いてみる」という留学で得た積極性が仕事の獲得にもつながったと考えられる。学生Gは振り返りシート記入時、4年生になったところであったが、留学経験を通じて進路を明確にできたことで、無駄な時間を過ごさずに、目標に向かって有効に時間を使うことができていると記述している。学生Gは、留学経験によって目標を明確にできたことが、進路に向けた努力につながっていると言える。

一方、学生CとEについては、2人とも企業から内定を得ていたにもかかわらず、就職をやめ、より自分がやりたいことができる進路を選んだ。学生Cは、以前から趣味として熱心に取り組んでいたフィジカル・トレーニングの専門的な知識を得て、パーソナル・トレーナーを職業としていくことを決意し、卒業後は海外への渡航を計画している。振り返りシートには、留学によって「常に何かに挑戦し続ける」姿勢を得たことが書かれていた。そのきっかけは、留学中に知り合った「友人の境遇や経験を聞き、挑戦することの大切さを知」ったこと、また、友人たちの目標達成への姿勢や態度に感動したから」だという。また学生Eは、以前から車が好きで、内定先も自動車関連の企業であったが、内定を辞退し、自動車整備士になるために卒業と同時に職業訓練学校に入った。卒業時Eと話すと、好きな車に直接触れられる道に進めることを心から喜んでおり、そのような選択ができたのも留学

経験があるからだと自ら語っていた。これまでの本学の派遣留学生の中にも、この2人のように、就職せずに新たな道に進むための勉強を始める者や、いったん就職はするが将来的に起業を目指して計画している学生などがいた。大学卒業と同時に就職し、安定しなければならぬという呪縛から逃れ、リスクがあっても自分がやりたい道に挑戦する姿勢は、留学して日本以外の人々の生き方を見てくるからこそ、生まれるのではないだろうか。こういう人材が、急速に変化していく地域社会にも対応し、支えていけるのではないかと思える。こうした学生が出てくることも海外留学がもたらす効果の一つとして、位置づけられると考える。

最後に、(5) 社会貢献については、インタビュー時、筆者自身も意識した質問をしていなかったため、焦点化した語りを得ることはできなかった。しかし、学生Dは教員になってから異文化体験を生徒に伝えていくこと、学生Eは大学内で、留学での得難い体験を他の学生にも伝えていきたいこと、本学に来る交換留学生を助きたいこと、学生Fは日本で困っている外国人を見たら助きたい気持ちがあることを語った。これらの語りから、学生自身が直接出会える人に、何らかの影響を与えていこうとしているのがわかった。

この項目は、本学が派遣留学によって目指す、社会や地域に貢献できる人材の育成において、最も重要な部分である。そのため、振り返りシートでもう一度、社会貢献に対する姿勢（世の中のためにやりたいこと）を尋ねる質問をした。やはり家族や友人など身近な人、直接出会える人に対する姿勢を書く学生が多かった。ただしその中で、学生Fは、自動車整備士になることを選んだのは、どこでも生きていける技術を身に付け、地元で事業を営み、大きな災害に遭った地元の人々の役に立ちたいからであると書いていた。また学生Gは、インタビューでは語られなかったが、タイで性的マイノリティに出会い、その後、自分自身で理解を深めてきており、性的マイノリティへの理解を世の中に広めていきたいと書いていた。実際Gは2019年度に学内で開かれた英語プレゼンテーションのイベントで、LGBTをテーマにプレゼンテーションをしていた。学生FもGも一定の時を経て、留学経

験を、社会への影響にまで成熟させたと考えられる。こうした成熟を、教職員がサポートしていければ、より多くの学生が、留学経験を社会貢献に結び付けていけるのではないだろうか。

7. まとめ：派遣留学生の指導と増加のために

派遣留学生へのインタビュー調査の結果から、1.2で挙げた本学学生の、留学を阻害する要因のうち、教職員の指導で取り除けるものについて、改めて考えてみる。①②の留学費用の面では、本稿でインタビューした7名の学生は全員、自らのアルバイトの収入を留学資金に充てながらも、不足する分は保護者に負担してもらうことができた。費用の高いアメリカ、カナダは大学からの奨学金も大きく、大学側でもできる限りの支援はしている。それでも、①②の留学費用の面と⑤の英語力の面で、英語圏の留学を諦めざるを得ない学生がおり、さらにその中に、留学したい気持ちはあっても、アジアには方向転換できない学生がいる。そうした学生に、留学経験者の語りから明らかになったように、アジアであっても英語力のみならず、英語学習に向き合う姿勢や学習意欲への良い影響があること、分析の視点で挙げたような留学経験によるプラスの効果は、英語圏でもアジアでも同様にあることを強調していきたい。また、③の就職に関連して、学生B、D、Gは教職課程を履修する学生であったが、学生B、Dは教育実習を4年次に行い、教職免許を取得した。学生Gは3年次の履修科目との関係で2年次での留学を決意し、1年次の終わりから行動し、2年次の必修科目を3年次に履修できるように、学科教員に協力してもらった。留学を少しでも考えるなら、資格や就職活動への影響を考慮して、1年次から計画的に動くべきことを、入学直後から働きかけていくことが、派遣留学生を増やすことにつながる事がわかる。さらに④の企業の留学経験の評価について学生Fは、地元企業でのインターンシップで、留学経験を話しても評価されず、話さなくなったと語った。もちろん、グローバルな展開をしている企業や、学生Dのように英語教育関連の企業に就職しようとするなら、留学経験を自己アピールの内容にしやすだろう。しかし、どのような企業でも、ただ「留学した」というだけでは

アピールにならない。留学で何を学んだか、どのような経験をして、どう成長したかを、企業に合わせて説明していくことができれば、留学経験が評価されないはずはない。ただしそれには、教職員のサポートも必要である。

最後に⑤語学力については、特に英語圏に留学するための英語力は国際センターを中心に、現在も様々なサポートがあり、これまでも学生たちは利用している。アジアへの留学にも、学内の基準があり、どこに留学するとしても、語学学習の努力は必要である。それを支えていくことは今後も教職員がやるべきことである。一方で、大学受験で国立大学や全国区の私立大学を目指していたが、結果的に本学に入学した学生の中には、派遣留学の基準を上回る英語力をすでに持っている学生がいる。そのような学生に対して、派遣留学が自分自身や本学に入学したことを肯定する装置となりうることを、教職員が積極的に働きかけていけば、学生がよりよい未来を拓き、同時に大学として、派遣留学生を増やすことにもつながるだろう。

以上から、①教職員が派遣留学生をどのように指導していくか、②派遣留学生を増やすためにどのような働きかけを行っていくかをまとめる。

- ① 学生が留学経験を留学後の学生生活、卒業後の進路にどう生かすか、さらにどのように社会貢献につないでいくか考える機会を、留学前、留学中、留学後に作り、学生と教職員とが対話していく。その中で、教職員も学生の経験を理解し、学生と共に留学経験の意味づけを行う。また、学生同士が考えを共有する機会、先輩の事例を知る機会を作り、共に留学経験の意味づけ方を学んでいく。さらに、卒業前にもう一度、留学経験を振り返る機会を作り、その時点で留学経験を人生に位置づけ、卒業後につなげ、それを後の学生の参考にもしていく。
- ② 1年次の早い段階から、派遣留学の可能性を提示し、計画を立てて準備するように指導する。また、英語圏以外の留学の効果、英語専攻生以外の学生にとっての留学の効果、就職における留学の効果、学生に伝えていく。特に、本学を第一志望としていなかった学生に、留学の今後の人生への効果を強調する。

本学の学生は決して「内向き志向」ではない。多くの学生が入学直後には留学を夢見ている。しかし実際には、ほとんどの学生が留学を諦める結果となる。教職員の指導や働きかけで、できる限り留学を阻害する要因を取り除き、留学に結びつけたい。そのためには、学生への働き掛けだけでなく、奨学金などのさらなる支援を、大学内の制度として整備するとともに、大学外の競争的な奨学金を獲得していくことも、教職員がなすべきことである。

参考文献

- 飯野令子 (2019) 日本人学生の留学経験の意味づけ—派遣留学を担当する大学教職員ができること—『留学交流』Vol.95, pp.19-25
- 岩城奈巳 (2014) 「渡航前、渡航中、渡航後の振り返りから考える交換留学に対する意識調査」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』創刊号, pp.27-32
- 岩城奈巳 (2017) 「交換留学決定後から出発までの学生支援に関する考察」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』第4号, pp.27-33
- 岩城奈巳 (2020) 「学生が留学を決定する要因についての一考察」『名古屋高等教育研究』第20号, pp.413-424
- 太田浩 (2018) 「日本の海外留学促進政策の変遷」横田雅弘・太田浩・新見有紀子編『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト—大規模調査による留学の効果測定—』学文社, pp.2-28
- 大津理香・佐竹正夫 (2016a) 「短期海外語学研修の効果—先行研究と常磐大学の事例—」『常磐国際紀要』第20号, pp.123-146
- 大津理香・佐竹正夫 (2016b) 「短期海外語学研修はどれほどの効果があるのか—常磐大学の場合—」『留学交流』Vol.65, pp.16-24
- 学校法人河合塾 (2018) 『平成29年度文部科学省委託事業「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」成果報告書』
- 小林元気 (2017) 「若年層の『内向き』イメージの社会的構成プロセスと海外留学の変容」『留学生教育』22, pp.59-68
- 新見有紀子 (2016) 「短期海外留学経験が就職・進路

に関する意識に与える影響について―帰国後インタビューからの考察』『留学生交流・指導研究』18、pp.31-44

新見有紀子（2018）「留学のインパクトに関する国内外の研究概要」横田雅弘・太田浩・新見有紀子編『留学経験がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定―』学文社、pp.29-47

芹沢真五（2013）「日本の学生国際交流政策―戦略的留学生リクルートとグローバル人材育成―」横田雅弘・小林明編『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社、pp.13-38

日本学生支援機構（2019）『平成30年度海外留学経験者追跡調査報告書―海外留学に関するアンケート―』

日本学生支援機構（2020）『2018（平成30）年度日本人学生留学状況調査結果』

文部科学省（2020）『「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について』

前田ひとみ（2017）「個人別態度構造分析による日本人学生の海外留学における学び」『高等教育研究』第23号、pp.1-10

やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味―ライフストーリーの心理学―」やまだようこ編著『人生を物語る―生成のライフストーリー―』ミネルヴァ書房、pp.1-38

横田雅弘・太田浩・新見有紀子編（2018）『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定―』学文社

横田雅弘・小林明編（2013）『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社

リクルート（2019）『進学センサス―高校生の進路選択に関する調査―』

「近代」移行期の東アジア知識人の人的ネットワークについての基礎研究(四) ——「韓人筆話」をめぐって——

崔 蘭英 (常磐大学人間科学部)
北原スマ子 (日本女子大学)

A Fundamental Research on the Human Network of Intellectuals in East Asia from the Transitional Stage to “Modern Times”: Focusing on the “Kanjin Hitsuwa” (韓人筆話)

Lanying CUI (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)
Sumako KITAHARA (*Japan Women's University*)

Abstract

This paper is a part of the joint research, “*A fundamental research on the human network of intellectuals in East Asia from the transitional stage to ‘modern times.’*” The authors previously conducted a study on the Second Missionary from Korea to Japan (第二次修信使) through tracing their stay in 1880. In this study, we have clarified that the Korea Missionary who had been dispatched as a formal diplomatic delegation was not only an acquaintance with Japanese Ministry of Foreign Affairs bureaucrats and the members of the Qing Embassy, but also met with the civilian intellectuals of Japan and China through multiple connections. The intellectuals met each other and communicated by writing in Chinese characters. One of those written conversation records, called “*Kanjin Hitsuwa*” (韓人筆話), was kept by Teruna Okochi and is introduced for the first time in this paper. The introduction of new records was not the only achievement of this study, more importantly it reveals how the intellectuals built and rejected relationships at the same time. There were selections within the human network of intellectuals that went unnoticed until now.

I. はじめに

著者たちは前稿において、1880年に日本に派遣された第二次修信使金弘集一行の日本滞在中の行動を跡付けた。その成果として、朝鮮の公式な外交使節として日本に派遣されてきた第二次修信使が、公的な場で日本の外務省官僚や、清国の公使館館員と付き合いがあったほか、興亜会や宮島誠一郎、大河内輝声らを通じて、日清の民間人とも重層的な交流をしていたこと

を明らかにした。日本・清・朝鮮の三国の知識人たちが初めて一堂に会して交流したこととなる。こうした交流から生まれた人的ネットワークは共通の漢字文化を基に、筆談によって築かれたことも指摘したところである。¹

明治初期の日本人と清国人との筆談についての研究はいくつか見られるが、朝鮮人との筆談についての論考はわずか数編程度にとどまっている。管見の限り、

1881年5月に来日した「紳士遊覧団」メンバーとの筆談を取り上げたもの以外にはないものと思われる²。「紳士遊覧団」は、朝鮮政府が明治維新以後の日本の開化政策の実情調査のために派遣した視察団のことである。メンバーは日本滞在中、政治・経済・文化など多岐にわたって調査し、明治政府の要人と会見した。彼らが帰国後、朝鮮政府内における開化派として近代化政策を推進したとされている。そのため、これまでの論考は当時の知識人が両国関係をどう認識していたのか、とりわけ明治日本の「近代化」が朝鮮の人々の目にどのように映って、朝鮮の近代化にどう影響したのかという点を中心に考察している。

しかし著者たちが前稿で指摘したように、现阶段で確認できる日本の民間人と朝鮮人との最初の筆談資料は、「紳士遊覧団」より先に、1880年に来日した第二次修信使一行のものである。一点目は『宮島誠一郎関係文書』の一部で、1880年8月29日（陰暦7月24日）に宮島が花房義質朝鮮弁理公使の主催する宴会に参加した時と、9月1日（陰暦7月27日）に修信使の宿所（東本願寺）を訪れた時に、それぞれ交わされたものである。³二点目は大河内輝声が保存した筆談資料「大河内文書」に含まれている「韓人筆話」である。これには1880年8月27日（陰暦7月22日）から9月6日（陰暦8月2日）までの10日の間に行われた懇談の記録と書信などが収録されている。「韓人筆話」は1876年朝鮮と日本との間に「日朝修好条規」（「江華島条約」）が締結されて、両国の新しい外交関係が始まってからの日本の民間知識人と朝鮮修信使との交流を初めて記録したものであり、そして日朝のほか、ここに清の知識人も加わっていたため、日朝のみならず、近代東アジア三国の文化交流を知るうえで大変貴重な資料であると言える。それにもかかわらず、これまで研究に使用されることがなかった。

前稿ではその一部要点を紹介したが、本稿では、「韓人筆話」の内容を詳しく分析し、近代黎明期における日・清・朝の三国の知識人たちが具体的に漢文、漢詩を駆使してどのように交流し、またどのように人的ネットワークを築いていたのかを検討する。

Ⅱ. 大河内輝声と「韓人筆話」

1. 大河内輝声・「大河内文書」

まず、大河内輝声と「大河内文書」について紹介しておく。大河内輝声は元高崎藩藩主で、松平輝声のことである。1848年に生まれ、1882年に34歳の若さで亡くなっている。大河内氏は源頼政⁴の後裔で、すなわち源氏である。輝声は墨水逸人と桂閣という号があることから、源桂閣と名乗ることがある。1860年13歳で家督を相続し、1867年陸軍奉行並に命じられ、フランス人士官の下で兵術を学んだ経験がある。明治維新後に高崎藩知事に任命されるが、1871年に廃藩置県を迎えて政治の場から離れ、華族として輝声は浅草今戸町にある自邸の桂林荘に住み、大学南校で英語を学び、文雅の世界に遊んだと言う。

輝声が初めて清国公使館で公使の何如璋⁵、副使の張斯桂⁶らと筆談を交わしたのは1878年2月25日のことで、それから毎日のように公使館に通い、館員たちと筆談をするようになったのである。時には友人と一緒に訪ねて行き、花見や宴会に興じることもあった。筆談の話題は政治や時事相から日清両国の風習、食べ物や生活習慣、果てはトイレ談義まで、余すところなかった。公使館員の中では参贊官の黄遵憲⁷、随員の沈文燾⁸との筆談がもっとも多く、現在これは日中の文化交流の様相を知るうえで貴重な資料として知られている。これはひとえに輝声が筆談を大事に整理し、保存したからである。

輝声は筆談を交わした状況が分かるように、帰宅後に几帳面に赤で筆談者の名前、場所、場面などについて説明を書き入れて、さらに番号をつけて丁寧に整理した。輝声は筆談を大事にするあまり、時にはくず箱に放り投げられた筆談を拾うことや、「奪う」こともあったと言う。その一例をあげると、1878年3月23日、輝声が清国公使館に沈文燾を訪ねた時のことだが、ちょうど漢学者の青山延寿⁹が先に来ていて、何如璋、張斯桂、黄遵憲と四人で筆談をしていた。ここで延寿の筆談を見た輝声は、「奪去無妨乎」（奪っても良いか）と聞くと、黄遵憲は「此紙也日以擲、還為幸」（このような紙は毎日捨てているから、かえって幸いである）と答えたので、輝声は延寿の筆談を「奪って」帰宅した後、自分の筆談の後に貼り付けたと言う。¹⁰

残念なことに、桃色の巻紙で書かれた青山延寿の筆談が収録された巻は散逸しており、このことは実藤恵秀氏による筆写記録で確認できるだけである。当時早稲田大学教授だった実藤恵秀氏は輝声の保管した膨大な筆談集を世に紹介し、「大河内文書」と名付けた。¹¹

現存の筆談集は、大東文化大学図書館に51巻50冊、早稲田大学図書館に16巻16冊、頼政神社に6巻6冊が所蔵されているほか、実藤の抄本が5巻4冊で、計78巻76冊になる。各地に分散して保存されているこれらの資料は、2016年に出版された影印本『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』¹²に、およそ時系列で収録されている。その構成と内容は下記のようになっている。

(一)「羅源帖」、1875年9月3日から1876年8月22日までの間の、大河内輝声と清末の画家である羅雪谷¹³との筆談録。

(二)「丁丑筆話」、1877年7月7日から12月31日までの間の、大河内輝声と王治本¹⁴、王仁乾¹⁵、王藩清¹⁶ら清から来日中の民間知識人との筆談録。

(三)「戊寅筆話」、1878年1月2日から12月15日までの筆談録。日本側の筆談者は大河内輝声、石川鴻齋¹⁷、亀谷省軒¹⁸、増田貢¹⁹、青山延寿、加藤桜老²⁰、森春濤²¹などの漢学者で、中国側には何如璋、張斯桂、黄遵憲、沈文榮ら公使館員のほか、民間人の王治本、王藩清、王仁乾などがある。

(四)「己卯筆話」、1878年12月31日から1879年12月31日までの筆談録。筆談者に大河内輝声、石川鴻齋、亀谷省軒らと黄遵憲、沈文榮ら公使館員、そして民間人の王治本、王藩清、王仁乾などがある。

(五)「庚辰筆話」、1880年1月1日から5月26日までの筆談録。筆談者は(四)と同じ。

(六)「泰園筆話」、1880年5月10日から1881年10月13日までの筆談録。筆談者は大河内輝声と王治本が中心である。王治本は輝声と最も親しくしていた人物で、1880年5月から輝声の家に住んでいた。「泰園筆話」は二人がこの間に交わした筆談である。

(七)「韓人筆話」、1880年8月27日から9月6日までの第二次修信使金弘集一行との筆談録。以下に詳細を述べる。

(八)「書画筆話」、王治本による大河内輝声の詩作

添削が中心の筆談録。

以上のように八部からなる『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』の出版によって、大河内輝声の所蔵する筆談録の全容がわかるようになった。ただ、そのほとんどが清国人との筆談であるが、唯一朝鮮の人々との交流を記録したのが(七)「韓人筆話」である。次に、この「韓人筆話」について、その体裁などを簡単に紹介しておく。

2. 「韓人筆話」の誕生

『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』に収録されている「韓人筆話」は、影印資料であるため、その分量を表わすことは難しいが、総ページ数3714頁のうちの3614～3667頁の部分で、54頁分である。すなわち全体の1.5%に満たないことになる。しかし量的には少なくとも、輝声と彼の周辺の人々はその価値を評価していたと考えられる。なぜならば、輝声の墓前には亀谷省軒撰の碑文があり、そこに亀谷が「詩数巻 清韓筆話百卷 家に蔵す」²²と、輝声の所蔵する筆話に「韓」のものがあると取って記しているからである。彼らにとって、朝鮮の第二次修信使一行との懇談は特筆すべきものであったのであろう。

「韓人筆話」の原本は大東文化大学図書館に所蔵されている。題箋に「韓人筆話 全」とあって、横に長い紙を一冊の折本にしている状態で、52面からなっている。紙に直接書き込んだ部分もあるが、上に貼り付けた部分が圧倒的に多い。同資料の所蔵経緯については不明となっており、またいつ、どのように製本されたのか、その詳細も分かっていない。そこで、実藤恵秀氏が輝声の資料整理について記述したものを参照したい。それは加藤桜老と王治本が筆談した時のものだが、このように述べられている。

「輝声は美濃判の紙を たくさん たずさえて いる。さっそく それをだして つかってもら う。すんだあとは すべてを もってかえり、その夜かならず それを整理する。 はなしの順序をおもいだし、そのように紙の順序をきめ、紙に番号をつけておく。それから朱筆で、人の出入り、料理のぐあいなど いわゆる「とがき」を

かきいれておく。それが一冊分ほどたまと表具師をよんでうらうちをし折本仕立てにして表紙をつけさせる。これに題字をかくのも輝声のたのしみのひとつである。」²³

とあるように、輝声は自ら紙を用意して行き、筆談の後にまたそれを持ち帰って整理し、さらに裏打ちをして製本していることが分かる。「韓人筆話」にもこれと同じことが見られる。まずは朱筆で大きく壺、貳と下部に番号が付けられていることが目に留まる。そして筆談の状況が分かるように「庚辰八月廿七日対馬旧守宗重正 朝鮮修信使金宏集 随員李容肅 李祖淵」と筆談者の名前や日付などの情報が書き入れられている。また、長い筆談には順番を示すための番号（長いものには四十までである）が上部に振られている。さらに、筆談者の名前を一字で略して、発話ごとに、たとえば金弘集は「宏」、李容肅は「容」、李祖淵は「祖」というように記し、ところどころ発言の終わりを示すために片鉤カッコのような記号も付けられている。これらの「ト書き」はすべて朱筆である。

前述したように、「韓人筆話」は1880年8月27日から始まっていて、9月6日までの日付が書かれているが、中の朱筆番号に従えば、8点の資料がある。そのうち5点が筆談記録で、残りの3点は書信およびその草稿である。

次章では、順を追ってこの8点の資料の内容を詳細に検討していく。なお、この筆話の内容と当時の状況を補完するために、輝声と王治本の筆談を中心とする「茶園筆話」の同時期の記録を参考にする。

Ⅲ. 「韓人筆話」の世界とその周辺

1. (壺) 8月27日

第二次修信使一行は8月11日に東京に到着し、外務省を訪ねるなど公務を遂行したのち、8月20日に黄遵憲らと会い、初めて清国公使館員と接触した。27日に輝声は修信使一行と初対面を果たすが、引き合わせてくれたのは輝声が親しくしていた黄遵憲ではなく、旧対馬藩主の宗重正であった。この日に筆談に登場した日本人には、ほかに亀谷省軒、浅田宗伯²⁴、清川菴軒²⁵がいて、朝鮮側は修信使正使の金弘集、随

員の李容肅、李祖淵、金允善、卞鐘夔であった。

先に上記の筆談に参加した朝鮮側の人物を紹介すると、金弘集（1842～1896）は、初名が宏集、号は道園・以政学齋、本貫は慶州である。筆談では「金宏集」を用いている。この後になるが、アメリカ、イギリス、ドイツとの通商条約、日本との済物浦条約、朝清商民水陸貿易章程など主要な対外条約締結に関わり、1880年代から閔氏政権のもとで穩健開化派の中心人物として活躍する。

この修信使一行に副使、従事官がいな中で、正使の次位にあった漢学訳官の李容肅（1818～？）は、字が敬之、号は菊人、本貫は全州である。訳官として頻りに清を訪れていたほか、第一次修信使にも同行して来日するなど、1860年代から80年代にわたり長く朝鮮の対外交渉に携わっていた。このような経歴から清の文人や官員と広く交遊し、多くの詩文を唱和したことが分かっている。²⁶

李祖淵（1843～1884）は、字が浣西、本貫は延安である。この時の官職は司憲府監察で正6品である。翌81年第三次修信使正使の趙秉鎬に従事官として同行し、関税交渉にあたり、82年の清との通商交渉にも関わったが、84年甲申政変の際に殺害された。

金允善（1836～？）は、字が敬中・谿南、本貫は青陽である。李容肅と同様に訳官であるが、漢学ではなく倭学である。彼は第三次修信使にも同行して再度来日した。

卞鐘夔については、字が禹軒であること以外は不明である。

ところで筆談の冒頭、輝声が遠来の一行に会うことを心待ちにしていたことと、宗重正のおかげで願いが叶ったと述べていることから、この日の面会を仲立ちしたのは宗重正と断定して問題ないが、重正自身の筆談は収録されていない。そして、前日の26日の輝声と王治本との筆談には、明日宗氏が家に朝鮮人を招待すると書いてある亀谷（亀谷省軒）からの手紙についての記述があった。桂閣（輝声）もここに招かれていて、時刻は午後「二時三時」と記されているため、この日に金弘集一行を歓待する宴会が行われたのは、午後二時頃、宗氏の家であったと推定する。ちなみにこの日、修信使一行は宮島誠一郎の案内で浅草

文庫を見学していたが、ここには宮島の筆談もないので、宮島はこの宴席に参加していないと思われる。一方、「韓人筆話」に記録はないが、輝声の後日談によると、この時は対馬藩の通訳(通辯)の浦瀬が同席して通訳していたと言う。²⁷

さて、この日の筆談であるが、輝声の振ったページ数も40にまで及ぶ。従って、ここでは対談者ごとに順に、以下のように①から⑥に区分してその概要を紹介しながら、内容を検討していく。

① 輝声×金弘集

輝声はまず先祖(6代前の輝高)が朝鮮通信使と交流があったこと(1764年に来日の副使李元培のことであろう)²⁸を伝えて、朝鮮の服制が「先王之法」を守っていることについて「欣慕之至」と敬意を表した。

続けて輝声は何如璋らの清国公使館員と親しいことを述べ、自分の家に寓居している清国人秀才王治本が常に「貴邦尚巍然存古風」と称賛し、彼が会いたがっていると伝えた。

この王治本であるが、1877年に来日し、当初は広部精²⁹によって開設された中国語学校の日清社、中村正直の同人社で中国語教師を務め、のち駐日清国公使館の学習翻訳生や神戸領事館の随員にもなった人物で、第二次修信使たちが来日していた頃は輝声の家に居候していた。

これに対して金は、公使何如璋と副使張斯桂にはすでに面会したと伝え、王治本に会えるのはうれしいことだが、ただ自分が拙くて申し訳ないと謙虚に応じた。

輝声はまた隅田川を遊覧した後に自宅へ来てくれるようにと招請したが、金弘集はやんわりとそれを断った。

二人はこうして初対面らしく、礼儀正しく遠慮がちに会話を交わした。筆談は次に李容肅とのそれに進んでいく。

② 輝声×李容肅

輝声は李容肅が幾度も清に渡って来たことを知ると、李に知り合った清国人にどんな人物がいるかと

質問した。これに対して李容肅は、これまでに16回にわたって清に赴いたことと、交遊のあった清の文人10人の名前を一文字も間違えることなく逐一丁寧に書き記した。³⁰

輝声は何如璋から燕京(北京)のことをよく聞いていたので、「不堪傾慕」と言い、自分もいずれは清に行ってみたいと述べる。そして高齢にも関わらず頗る元気でいらっしやると李容肅を称賛したところで、次の話題に移った。相手は李容肅から再び金弘集に戻る。

③ 輝声×金弘集

輝声が朝鮮通信使製述官として1636年に来日した権菊軒³¹と漢詩人石川丈山³²、そして林春斎³³との間の筆談集を所蔵していると話し、金弘集にそこに跋文を書いてほしいと依頼した。³⁴しかし金弘集はそれをすでに花房義質朝鮮弁理公使のところで見たと伝えて、跋文についても引き受けなかった。それを聞いた輝声がどのように反応したのかについては、ここには記されていないが、同じ筆談集が二つあるというこの話のことを輝声がどれほど気にかけてかは、その後、その真贋について王治本に何度も相談していたことから想像に難くない。「黍園筆話」の翌28日の記録を見ると、輝声はさっそく二つの筆談集があるということなどあり得ないことだとか、たとえ石川丈山がのちに書き写したとしても朝鮮通信使と一緒に写すはずがないなどと王治本に愚痴っていた。そしてそこに「自祖宗伝来」と大きく書いていたのである。³⁵

輝声と金弘集の会話は続き、名高い漢学者で友人の亀谷省軒の話に移った。輝声は省軒と親密な関係であると述べ、後日一緒に金弘集を訪ねてゆっくり話したいと提案した。金弘集は省軒の詩文を久しく「嘆誦」しており、「若得日晤、何幸々」と応答した。ちなみに亀谷省軒はこの後すぐに筆談に加わって来る。また、金弘集と亀谷省軒は二日後の8月29日に、飛鳥山にある洪沢栄一の別荘で行われた花房朝鮮弁理公使主催の宴会でも会い、詩の唱和をしている。

次の話題は高麗陶器についてである。輝声は祖先

（外祖父の源不昧、雲州太守）の所蔵していた高麗こまかい熊川茶わんを譲り受けたが、その価値を分からずにいるので、随員の中にこれを鑑別できる人がいないかと尋ねると、金弘集は少々困惑気味に、骨董品を鑑定できる者はいないと答えた。そして次の筆談にかわる。ここから筆談者が急に増え、そして詩作が始まる。

④ 輝声・浅田宗伯・亀谷省軒・清川菖軒×李祖淵・金弘集・李容肅・金允善・卞鐘夔

まず登場したのは浅田宗伯である。宗伯の自己紹介が記された後の場所に、金弘集に贈った七言律詩が貼り付けてある。この詩はソウル大学図書館奎章閣が所蔵している「朝鮮国修信使金道園関係集」の中に、金弘集による記録として「宗氏邸席上恭呈朝鮮星使金君 浅田惟常」という題で収録されているもの³⁶とほぼ同じであるが、表現に若干の相違がある。金弘集の記録した詩文は以下の通りである。

尊熟鱸肥正報秋 遙来星使此淹留
如今始下陳蕃榻、到處勝登庾亮樓、
船去鷄林鵬影暗 夢遶蓬島鯨波収
壯觀應鼓駭人思 鮫玉璫々耀遠遊

下線の部分は「韓人筆話」の原文と異なるところである。筆談では、「尊熟鱸肥」が「撼地洪濤」に、「始」が「方」になっている。また、「勝」の横に「堪」を、「璫」の斜め上に「淵」と小さく書き足している。「鷄林」のところが「琉球」となっているが、その横に小さく「鷄林」と書いてある。もとは琉球に書く予定の詩であったのか。

続いて亀谷省軒が登場して来た。李祖淵は朝鮮の皆が省軒とその著作『清史覽要』を知っていると仰い、「当代鉅公」と称賛するなどすると、ここで一気に座が盛り上がった。そこで李祖淵は日本で会いたい人物として、増田貢、そして晴湖、雪江の名前を挙げた。

増田貢は著名な漢学者であり、『唐宋八家叢話』など漢籍に関する編著書が多数ある。この時は東京高等師範漢文教諭を務めていた。王韜の『扶桑遊

記』は1879年に出版されているが、そこには、増田の自宅の「四壁所懸、多朝鮮人字画」³⁷と、朝鮮人が書いた掛け軸がたくさんあると書いてある。このことから、増田は以前から朝鮮の人々と交流があったのではないかと思われるが、これは1876年に来日した第一次修信使の可能性が一番高いと考えられる。

晴湖（1837～1913）は奥原晴湖のことで、清の画家鄭板橋に私淑した女流南画家である。木戸孝允の庇護を得て、多くの文人と交流した。ここでは晴湖については何も語られることがなかったのであるが、二日後の29日に、輝声は王治本、石川鴻斎に晴湖の容姿を聞いているので、晴湖のことを知らなかったのであろう。しかし二人はすぐに答えられたことから、晴湖は当時、名が知られていたのであろう。³⁸

雪江は幕末の福井藩士の中根雪江（1807～1877）、または関雪江（1827～1877）のことであろうか、多く語られていないため、どちらのことか判断し難い。中根雪江はペリー来航以後、一橋慶喜擁立運動を補佐し、『昨夢紀事』、『再夢紀事』、『丁卯日記』、『戊辰日記』を著した人物である。一方、関雪江は有名な書家で、亀谷省軒、森春濤と並んで1881年版の「古今名家改正南画一覽」に掲載されている。³⁹名は思敬、字は鉄卿で、詩集『雪香樓詩鈔』などを著している。残念ながら亀谷省軒が「已歿」と言ったようにどちらの雪江もすでに亡くなっていた。

それから、省軒は大河内の家系を修信使一行に紹介した。それを聞いた李祖淵は「靈芝醜泉 自有根源」と称賛し、ここで輝声と初めてあいさつを交わすと、すぐに揮毫を頼まれた。李祖淵、李容肅が写した書を見て輝声は「詩新穎 筆遒勁」（詩が清新で筆が雄々しく力強い）として、家宝にすと言った。ところが、自分は揮毫を頼まれても固辞する。ここに清川菖軒が作った詩が書かれているので、代わりに詠んでくれたのかもしれないが、それを李容肅も李祖淵も絶賛しているので、礼的な配慮もあったのであろうか。

この後に金允善（谿南）、卞鐘夔（禹軒）の名前

が書かれているが、筆談そのものは記載されていない。しばらくすると、権菊軒と林春斎がもう一度話題にのぼってきた。金弘集と李容肅がそれぞれこの二人をどのような人物であると認識しているかということについて話した後、金弘集は林羅山、春斎父子の子孫の近況を尋ねた。輝声は凋落しているようだと言ったところ、一同慨嘆する。

金弘集は続いて林春斎がなぜ名高いかと聞いたが、省軒は『本朝通鑑』の上梓をその理由として挙げた。金弘集はさらに徂徠（荻生徂徠）と雨森（雨森芳洲）の後継者について聞いた。省軒は二人とも子孫の消息がないと答え、近代の「雄者」は少なくないと言ったところ、金弘集は高い関心を示してその詳細について尋ねた。そこで、省軒は「四、五十年來、以経義鳴為太田錦城⁴⁰、以史学経世鳴者為頼山陽⁴¹、其他如佐藤一斎⁴²、塩谷宕陰⁴³、斎藤拙堂⁴⁴、不遑縷述、近年有安井仲平⁴⁵著『左氏輯釈』、『論語集説』、『管子纂註』以關異端」と、次々と儒学者の名前を挙げ、また安井息軒については著書も紹介したのである。そこで金弘集は安井息軒については、健在であるかと尋ねた。省軒は四、五年前にすでに亡くなった（已婦道山）と答えて、その著作を「排斥異端、不遺余力」と評して、金弘集にそれを読んだことがあるかと尋ねた。安井息軒は黒船の来航による混乱の中、幕府攘夷派の中心人物であった水戸斉昭に意見を求められ、『海防私議』『靖海問答』などを上書したことで知られている。これに対し、金弘集はその著作を読んだことがあって、「其論極明正」だと述べた。この会話を見る限り、金弘集は安井息軒の攘夷論に共感しているようであった。

そこで輝声は重野安繹⁴⁶、川田甕江⁴⁷の名を挙げて、話は儒学者の線で盛り上がっていった。また儒学への関心からか、金弘集は斯文会と興亜会のことについても尋ねた。周知のように、斯文会は1880年、岩倉具視、谷干城らが儒学の復興と東洋の学術文化の交流を目的に創設した「斯文学会」のことで、興亜会は1880年2月に西洋列強のアジア侵略に対抗し、アジア諸国の連帯によるアジアの振興を主たる目的として設立された団体である。省軒は日本で

「奉洋説」（西洋を信奉する風潮）が多いけれど、「斯文」（東洋の学問）を尊ぶ者はなお数千万人がいるとし、儒学の振興を力説していた。

⑤ 亀谷省軒×李容肅

まだ筆談の途中であるが、ここに省軒と李容肅との筆談が貼り付けられている。内容を見ると、二人はなんと五年（正確には四年）振りの再会だと懐かしそうに言っている。どうやら李容肅は、1876年に第一次修信使の随員として来日した際、省軒と会っていたようである。省軒は李容肅に詩を贈り、また一行の中にいる姜氏（姜瑋⁴⁸）が詩文に長けていると聞いたことがあると言うと、李容肅は姜瑋のことを「抱負非輕」と紹介した。すると省軒は、姜秋琴（姜瑋の号）の弟子である池松村（錫永の号）⁴⁹を「才学翩翩、亦佳士也」と高く評価した。つまり、省軒は池錫永のことをすでに知っていたのである。池錫永はこの第二次修信使に随員として来日しているが、何らかのことで李容肅より先に省軒と接点を持っていて、そのうえ省軒に大変好印象を与えたようであった。

省軒は「方今多事、虎視眈々」という状況を憂慮しているので、一度輝声と一緒に、修信使たちの宿所（東本願寺）を訪問して思い切り話をしたい（「以吐万丈」と言った。李容肅は省軒の文集がほしいと頼み、清国公使館に行った時に王韜の『扶桑遊記』を見たところ、二人の筆談は終わり、また輝声と金弘集との筆談に戻っている。数年振りに会う省軒と李容肅の筆談は、他の人たちのそれに比べて少し深い内容であったと言えよう。

⑥ 輝声×金弘集

この日最後の輝声と金弘集の話題は、また王治本のことになり、輝声は今度宿所を訪問する時には王秀才（王治本のこと）と一緒にかまわないかと確認している。金弘集が「幸甚」としたところで、続けてすぐに輝声の筆跡で王治本の経歴、人となりを書かれている。やはり輝声はどうしても王治本を修信使たちに引き合わせたかったようである。

この日の筆談を通して、日朝両国の知識人たちが

交互に筆談して、話の輪を広げていくうちに、徐々に打ち解けて賑やかな交流になったことを伺い知ることができる。

2. (貳) 8月28日

明るく日、輝声はさっそく石川丈山と権菊軒との間に交わされた筆談集を持って本願寺を訪れ、金弘集、李祖淵、姜瑋の三人と筆談した。輝声はここで生姜湯を出してもらった。

そして前日にも依頼して断わられたことであるが、輝声は持参した丈山らの筆談集への跋文を再度金弘集に依頼した。すると金弘集はそれに応えず花房公使のところで見つけた筆談と酷似しているから、同じものが二つあることはあり得ないのだがと述べたが、一方、一同はこれは立派なものなので、きっと本物であろうと言ってくれたのであった。金弘集は「日本人愛護我人筆墨如此、使数百年後奉使者、獲観古人手迹凶吏之刊、其意誠可感已。隣好之摯、自昔伊然、吾輩可不以是交勉乎哉」と花房所蔵の筆談集の後ろに書いているように、彼は輝声の祖先が翻刻したものであろうと見てはいたようだが、日本人が数百年の間それを大事にしていたことに着目して、善隣友好の至りは昔からそうであったので、自分たちもまたそのように交わりつとめなければならぬと思ったのであった。また、余談ではあるが、1878年8月18日付の「戊寅筆話」では、輝声は知人の紀鹿洲宅にて、紀氏所蔵の「鷄林の手簡」を鑑賞したとの記録があることから、朝鮮人の文墨を大事にしていることは確かであろう。

輝声はそこで「僕蔵清人筆話帖、已百有餘卷」と清国人との筆談がすでに100巻を超えているが、なお筆談に励むのは丈山らの遺志を受け継ぐためであると言って、一行に揮毫を依頼した。ところで、この日に筆談した姜瑋は石川丈山のことを知らなかったようで、そこで丈山について詳しく聞くこととなった。

姜瑋はその評判を省軒も耳にしたほど詩文の才で名高い詩人、文学者であった。輝声も姜瑋の文章を「佳篇」と称賛し、借りて書き写したいと願いつたが、姜瑋は自分の文筆が塗鴉なもので、書の勉強なら石川などの筆談集を習えば良いと断った。それでも輝声は引き下がるので、数日後に書をしたためる約束をし

た。

こうして輝声は一人で訪ねて行って、跋文や書を頼んでも断られるばかりであったため、この日の状況について、輝声はまるで三国演義の中の「虎牢関の戦いに挑んだ呂布」だと自嘲して王治本に語った。

また、すでに繰り返し依頼していたが、輝声はこの日も清国人王治本と一緒に面会したいと申し出た。

王治本は詩文に造詣が深く、詩社「聞香社」を創設し、多くの日本人の文集に序文を執筆していた。⁵¹ 輝声が金弘集に王治本のことを熱心に引き合わせようとする理由は、まさに王に高い漢文素養があるからであったと考える。

実は、本願寺を訪問する前に、輝声は27日に行われた筆談を王治本に見せ、感想を聞いていた。王治本は金弘集の文を見て、「論筆頗有見識、字亦有法」と評価している。その後輝声は、一行に贈る予定の詩を王治本に添削をしてくれるよう依頼していた。⁵²

さらにこの日の筆談についても、翌日の8月29日に王治本と話していた。輝声は、「弘集、祖淵筆談敏捷、且言欲見王先生、先生清国人、想必筆力偏強、僕亦尙揚君之才能」⁵³として、王治本には、逆に修信使一行が会いたがっていると言っていたのである。最後に自分も王治本の才能を自慢したいと述べているが、これが輝声の一番の本音であったかもしれない。

3. (三) 8月29日

この日、花房公使が主催する修信使一行のための大宴会が渋沢栄一の別荘で開かれた。輝声は前日の筆談でそれを知ったので、午後の少し早めの時間なら大丈夫だろうと思って、お土産に西瓜2個を携えて、王治本と石川鴻斎と三人で本願寺に金弘集らを訪ねて行った。ところが、修信使一行はすでに宴会に出席して不在であったため、3人は残念に思いながら帰った（「抱憾而帰」）。

輝声は手紙に三人で訪問したことを書いて、夜に修信使一行が帰って来るのを待って、灯火のもとで懇談したいと申し出たのであった。しかし結局この日、李祖淵はすでに夜も遅く、また亀谷省軒も来訪していたため、面会を断ったのである。

短い文章でのやり取りだが、輝声はさぞがっかりし

たことであろう。やっと王治本を修信使らに会わせられることになり、さらにそのうえ、同行した友人の石川鴻斎はあの石川丈山の後裔というのに、この日は面会できなかつたのである。

「茶園筆話」を見ると、三人はこの後しばらく筆談していた。無駄足を踏んだからか、鴻斎は新聞報道で金弘集が身長が低いことを知つたので、彼のことを「矮人」と言い、「華人」(清国人)と交わるのは恒山や泰山⁵⁴のような名山を毎日遊覧するようであると称え、朝鮮人の方は仮に学問文章が優れていても、せいぜい峨眉山や天台山⁵⁵のようなものであると貶し、だから自分は最初から会いたくなかつたのだと言っていた。王治本もそれに同調して、朝鮮の公使の不在は仕方ないにしても、他の「諸員」は失礼のないように、せめて我々を中に入れてくれるべきであるとした。三人はどうやら門の外に立ったまま、伝言を残してきたようである(「立談門外」)⁵⁶。

4. (四) 8月31日

二日後、李祖淵から輝声あてにお詫びの書信が送られて来た。(四)はその書信が貼り付けられているのみである。冒頭に五言絶句一首を詠んだあと、この日に金弘集と一緒にお詫びに上がりたかつたが、公務があつて外務省に行かなければならないため、翌日に輝声を訪ねて謝罪したいと書かれていた。

「韓人筆話」にはこの謝罪の手紙だけがあつた。「茶園筆話」によると、輝声らは無駄足を踏んだ一件で立腹したけれども、また「韓館」を訪問すると話をしていた。⁵⁷

5. (五) 9月1日

李祖淵、姜瑋が先日の面会を断つたことを謝りに、輝声の自宅を訪ねて来たが、輝声は具合が悪く、面会できなかつた。どうやら下痢をしていたようである。(五)には李と姜の詠んだ詩が貼り付けてあるのみであつた。

6. (六) 9月2日

輝声は体調がまだよくなるらないが、筆談の前日で李と姜の来訪を王治本に報告し、(五)の詩を見せてい

た。王治本は先日は無駄足を踏まされたが、これでおあいこだと言つた。次はこちらから訪ねて行くが、亀谷省軒は約束を守らずに一人で先に訪問しており、石川鴻斎は「不甚喜韓人」と言うので、もう二人を誘わないことに決めた。⁵⁸

(六)はこの日に王治本が一人で本願寺を訪ねて来て、李祖淵と交わした筆談記録である。王治本が朝鮮のことについて質問を重ね、李祖淵がそれに逐一答えるという形となっている。王は朝鮮から日本への距離、朝鮮の服制、科挙、経学について詳しく聞いた。近代化をはかり、服装が西洋化した日本にいるからこそその質問であろう。また、王治本はこの年の春にも科挙に落第していた経験から、科挙にも関心が高かつたと思われる。二人は筆談の中で互いに「先生」と呼び、王治本は朝鮮のことを「貴邦」と呼ぶが、李祖淵が清のことを「上国」と呼んでいたことが注目される。

一方、家にいた輝声のもとに安達清風⁵⁹が訪ねて来た。輝声は花房公使が所持している筆談集を自ら確かめようとして、それを安達に持ってきてもらうように頼んでいた。この日の「茶園筆話」にはこの件について以下のような記述があつた。

すなわち当時、石川丈山と権菴軒の二人は、出合いが「奇縁」であると喜び、そのために同じ内容を二枚の紙に書き、それぞれで保管していたのであろうと王治本と輝声は解釈している。⁶⁰そしてまた、今回は朝鮮修信使らが来日したおかげで、対になっていたものがようやく一つになる機会を得て(双壁一合)、これもまた奇縁の中の奇縁であると喜んでた。つまり輝声は期待を込めて、どちらも本物であると判断した。こうして二人は朝鮮の人々に揮毫してもらつた書も同じように表装して大事にしようと決めたのであつた。⁶¹

7. (七) 9月5日

輝声がこの日に金弘集、李祖淵、姜瑋の三人にあてて送つた書信(送別状)の下書きである。王治本による添削であろうか、赤筆で修正した箇所が多く見られ、二人で慎重に言葉選びをしたことが伺える。

8. (八) 9月6日

源輝声あての書信が貼り付けられている。一部破損

しているため、文面の全体が分からないが、お礼が述べられているところが確認できる。筆跡により李祖淵からのものと推定する。

修信使一行はこの二日後に東京を離れて神戸に向かい、12日に神戸を発ち帰国した。「韓人筆話」もここで終わるが、輝声の筆談は終わらなかった。その後1881年10月、寄寓していた王治本が家を出るまで輝声は筆談を継続して行き、これを大事に整理し保管した。

輝声は1881年7月から翌1882年8月に亡くなるまでの1年間ほど、修史館に勤めていた。これは重野安繹のはからいによるものだと実藤氏は推測している。⁶² これまで見て来てわかるように、朝鮮人も積極的に交友をはかろうと行動してきた輝声のことであるから、第二次修信使の翌年に朝鮮から来日した「紳士遊覧団」や第三次修信使一行と交流があってもおかしくないが、その記録はない。

Ⅳ. むすびに

本稿では1880年朝鮮の第二次修信使の来日を機に、日本・朝鮮・清の三国の知識人が会って交わした筆談、書信集の「韓人筆話」を取り上げて、共通の文化的基盤である漢字、漢文を駆使して行った三国の文化交流の様子を具体的に紹介した。

この資料を詳細に検討する試みは初めてのことであり、これによってこれまでの研究史において等閑視されてきた東アジア知識人の人的ネットワーク構築の一端を明らかにすることができた。

まとめとして、これまで見てきた「韓人筆話」の内容から、知識人たちの交流に関わる特徴を三点ピックアップしておきたい。

一つ目は、儒学、漢詩文への高い関心、そして中国への憧憬である。

本稿で紹介した初対面の8月27日付けの筆談にあるように、最初は何かときこちない会話から始まったが、漢詩文の話から座が盛り上がり、打ち解けていく。相手に合わせて会話をしていた可能性もあるであろうが、おおむね筆談に関わっている知識人たちは儒学の振興を評価し、また儒学者に高い関心を寄せてい

た。

そしてこの当時、輝声にも修信使一行にもともに、中国に対する強い憧れがあったことが読み取れる。輝声についてはもはや自明のことであるが、金弘集については、例えば彼が明の遺民である朱舜水⁶³の設計と言われている小石川後樂園に立ち寄った際に、中国の風物を取り入れて造られた庭園を見て、詠んだ漢詩「後樂園口占」からその思いを推し量ることができる。

「藤緑荷香展画図 此身朧若到西湖 慕華同是千秋感 好対韓人説姓朱」⁶⁴

（藤が碧く、蓮が香り 絵画のように伸び広がるこの身は西湖（中国杭州）に来たようだ 中華を慕わしく思い 同じ時空にいると感じる 韓人の我々に朱氏と名を告げる）

とあるように、金弘集は中国江南の景色にも、朱舜水にも強い憧憬を表しているのである。

二つ目は、互いに相手を尊敬し合う姿勢であることである。

輝声は清国人と筆談する時と同様、朝鮮人も互いに相手国を「貴邦」と、自国のことを「敵邦」と、相手のことを「閣下」、「足下」と呼び、一方自らのことを「僕」と呼んでいる。そして、行き違いで会うことができなかった時のお詫び状や、したためた礼状からもこのような姿勢が見られる。

三つ目は、互いに尊敬し合って交流すると言っても、自らそこに温度差が存在したことである。

石川鴻斎は輝声に連れられて、修信使一行を訪ねているが、実は石川は金弘集が嫌いだという。それは一回目の8月29日の訪問が無駄足になったことが理由の一つであると考えられるが、そのため、輝声は再び一緒に訪ねて行こうと誘わなかったのである。⁶⁵

一方、浅田宗伯は当初から修信使の来日を気にかけていて、いつ来るのかと清国公使館館員に尋ねてもいた。また、8月27日の対面を終えたあとの30日に、浅田宗伯は王治本を通して輝声が次に「韓館」に行く時は自分も一緒に行きたいという希望を伝えていた。

このように、東アジアの知識人のネットワークは外交書類でよく知られた公的な場で単線的に形成され

るのではなく、様々なルートを通じて広がった人脈が複雑に絡み合っており、立体的に構築されるものであった、と指摘できたところで本論を閉じたい。

なお、このネットワークが当時、及びその後の東アジアの政治、外交や国際関係に及ぼした影響については、今後の課題としたい。

¹ 『『近代』移行期の東アジア知識人の人的ネットワークについての基礎研究(三)——第二次修信使金弘集一行の日本滞在を中心に——』常磐大学人間科学部紀要『人間科学』(第37巻第1号、2019年9月)。

² 代表的な論考は、秋月望「末松二郎筆談録に見られる『近代』——1881年の『紳士遊覧団』との交流を中心に」宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識1』日韓共同研究叢書(慶応義塾大学出版会、2001年)ほか、이효정「1881년 조사시찰단의 필담 기록에 보이는 한일 교류의 한 양상——『三島中洲・川北梅山・崔成大筆談録』을 중심으로」(『韓国文化論叢』第56集、2010年12月)が挙げられる。

³ 宮嶋誠一郎(1838～1911)は、字が栗香、号は養浩堂。明治維新後は左院の議官、修史館御用掛、宮内省御用掛などを歴任したが、この時は官職についておらず、民間人の身分であった。同資料の原本は早稲田大学図書館に所蔵されている。また、劉雨珍編『清代首屆駐日公使館員筆談資料彙編』(天津人民出版社、2010年)にも収録され、簡体字の活字におこされている。

⁴ 源頼政(1104～1180)平安後期の武将・歌人。源三位頼政と称す。以仁王に平氏打倒を勧めて兵を挙げたが、敗れて自刃した。

⁵ 何如璋(1838～1891)字は子峨、号は璞山・淑齋、広東大埔の人。1876年初代の駐日公使となり、翌年東京に着任した。1883年に帰国して福州船政大臣となったが、清仏戦争で南洋海軍が全滅したため退官した。著作に『使東述略』、『使東雜詠』などがある。

⁶ 張斯桂(1817～1888)字は魯生、浙江慈谿の人。「万国公法」の漢訳に携わり、序文を著したことでよく知

られている。

⁷ 黄遵憲(1848～1905)字は公度、広東嘉応の人。初代駐日公使の書記官として来日し、日本の政治家、文人と交わり、日本研究を行った。1882年にサンフランシスコ総領事に転任して以降、イギリス、シンガポールなどの在外公館に勤める。変法自強運動に参加して、戊戌の政変で失脚した。著作に『日本雜事詩』、『人境廬詩草』、『日本国志』などがある。

⁸ 沈文燾(1833～1886)号は梅史、浙江姚江の人。初代駐日清国公使何如璋の随員で、詩文や書物に関する仕事を担当。著作に『春萍館詩草』、『春萍館外集』、『姚江梅川沈氏宗譜』、『日本神字考』などがある。

⁹ 青山延寿(1820～1906)字は季卿、号は鉄槍齋。著名な漢学者、儒者。常陸水戸藩につかえ、藩校の弘道館助教、彰考館員を務めた。この時は宮嶋誠一郎の紹介で修史館に勤めていた。著作に『大八洲遊記』、『読史雜詠』、『読史偶筆』などがある。

¹⁰ 王宝平主編『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』(中国・浙江古籍出版社、2016年)「戊寅筆話」、1505～6頁。

¹¹ 実藤恵秀『大河内文書——明治日中文化人の交遊』(平凡社、1964年)。

¹² 王宝平主編『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』(出版経緯については、島善高『『日本蔵晩清中日朝筆談資料 大河内文書』の出版』(早稲田大学図書館報『ふみくら』92号、2017年10月)をご参照ください。

¹³ 羅雪谷(生没不詳)名は清、字は壺水、号は羅浮山樵・雪谷道人など。広東番禺の人。

¹⁴ 王治本(1835～1908)字は維能、号は泰園・漆園・夢蝶道人、浙江慈谿の人。1877年に来日し、1907年まで30年間日本に滞在していた。

¹⁵ 王仁乾(1839～1911)字は健君、号は惕齋、寧波の人。中国の図書文房具を売る店を開いていた。

¹⁶ 王藩清(1847～1898)号は琴仙。王治本、王仁乾と同族である。貢生の学位がある。

¹⁷ 石川鴻斎(1833～1918)本名は英、字は君華、号は芝山外史・雲泥居士。漢学者、画家。輝声と懇意な間柄で、清国公使館館員らとの間に多数の筆談がある。

¹⁸ 亀谷省軒（1838～1913）名は行、字は子省、省軒は号。対馬府中藩士、漢学者。明治維新の際は、王政復古を唱え、岩倉具視につかえた。著作に『育英文範』『省軒詩稿』などがある。

¹⁹ 増田貢（1825～1899）名は允孝、号は岳陽、著名な漢学者である。著書に『清史攬要』、『満清史略』、『唐宋八家叢話』などがある。

²⁰ 加藤桜老（1811～1884）名は熙・有隣、字は伯敬、別号に榊蔭。常陸笠間藩士、儒学者。

²¹ 森春濤（1818～1889）名は魯直、字は希黄、通称は浩甫、別号に方天・古愚等がある。東京で茉莉吟社をおこし『東京才人絶句』を編纂出版し、漢詩文雑誌『新文詩』を発行した。著作に『春濤詩鈔』などがある。漢詩人森槐南はその子。

²² 前掲実藤恵秀『大河内文書——明治日中文化人の交遊』227頁。

²³ 前掲実藤恵秀『大河内文書——明治日中文化人の交遊』54頁。

²⁴ 浅田宗伯（1815～1894）名は惟常、字は栗園。有名な漢方医、儒学者。

²⁵ 清川菖軒（1838～1886）名は玄道、字は念祖、菖軒は号。漢方医。浅田宗伯が組織した漢方医学研究所である温知社の副都講となった。著作に『清川菖軒詩稿』がある。

²⁶ 崔蘭英「清の知識人と燕行使の交流から見る人的ネットワークの構築——董文渙の日記および詩文を手掛かりに——」（『韓国朝鮮文化研究』18号、2018年3月）。

²⁷ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3105頁。

²⁸ 李元植ほか『朝鮮通信使と日本』（学生社、1992年）5頁。

²⁹ 広部精（1855～1909）は明治時代の中国語学者。日清社を創設して中国語を教え、日本最初の中国語辞典『亜細亜言語集』を編集した。

³⁰ 「僕、自道光至去冬、凡十六次入燕京、曾交孔繡山、馮魯川、葉潤臣、王蓉洲、王少鶴、孔馮葉王已游岱少霍旋里、又與沈秉成、董文渙、張丙炎、潘祖蔭、黃雲鶴相好、或宦游在外、未能相晤」3619頁。

³¹ 権菊軒、生没年は不詳。名は権弼、1636年に製述官として通信使の任統（号は白麓）に従って来日した。

石川丈山との筆談は『朝鮮国中直大夫詩学教授菊軒權弼筆語』（筑波大学中央図書館所蔵）のことであろう。

³² 石川丈山（1583～1672）名は重之、字は孫助、号は六六山人。江戸前期の漢詩人、書家。

³³ 林春斎（1618～1680）字は子和・之道、春斎・鶯峰ともに号である。江戸前期の儒者。林羅山の第三子。

³⁴ 「僕秘蔵貴邦学士権菊軒氏与邦儒石川丈山筆話之帖、及邦儒林春斎与貴邦信使筆話之牒。僕欲歴閣下之清鑑、賜跋文之撰」（前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3621～2頁）

³⁵ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3097頁。

³⁶ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3625頁。

³⁷ 王翰『扶桑遊記』（沈雲龍編『近代中国史料叢刊』第62輯、文海出版社、1968年）64～5頁。

³⁸ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3099頁。

³⁹ 東京都文化財研究所データベース https://www.tobunken.go.jp/materials/banduke_name/728236.html を参照。

⁴⁰ 太田錦城（1765～1825）名は元貞、字は公幹、通称は才佐。

⁴¹ 頼山陽（1781～1832）名は襄、字は子成、山陽・三十六峯外史はその号である。

⁴² 佐藤一斎（1772～1859）名は坦、字を大道、号は一斎のほか、愛日楼、老吾軒などがある。通称は捨蔵。

⁴³ 塩谷宕陰（1809～1867）名は世弘、字は毅侯、江戸愛宕山下に生まれたことで号は宕陰であるという。別号には九里香園・悔山・晩薫廬などがある。

⁴⁴ 斎藤拙堂（1797～1865）名は正謙、字は有終、通称は徳蔵。

⁴⁵ 安井息軒（1799～1876）名は衡、字は伸平。幕末の儒者。『海防私議』『弁妄』など警世の論や『読書余適』『息軒遺稿』『論語集説』などの著作がある。

⁴⁶ 重野安繹（1827～1910）名は士徳（子徳）、号は成斎、通称は厚之丞。幕末・明治期の漢学者、歴史家。

⁴⁷ 川田甕江（1830～1896）名は剛、号は毅卿。幕末・

明治期の漢学者。

⁴⁸ 姜璋 (1820～1884) は、字が仲武・堯章・韋玉・秋琴・慈妃などあり、号は聽秋閣・古懼堂である。本貫は晋陽。

⁴⁹ 池錫永 (1855～1935) は、字が公胤、号は松村、本貫は忠州である。日本で種痘法を学んで帰国し、朝鮮に普及させたことで知られている人物である。

⁵⁰ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3097頁。

⁵¹ 王宝平「清季東渡文人王治本序跋輯存」(『文献』第4号、2009年10月)。

⁵² 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3095頁。

⁵³ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3095頁。

⁵⁴ 恒山と衡山は中国の道教の五岳に入る名山である。それぞれ標高が2017mと1320mで、山西省と湖南省にある。

⁵⁵ 峨眉山と天台山は仏教の名山で、風光明媚で有名である。それぞれ標高が3099mと1138mで、四川省と浙江省にある。

⁵⁶ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3100～1頁。

⁵⁷ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3104～6頁。

⁵⁸ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3110～1頁。

⁵⁹ 安達清風 (1835～1884) 名は忠貫、字は子孝、号は竹堂・竹処。因幡鳥取藩士。

⁶⁰ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3112～3頁。

⁶¹ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3114頁。

⁶² 前掲実藤恵秀『大河内文書——明治日中文化人の交遊』226頁。

⁶³ 朱舜水 (1600～1682) 名は之瑜、字は魯瑛。舜水は号。明代の儒学者で、明が清に滅ぼされると、復明運動のために1647年、1651年、1653年、1658年と4回日本にやってきた。しかし挫折して1659年日本に亡命し、65年には水戸藩主の徳川光圀に賓客とし

て迎えられ、中国の儒礼を伝えて水戸学に大きな影響を与えた。

⁶⁴ 8月17日に金弘集らが小石川陸軍砲兵工廠を見学した。その後、後樂園を見学し、「園在砲兵局西、大明遺老朱舜水所闢池塘、花木宛有江南物色、不覺謂然興感也」と述べ、この詩を詠んだのである(ソウル大学図書館奎章閣所蔵「朝鮮国修信使金道園關係集」)。

⁶⁵ 前掲『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』3111頁。

日本の高齢者における「食行動」と「健康」の関連性についての検討 — 国内外の文献によるシステマティックレビュー —

田中 基晴 (常磐大学人間科学部)

菅原 直美 (常磐大学看護学部)

Investigation on the Relationship between Eating Behavior and Health of the Elderly in Japan
- A systematic review of domestic and international literatures -

Motoharu TANAKA (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)

Naomi SUGAWARA (*Faculty of Nursing, Tokiwa University*)

Abstract

Japan is the fastest aging country in the developed world. The number of elderly people living alone is increasing, so whether or not they can maintain a healthy life has become an issue of large concern. This study examined the eating behaviors and way of eating among the elderly, particularly looking at whether or not subjects ate “alone” or “with someone else,” and attempts to summarize the trends of preceding domestic research on the relationship between the dietary conditions of the elderly, and their health and/or quality of life.

The literature used included articles from *Igaku-chuo-Zasshi*, *CiNii*, *MEDLINE* and *PubMed* that were published by February or July of 2019, and the relationships were investigated in accordance with the *PRISMA Statement*. The selection criteria for the literature were: (1) domestic research focusing on the elderly people living in some local region in Japan; (2) research that investigated the relationship between eating behavior and health condition or quality of life; (3) literature which contained “eating alone” or “eating with others” as evaluation items for eating behavior; and (4) literature that did not focus on people who suffer from specific diseases. From an initial search of approximately 1,400 studies, 13 studies were selected following the first and second screenings. Among those selected, 10 were cross-sectional studies and 3 were cohort studies, the latter of which were categorized as high quality research. Among the 13 studies, 10 demonstrated the relationship between eating behavior, and health and/or quality of life. In all studies that indicated the relationship, “eating with someone else” was superior to “eating alone” for health and quality of life.

It is suggested that the way of “eating with others” could contribute to the health and/or quality of life.

I 緒言

内閣府による令和元年版高齢社会白書では、平成30年10月1日時点において65歳以上人口は、3,558万人であり、総人口に占める割合（高齢化率）は、28.1%に達すると報告されている。平成17年以降、先進諸国の中で最も高い比率となっている。しかも高齢化率は上昇を続け令和24年に33.3%で3人に1人になると予想されている¹⁾。平成28年における平均寿命は男性80.98歳、女性87.14歳と共に世界一位である²⁾。しかしながら、健康寿命との差異は、男性8.84歳、女性12.35歳と大きく³⁾、健康日本21(第2次)では、健康寿命の延伸が目標となっている⁴⁾。また、80歳以上では男女共に約2割が低栄養傾向にあると報告されている。さらに、目標とするBMIの範囲内にある高齢者の割合は、男性で5割を超えたものの、女性の70歳以上では4割を下回る結果と報告されている⁵⁾。高齢者における低栄養は認知機能低下⁶⁾や寝たきり⁷⁾に結びつくと報告がある。とりわけ食事は健康に影響を与える重要な因子であることから、このような低栄養には食生活に問題を抱えているケースが多いと思われる。このことに独居老人が増えているという事実⁸⁾が関わっていることが考えられる。独居となることで、家族や友人といった、だれかと食事を共にする「共食」が少なく、一人で食事をする「孤食」が多くなるのが、精神面、食事の供給面で問題となり、低栄養や生活の質低下につながっている可能性が考えられる。

なお、孤食・共食と健康・栄養状態の関係については、會退らが文献的レビューを行い、共食頻度と、良好な精神的健康状態および健康的な食品の摂取頻度には正の相関がみられた、と報告している⁹⁾。しかし、研究対象年齢は全世代と広く、主な対象は小中学生であり、今回の我々のような高齢者に焦点を当てたものではない。

日本は先進国の中で最も高齢化が進んでいることから、日本における研究を調査することは今後、高齢者の食環境について対策を立てる上でも重要と考える。本研究は、これからも増えていくであろう高齢者に着目し、高齢化社会に向けた対策に資することを目的として共食・孤食という食事の摂り方と健康、QOLと

の関連性について国内の先行研究の動向を把握することとした。

II 研究方法

1. 検索方法

本論文における文献検索は、PRISMA statement¹⁰⁾に準拠して実施した。データベースとしては、医学中央雑誌(医中誌)(2019年2月21日、検索)、CiNii(2019年2月27日、検索)、PubMed(2019年2月21日、検索)、MEDLINE(2019年7月23日、検索)を基に全ての論文を対象として検索を行った。医学中央雑誌における文献の選定基準は①地域で生活している高齢者を対象とした国内の研究である、②食行動と健康あるいは生活の質の関連を検討している、③食行動の評価項目に共食あるいは孤食という用語が含まれている、④特定の疾病のある人を対象としていない、とした。医中誌とCiNiiにおける検索式には「食行動・孤食・共食」「高齢者」「健康・健康指標・生活の質」を含め、PubMed及びMEDLINEでは、"eating alone"、"eating with other"、"eating with others"で検索した。また、「孤食」・「共食」と健康、QOLの関係性に高齢者の特性、とくに独居か否かという居住形態が如何様に影響を及ぼしているかといった「交絡因子」についても検討することとした。本論文において、身体的・精神的・環境的健康、生活の質、QOLは一括して「健康」と定義した。なお、本論文において、「孤食」・「共食」といった食事のとり方は、一括して「食行動」と定義した。また、以上、文献の評価・選択は、判断の信頼性、客観性を高めるため、全てのプロセスにおいて、著者2人が別個に評価した後に、協議して決定した結果である。

2. 研究の質評価

採択した全ての論文について質評価をPRISMA Statement¹⁰⁾に準拠して行った。評価指標としてはNational Institutes of Health(NIH)が作成したQuality Assessment Tool for Observational Cohort and Cross-Sectional Studiesを使用した¹¹⁾。このアセスメントツールは研究デザイン別に開発されているため、対象研究を研究デザインにより分類し評価し

た。研究デザインの分類は、森実ら¹²⁾が示したアルゴリズムに従って行った。各評価項目におけるスコアは、該当 (Y)、非該当 (N)、対象外 (NA) に分類した。なお、14 の評価項目中、8 項目以上で Y の論文を High、57 項目で Y の論文を Middle、4 項目以下を Low とした。また、14 の各評価項目で、Y、N、NA と評価した論文数を合計し、今回対象とした学問領域における研究状況を示した。

Ⅲ 研究結果

検索結果

医中誌より抽出した論文 967 件について、選定基準に基づき 1 次スクリーニングとしてタイトルと抄録を精査し、932 件を除外した。次いで、2 次スクリーニングとして本文を精査し、27 件を除外し、残りの 8 件を本研究の分析対象として採択した。CiNii からは論文 72 件が選択された。医中誌同様 1 次スクリーニングを行った結果、2 件が残ったものの、医中誌で選択した文献との重複しており除外した。MEDLINE では 289 文献が選択された。医中誌同様 1 次スクリーニングを行ったところ、6 件が残った。しかし、1 件は医中誌で検索された文献と重複しており、最終的に 5 つの文献を検討対象とした。また、PubMed では 86 の文献が選択された。これらについて 1 次スクリーニングしたところ 6 文献が残ったが、いずれも MEDLINE で選んだ文献と一致したため、全て除外した。最終的に 13 件の論文を採択した。なお、QOL の定義は筆者により異なり、身体的健康、精神的健康、環境的健康など様々であるが、本論文では各筆者の意向を尊重し、身体的、精神的、環境的健康に基づき再分類することはしなかった。

研究の質評価

研究の質は、High が 3 件、Middle が 9 件、Low が 1 件であった。High の 3 文献は、いずれもコホート研究であった。Middle の 9 文献はいずれも横断研究であった。今回採用した文献の各評価項目毎の分布を以下に示す。評価項目の“目的は明確か”に関しては、13 件全ての論文で明確に記載されており該当した。

“対象者の定義は明確か”についても 13 件全ての文献が該当した。また、“適格者の 50% 以上が参加しているか”については、11 件が該当し 2 本が非該当であった。“集団を代表しているか”に関しては、12 件が該当し、1 件が非該当であった。“サンプルサイズは十分か”に関しては、全ての文献がランダム化比較試験のように統計学的有意を求めてサンプルサイズを計算しておらず、検討可能な集団を基にした横断研究またはコホート研究であった。従って、全ての文献が非該当であった。“エビデンスの質は高いか”については、コホート研究であった 3 件のみ該当しており、横断研究は全て非該当であった。“曝露と結果の時間は十分か”に関しては、コホート研究であった 3 つの論文のみ該当し、横断研究は全て非該当であった。“複数用量、曝露しているか”については、孤食・共食の頻度を複数段階設定して尋ねているかという観点で調べたところ、7 つの文献において該当しており、有り・無し の 2 者択一は 2 報のみであった。一方、明確に表示していない論文は 4 件あり、NA とした。“曝露方法はバリデートされているか”、“という設問については、自記式質問紙に加えて面接を実施している 1 件のみ該当とし、他は自記式のみであり非該当とした。”経時的に曝露は確認されているか“は、コホート試験の 3 件においても確認されておらず、他の横断研究は非該当となった。”結果測定方法はバリデートされているか“に関しては、確立された方法で測定されている場合を該当とし、9 件が該当した。記載のない対象外は 1 件あり、確立された方法を用いていない論文は 3 件あった。”結果測定は盲検にしているか“は、3 年後生存という客観データを採用している 1 文献のみ該当とした。自記式回答の 9 件については非該当とし、詳細な記載のない場合の 3 件を対象外とした。”観察期間中に脱落は 20% 以下か“については、コホート研究の 2 報が該当し、横断研究は全て対象外であった。”交絡因子の影響を除外できているか“については、交絡因子を調整した文献は 9 件あり、非該当は 4 件あった (表 1)。

表 1 研究の質評価

| 文献 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | 総合 評価 |
|--------------------|--------|------------|-------------------|------------|-------------|--------------------|--------------|--------------|--------------------|-----------------|----------------------|----------------|-----------------|------------------|----------|
| | 目的は明確か | 対象者の定義は厳密か | 対象者の50%以上が参加しているか | 集団を代表しているか | サンプルサイズは十分か | エビデンスの質は高いか(介入、横断) | 曝露と結果の期間は十分か | 複製用紙、曝露しているか | 曝露方法はバリデーションされているか | 経時的に曝露は確認されているか | 結果測定方法はバリデーションされているか | 結果測定は盲検になっているか | 観察期間中の脱落は20%以下か | 交絡因子の影響を除外できているか | |
| 上田, 2018 | Y | Y | N | Y | NA | N | N | NA | N | NA | Y | NA | NA | Y | 5 |
| 赤井, 2015 | Y | Y | N | Y | NA | N | N | Y | N | NA | N | NA | NA | Y | 5 |
| 松野, 2015 | Y | Y | Y | Y | NA | N | N | Y | N | NA | Y | N | NA | N | 6 |
| 山之井, 2013 | Y | Y | Y | Y | NA | N | N | Y | Y | NA | Y | N | NA | Y | 8 |
| 吉田, 2012 | Y | Y | Y | N | NA | N | N | Y | N | NA | N | N | NA | Y | 5 |
| 藤井, 2014 | Y | Y | Y | Y | NA | Y | Y | Y | N | N | Y | Y | NA | N | 9 |
| 齋藤, 2007 | Y | Y | Y | Y | NA | N | N | NA | N | NA | NA | NA | NA | N | 4 |
| 梶井, 1999 | Y | Y | Y | Y | NA | N | N | Y | N | NA | Y | N | NA | N | 6 |
| Tani, 2018 | Y | Y | Y | Y | NA | Y | Y | NA | N | N | Y | N | Y | Y | 9 |
| Tani, Sasaki, 2015 | Y | Y | Y | Y | NA | Y | Y | N | N | N | Y | N | Y | Y | 9 |
| Tani, Konoto, 2015 | Y | Y | Y | Y | NA | N | N | Y | N | NA | N | N | NA | Y | 6 |
| Kuroda, 2015 | Y | Y | Y | Y | NA | N | N | N | N | NA | Y | N | NA | Y | 6 |
| Kimura, 2012 | Y | Y | Y | Y | NA | N | N | NA | N | NA | Y | N | NA | Y | 6 |
| Yの数 | 13 | 13 | 11 | 12 | 0 | 3 | 3 | 7 | 1 | 0 | 9 | 1 | 2 | 9 | |

A~N: 評価項目。Y: 妥当、N: 非妥当、NA: 対象外
Quality Assessment Tool for Observational Cohort and Cross-Sectional Studies (National Heart, Lung and Blood Institute)の評価基準に従い分類した。

「食行動」と「健康」の関係

採択した論文13件の詳細は表2にまとめた^{13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25}。研究デザインは横断研究11件^{13,14,15,16,17,19,20,21,22,23,24}、コホート研究3件^{18,21,22}であった。データ収集における調査方法は、来場者調査が2件^{15,19}、面接と自己式質問表の組合せが1件¹⁶、個別訪問が2件^{17,20}、戸籍調査(生存確認)が1件²¹であり、残り7件は郵送のみの自記式アンケート調査であった。研究実施期間は、14件中1件が1998年、2件は不記載、他は2004年から2014年であり、大部分が日本が高齢化社会となった2000年以降の研究結果である。コホート研究^{18,21,22}は、2004～2007年と2010～2013年の3年間の追跡調査であった。3報は国内で実施された大規模なコホート試験であるJapan Gerontological Evaluation Study (JAGESコホート試験)に基づいている^{21,22,23}。

共食、孤食と健康との関連について検討した文献は10件^{14,15,16,18,20,21,22,23,24,25}あり、4件^{15,16,20,23}は肥満を含む栄養状態を、3件^{22,24,25}はうつを、2件^{18,21}は生存・死亡を、残り1件¹⁴は精神的健康状態(ストレス、疲労感)を指標としていた。栄養状態としては、1件は上腕筋周囲長を測定し求めた筋たんぱく量²⁰、1件はBMI²³を指標としており、2件^{15,16}は簡易栄養状態評価表(MNA)を用いたスケール評価をしていた。MNAは自己申告による評価であるものの、国際的標準尺度と信頼性・妥当性は確立されており、いずれも信頼性は担保されていると考えられる。また、うつに関しては、3件全てGDS(Geriatric Depression Scale)と国際的に標準化された指標で評価しており、信頼性は担保されている。精神的健康状態を検討した1件で関連は認められなかったものの、9件^{15,16,18,20,21,22,23,24,25}において、測定指標は異なるものの、孤食が健康と負の相関、共食は正の相関していた。このことから総じて共食が健康に良い影響を及ぼしていることが示されている。

一方、QOLとの関連を検討した文献は4件^{13,17,19,25}(内、1件は健康とQOL両方検討していた²⁵)あった。QOLの評価は、WHO-QOL26¹³を使ったものが1件、Quantitative 100 mm visual analogue scaleを使ったものが1件²⁵と確立された手法が使われてい

る。他の2件^{17,19}は確立された手法ではないものの、満足度を段階評価していた。4件の内、1件は夕食摂取が孤食か共食かとQOL満足度との間に有意な関連性は認められなかった¹⁹。また、さらに1件も、一緒に食べる、が生活の満足度とは直接、統計学的有意な関連性が認められなかった¹⁷。一方、2件^{13,25}において共食が統計的に有意にQOLと関連しており、いずれも孤食はQOLと負の相関、共食が正の相関を示していた。この2件中1件¹³は身体的領域・環境的領域QOLを、もう1件²⁵はQOLを指標としていた。このようにQOLに関しても、4件中2件では必ずしも直接の関連は認められなかったものの、2件では相関があり、これらに関してはいずれも共食とQOLが良好な関係を示していた。

「食行動」と「健康」の関係に及ぼす交絡因子について

「食行動」と「健康」の関係に影響を及ぼしている交絡因子として、居住形態が挙げられていた。「食行動」と「健康」の関連を示す論文の中で、同居か一人住まいかといった居住環境との関連を検討した文献は5件^{13,22,23,24,25}あった。同居しているにも関わらず孤食の場合、QOLまたはうつ状態にマイナスの影響があったと報告している文献は2件あった^{13,24}。性別に分けて解析したケースでは、女性に関しては、同居の方が肥満になる率が高くなっているとの報告もみられる²³。一方、同居、一人住まいといった居住環境はうつに影響しないとの報告もある²²。男性に関しては、いずれも一人住まいより同居の方がそれぞれうつ、身体状況(肥満、低体重、不健康な食習慣)において良好な関係を示していた^{22,23}。また、一人住まいでは欠食と肥満になりやすいとも報告されている²³。

IV 考察

「食行動」と「健康」の関係

今回選ばれた論文13件中、「食行動」と「健康」に関連が認められたのは10件^{13,15,16,18,20,21,22,23,24,25}であり、認められなかったのは3件^{13,17,19}であった。健康においては、10件中9件で相関があり、1件で精神的健康状態と「食行動」に関連がみられなかったものの¹⁴、

表2. 採択論文の概要

| 著者 出版年 | 研究目的 | 研究デザイン 研究対象者 | データ収集方法 | 調査に用いた指標 | 健康状態、QOL | 分析方法 |
|-----------|--|---|--|---|---|---|
| 土田, 2018 | 居住形態の違いによる 孤独と心身の健康、 QOLとの関連を明らか にする。 | 横断研究 埼玉県所沢市在住の40歳以上の男女9,099 人を無作為抽出して実施した質問紙調査 に回答した3143人のうち、65歳以上の高 齢者 1,556人(男性712人、女性838人、 不明6人)。 | 自記式質問紙調査 (郵送法) | 独自に作成した質問項目を使用した。 主観 「1日に回は家族揃って食事をしてい る」「1週間に1回は友人、知人と一緒に 食事をしている」「1週間に1回は、環境 領域の4領域の下位尺度得点と はどちらかに「はい」と回答すれば共 食群とした。 孤独 「食事形態(1日の食事のほとんどを自 一人だけで食べているか)の問いに対し て「はい」と回答すれば孤食群とした。 | 既存の尺度を使用した。 WHO-QOL26 | 同居形態(独居群/同居群)と食事形態(孤食群/共食群)を二要因 とする二重配置分散分析を行い、主効果と居住・食事形態による交互 作用を検討した。 食事形態のQOLに対する主効果 身体的領域(p=0.001)、環境領域(p=0.000)、尺度得点全体(p=0.000)にお いて有意差あり。(全て共食群の得点が高い) 居住形態のQOLに対する主効果 全てにおいて有意差なし 居住形態と食事形態の交互作用 全てにおいて有意差なし |
| 赤利, 2015 | 共食頻度に影響する要 因を明らかにする。 | 横断研究 大阪府S市の住民基本台帳から無作為に抽 出された20歳以上の市民935人(20・30 歳代:245人、40・50歳代:302人、60歳 以上:388人に分類) 調査時期:2013年8月 | 自記式質問紙調査 (郵送法) | 独自に作成した質問項目を使用した。 朝食、夕食の共食頻度 「朝食の共食頻度」「夕食の共食頻度」「 朝食、「ほとんど毎日食べる」「週に1 回」「週に1-2回食べる」「ほとんど食 べない」から該当する項目を選択する。 1週間の共食頻度 朝食、夕食の共食頻度を合算し、「週10 回以上」と「週10回未満」の2群に分け た。 | 独自に作成した質問項目を使用した。 精神的健康状態 60歳以上の男女各群において、有意差なし。 男性 ストレス(OR:1.33, 95%CI:0.72-2.59) 疲労(OR:1.56, 95%CI:0.80-3.04) 女性 ストレス(OR:1.04, 95%CI:0.59-1.84) 疲労(OR:1.07, 95%CI:0.58-1.98) | 共食頻度を目的変数、精神的健康状態を説明変数としたロジスティック ク回帰分析を年代別・性別に行なった。 |
| 松野, 2015 | 中山間地域に住む高齢 者「買い物弱者」にお ける低栄養の要因を分 析する。 | 横断研究 山口市阿東蔵王善地区在住65歳以上の高 齢者(中山間地域、公民館茶場可能な協 力者27名) 調査時期:2014年7月 | 自記式または聞き取 り式質問紙調査(会 場調査)+身体計測 +身体計測 「一人ではなく誰かと食事を共にする機 会はその程度あるか」の問い、「毎日 60分(MINA-SF)のトータルスコア。 ある」「週に何度かある」「月に何度か ある」「年に何度かある」「ほとんどな い」から該当する項目を選択する。 | 既存の尺度を使用した。 栄養状態 Mini Nutritional Assessment Short- form (MINA-SF)のトータルスコア。 | 共食頻度とMNA-SF得点の相関関係を検討した。続いて、栄養状態を 説明変数、個人要因と共食頻度を含む20項目を独立変数とした重回 帰分析(強制投入法)を実施した。 相関関係あり。 相関係数(r)=.415, p=.031 | |
| 山之井, 2013 | 栄養状態の悪化と関連 要因を明らかにする。 | 横断研究 A県B市C区、老人福祉センター利用者、 65歳以上の男女(437人) 調査時期:2012年8月-9月 | 面接+自記式質問紙 調査 「一人の共食」を問い、「非常によくあ り」「あまりよくない」の(MNA) 4段階評価から回答する項目を選択す る。 | 既存の尺度を使用した。 栄養状態 「非常によくあり」「非常によくない」の(MNA) 4段階評価から回答する項目を選択す る。 | 共食頻度とMNA-SF得点の相関関係を検討した。続いて、栄養状態を 説明変数、個人要因と共食頻度を含む20項目を独立変数とした重回 帰分析(強制投入法)を実施した。 相関関係あり。 相関係数(r)=.23, p<.001 重回帰分析 共食頻度に有意差あり。β=.18, p<.05, R ² =.31 | |

| 著者 出版年 | 研究目的 | 研究対象者 | データ収集方法 | 調査に用いた指標 | 健康状態、QOL | 分析方法 分析結果 |
|-----------|--|--|---|---|---|--|
| 吉田, 2012 | 食生活および生活の満足に 足に影響する食行動の 要因を明らかにする。 | 研究者サイン 研究対象者 北海道農村地区、3時5ヶ所、デイサービ スに週所している65歳以上の女性で施設 職員が選定した195名 調査時期：2005年3月-05月 | 質問紙法による聞き 取り調査 | 独自に作成した質問項目を使用した。 食生活の満足度 生活の満足度 食行動に関する28項目（食材入手行動5 項目、調理行動8項目、摂食行動15項 目）に対する5件法での回答結果を因子 分析し、抽出した5下位尺度項目の1つに 「一網に食べる（2項目）」と命名し、 評価指標として使用した。 | 独自に作成した質問項目を使用した。 食生活の満足度 生活の満足度 トスケールで回答を得た。 | 食行動を構成する各因子と生活の満足度を乗数として、Spearmanの 順位相関係数を算出した。 相関関係なし。 |
| 藤井, 2014 | 食生活頻度と3年後生 存の関連を要介護状況 別に明らかにする。 | コホート研究 初回調査 東京郊外ニュータウンA市、全在宅65歳 以上85歳未満の高齢者20,938名 3年後の追跡調査 転居者・ID不明者、2004年時点で85歳以 上であった556人を除く11,977名（男： 5,790人、女：6,187人） 調査時期：ベラスライン2004年、フォ ローアップ2007年 | 自記式質問紙調査 （郵送法） | 独自に作成した質問項目を使用した。 3年後生 存 | 独自に作成した質問項目を使用した。 3年後生 存 | 対象を初回調査時点で自立高齢者群と要介護高齢者群に分類した。群 別に、ひとり食の頻度と3年後生存の関連性を検討するためピアソ ンのカイニ乗検定を、選択投函の3年後生存を比較するためハバーマン の乗数分析を行った。 自立高齢者群において、有意差が認められた。 自立高齢者群 回答項目（調整済み残差）：1回もない（0.2）、1日1回（2.8）、1日 2回（-1.6）、1日3回以上（-2.2） カイニ乗値：11,905, P=0.008 要介護高齢者群 回答項目（調整済み残差）：1回もない（-1.5）、1日1回（1.1）、1 日2回（1.0）、1日3回以上（-0.1） カイニ乗値：3,159, P=0.368 |
| 齋藤, 2007 | 社会活動における共食 の意義を検討する。 | 横断研究 長春大学受講者76名（男性30名、女性46 名） 調査時期：記載なし | 自記式または聞き取 り式質問紙調査（余 り式質問紙調査） 場調査 | 独自に作成した質問項目を使用した。 QOL 食生活頻度 「夕食の共食頻度」を問い、「1人で夕 食を食べる（単独群）」と「複数で夕食 を摂る（家族群）」から該当する項目 を選択する。 | 独自に作成した質問項目を使用した。 QOL 食生活頻度 「夕食の共食頻度」を問い、「大満足 食を食べる（単独群）」と「複数で夕食 を摂る（家族群）」から該当する項目 を選択する。 | カイニ乗検定を行った。 有意差なし。 |
| 櫻井, 1999 | 筋たんばく量と食行 動・食頻度との関連を 明らかにする。 | 横断研究 都内の在宅介護支援センターを一定期間 中に利用した在宅高齢者59名 調査時期：1998年1-0月 | 個別訪問による聞き 取り式質問紙調査と 身体計測 | 独自に作成した質問項目を使用した。 測定器具を使用し計測を行った。 食生活頻度 「同居家族との共食頻度（朝・昼・ 夕）」を問い「毎日」「週に3・4回」 「ほとんどない」から、「別居や派 「複数や友人等」との共食頻度を問い に数回」「ほとんどない」からそれ 該当する項目を選択する。 食行動 「食事をおから誘うか」と問い、「自 分から誘う」「誘ったり誘われたり同 じ」「誘われる」「ほとんどない」から 該当する項目を選択する。 | 共食頻度、食行動の頻度と栄養状態を乗数として、男女別にスピアマ ンの順位相関係数を算出した。 男性 有意差なし 女性 食行動と栄養状態に相関関係あり。 r=.47, p<0.05 | |

| 著者 出版年 | 研究目的 | 研究対象者 | データ収集方法 | 調査に用いた指標 | 分析結果 |
|--------------------|--|---|---|--|---|
| Tani, 2018 | 孤食と住居の状態の死、コホート研究 死亡 リスクへの影響を明らかにする。 | 研究対象者 研究対象者 全国9県24市よりランダム抽出された、身体的・認知的に自立している65歳以上の高齢者(男性33083名、女性38698名) 調査時期: ベースライン2010年、フォローアップ2013年 | 自記式質問紙調査(郵送法)と行政のデータベース閲覧 「孤食+同居」「孤食+独居」に分類した。 | 健康状態、QOL 死亡 「共食+同居」「孤食+同居」「共食+独居」「孤食+独居」に分類した。 | 分析結果 分析結果 Cox比例ハザードモデルを用いて食事と住居の状態別に死亡リスクを男女別に比較した。 男性 同居下、共食より孤食の方が死亡リスクが高い。 孤食かつ1人住まいは、共食で同居より死亡リスク高い。 孤食+同居 HR (95%CI): 1.48 (1.26-1.74) 孤食+独居 HR (95%CI): 1.19 (1.01-1.41) 女性 同居下、孤食は共食より死亡リスクが高い。 孤食+同居 HR (95%CI): 1.18 (0.97-1.43) 孤食+独居 HR (95%CI): 1.10 (0.93-1.29) |
| Tani, Sasaki, 2015 | 孤食とうつ病の関連性をコホート研究 明らかにする。 | 研究対象者 研究対象者 全国9県24市よりランダム抽出された、身体的・認知的に自立している65歳以上の高齢者のうち、抑うつ症状がない者(GDS<5)(男性17,612名、女性19,581名) 調査時期: ベースライン2010年、フォローアップ2013年 | 自記式質問紙調査(郵送法) 食事の有無と住居の状態 「孤食+同居」「孤食+独居」に分類した。 | 健康状態、QOL うつ病 GDS(Geriatric Depression Scale) | 分析結果 分析結果 ポアソン回帰を用いて、共食の有無による抑うつ病の有病率(APR)を同居群と同居群で男女別に比較した。 同居群の抑うつ病の発症率は、男性の同居者の場合に高い。 男性 同居群 APR (95%CI): 1.03 (0.81-1.32) 同居群 APR (95%CI): 2.36 (1.18-4.71) 女性 同居群 APR (95%CI): 1.21 (1.01-1.44) 同居群 APR (95%CI): 1.31 (1.00-1.72) |
| Tani, Kondo, 2015 | 共食頻度と肥満、低体重との関連性を明らかにする。 | 研究対象者 研究対象者 全国11県28市町村よりランダム抽出された、身体的・認知的に自立している65歳以上の男女のうち、抑うつ症状がない者83,364人(男性38,690人、女性43,674人) 調査時期: 2010年8月-2012年1月 | 自記式質問紙調査(郵送法) 共食頻度 共食頻度を問う、「共食」「時々共食」「孤食」に分類した。 | 健康状態、QOL 肥満または低体重 対象者が自己申告した身長と体重の値からBMIを算出し評価した。 肥満: BMI=30.0kg/m ² 過体重: BMI=25.0-29.9kg/m ² 標準: BMI=18.5-24.9kg/m ² 低体重: BMI=18.5-24.9kg/m ² | 分析結果 分析結果 共食頻度別に同居群と同居群に分け、肥満、低体重の有病率(有病率)を男女別に比較した。 男性 「共食+同居」群と比較し、同居群、同居群、同居群ともに「孤食」の肥満の有病率が高く、同居群で有意差あり。 同居群 APR (95%CI) = 1.34(1.01-1.78), (p<0.05) 同居群 APR (95%CI) = 1.17(0.84-1.64), (p<0.35) 「共食」群と比較し「孤食」群の低体重の有病率が高く有意差あり。 時々共食 APR (95%CI) = 1.00(0.81-1.23) 孤食 APR (95%CI) = 1.22(1.02-1.45), (p<0.05) 女性 「共食+同居」群と比較し、同居群での「孤食」の肥満の有病率は高く、有意差あり。 同居群 APR (95%CI) = 0.98(0.83-1.16), (p=0.85) 同居群 APR (95%CI) = 1.24(1.01-1.52), (p<0.05) 「共食」群と比較し、「時々共食」群の低体重の有病率が高く、有意差あり。 時々共食 APR (95%CI) = 1.18(1.03-1.35), (p<0.05) 孤食 APR (95%CI) = 0.95(0.84-1.09), (p<0.47) |

| 著者 出版年 | 研究目的 | 研究対象者 | データ収集方法 | 調査に用いた指標 | 健康状態、QOL | 分析方法 分析結果 |
|--------------|--------------------------------------|--|-------------------|--|--|---|
| Kuroda, 2015 | 孤独とうつ状態との関係 連性を明らかにした。 | 横断研究 柏市在住で無作為抽出された65-94歳の 男女1,856名 (男性928人、女性928人) 調査時期：2012年-2014年 | 自記式質問紙調査 (郵送法) | 調査に用いた指標 「孤立+共食」 「孤立+同居」「孤立+同居」「孤立+同居」に分類した。 | 健康状態、QOL 既存の尺度を使用した。 抑うつ 抑うつ GDS : Geriatric Depression Scale | 孤独とうつ状態との関係 連性を明らかにした。 抑うつ 抑うつ GDS : Geriatric Depression Scale |
| Kimura, 2012 | 孤独と健康状態 (うつ、QOL、ADL) の関係 連性を検討する。 | 横断研究 地域 (高知県) 在住の65歳以上高齢者 856名 (男性347人、女性509人) 調査時期：2008年 | 自記式質問紙調査 (郵送法) | 調査に用いた指標 「孤立」「共食」「孤立+同居」に分類した。 | 健康状態、QOL 既存の尺度を使用した。 抑うつ 抑うつ GDS : Geriatric Depression Scale QOL 100-mm visual analogue scale | 「孤立+同居」群と比較し、「孤立+同居」群の抑うつが有意に高く、有意差あり。 抑うつ 抑うつ GDS : Geriatric Depression Scale QOL 100-mm visual analogue scale |

他の9件^{15,16,18,20,21,22,23,24,25)}では、筋タンパク、BMIといった身体的栄養状態と共に、うつといった精神的栄養状態も、更には究極の指標である生存においても共食がプラスに関連していた。QOL（生活の質）についても4件^{13,17,19,25)}中2件^{13,25)}で相関がみられており、これらは、共食がプラスに関連していた。関連性が認められた論文は全て孤食より共食の方が、「健康」において優れているという結果であった。特に、NIHの評価表から論文としての質が高いと判断された3件の論文^{18,21,22)}では、「食行動」と「健康」の間に相関を認めている。しかもコホート研究であることから、「食行動」が「健康」に影響を及ぼしたことが示唆される。

内閣府による第2次食育推進基本計画²⁶⁾では、“子どもから成人、高齢者に至るまで、ライフステージに応じた間断ない食育を推進し、「生涯食育社会」の構築を目指す”ことが提唱されている。また、清野は、この基本計画が、高齢者は非常に孤立している方々もいることから、地域との繋がり、地域社会とも連携してアプローチしていくことの重要性をうたっていると解説している²⁷⁾。このように、だれかと共に食事をすることの重要性は認識されてきており、対策が打たれようとしている。今回のレビューにおいても、共食の重要性を裏付ける結果となった。今後、益々進むであろう高齢者人口増加と、1人住みの割合増加を考えると、早急な対応が望まれる。

「食行動」と「健康」の関係に及ぼす交絡因子について交絡因子として、居住形態がある。男女を層別せずに解析した研究では、孤食かつ同居は孤食かつ一人住みよりQOL悪化やうつになり易いことを示している^{13,24)}。これらは、同居者への遠慮、家庭内での孤立、居住環境の不満感が現れた可能性、身体健康の低下が孤立や環境、心理面の低下を招いている可能性¹³⁾、あるいはライフスタイルの違い、口の外見を気にする等により家族との関係に距離があると推定している²⁴⁾。このように、同居しているにも関わらず孤食にならざるを得ない複雑な家庭問題が精神状態に悪影響していることを示唆している。性別毎の解析を行った研究をみると、女性に関しては、孤食かつ同居が望

ましくないことを示す報告もある²³⁾。一方で、居住環境は影響しないとの報告もある^{22,26)}。女性は自分で食事を作る割合が多いことから、夫に先立たれて一人住みであってもさして食生活に不便はないと考えられる。男性に限定した場合は、例え孤食であっても同居している方が一人住みより望ましい結果であった^{22,23)}。男性の独居者は、夫婦または家族との同居者に比べ、惣菜やインスタント食品の利用頻度が高く、食品摂取多様性が低いと報告されており²⁸⁾、男性は食事を作ることがストレスになることと、退職後職場の同僚と会う機会が減少することがうつの原因ではないかと考えられている²²⁾。同居にも関わらず孤食になった理由は様々であろうが、男性の場合家族の存在は概して望ましい影響を与えるようである。多くの場合、孤食であっても調理は他の家族が提供していることが考えられる。以上のように、男女を層別化した結果と、層別化していない論文で居住環境の影響が異なる傾向を示した。対象人数はいずれも数百名を超えていることからデータの信頼性も高いと思われるが、孤食者にとって独居の方が同居より「健康」に良好な関係を示した論文2件は共に関東の特定の地方から対象者を選定している^{13,24)}。一方、同居の方が独居より健康に良い関係を示した論文はいずれも国内の広範囲から均一に対象者を抽出しており^{22,23)}、より一般化されている。従って、国内の一般的特徴は、後者の方がより反映していることが考えられ、たとえ孤食であっても、女性は同居者の存在はマイナスか、あるいは殆ど影響せず、逆に男性の場合、同居者の存在が「健康」に重要であると考えられる。

研究の質評価

研究の質は、NIHの質評価表に従い評価した(表2)。コホート研究の3文献ではHighとなり、一方、横断研究および標本研究ではMiddle及びLowと位置付けられた。コホート研究では時間的変化を観察していることから、多くの評価項目が該当したためである。また、各評価項目に該当した論文数から、研究の目的、対象者の定義等はいずれの論文も明瞭に記載されていたものの、いずれの試験も登録可能な人数で調査しており、仮説を検証するランダム化比較試験はなかつ

た。多人数を調査した研究もあったが、以上の理由からサンプルサイズについては全ての研究について非該当と判断した。さらに孤食・共食といった「食行動」における曝露、すなわち共食頻度はアンケートによる自己申告であり、客観的に確認している論文はなかった。これは疫学研究の限界を反映していると考えられる。

限界

今回評価した論文13件の内、10件は横断研究であり、コホート試験はわずか3件であった。横断研究では「食行動」と「健康」の関係の因果関係が明確ではない。また、客観データに乏しくアンケート調査が主体であり、信頼性に限界がある。さらに、調査を行った結果、「食行動」と「健康」との間に関連性が認められなかったケースでは論文化しないこともバイアスとして考えられる。

V 結語

本論文は、我々が調べた範囲において、日本人の高齢者に焦点を当てて孤食、共食といった「食行動」と「健康」との関連について公表された文献をレビューした最初の論文である。日本人高齢者の「食行動」と「健康」に関する研究はわずか13件であり、しかも大部分は横断研究である。このような状況から、十分な検討がなされているとは言い難い。しかしながら、今回選ばれた論文13件中、「食行動」と「健康」に関連が認められたのは10件であり、認められなかったのは3件であった。健康においては、10件中9件で相関があり、QOLについても4件中2件で相関がみられている。特に、NIHの評価表から論文としての質が高いと判断された3件の論文^{18,21,22)}では共に、「食行動」と「健康」の間に相関を認めていることから、関連はあると考えられる。関連性が認められた論文は全て孤食より共食の方が、「健康」において優れているという結果であり、共食の重要性が明らかになったと思われる。以上の結果は高齢の孤食者に対する介入の必要性を示唆している。

本研究に開示すべきCOI状態はありません。

文献

- 1) 内閣府. 令和元年版高齢社会白書(全体版)平成30年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況 第1章 高齢化の状況
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf (2019年10月6日アクセス可能)
- 2) 厚生労働省. 平成28年簡易生命表の概況 政策統括官付参事官付人口動態・保健社会統計室 2016
- 3) 厚生労働省. 「健康日本21(第二次)」中間報告書(概要) 厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会 2018
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_01549.html (2020年3月24日アクセス可能)
- 4) 厚生労働省. 厚生労働省告示第四百三十号
https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21_01.pdf (2020年3月24日アクセス可能)
- 5) 厚生労働省 平成29年度 国民健康・栄養調査結果の概要
<https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000351576.pdf> (2019年10月6日アクセス可能)
- 6) Ng TP, Niti M, Feng L et al.: Albumin, apolipoprotein E-epsilon4 and cognitive decline in community-dwelling Chinese older adults. *Journal of the American Geriatrics Society*, 2008; 57: 101-106.
- 7) McWhirter JP and Pennington CR: Incidence and recognition of malnutrition in hospital. *BMJ*, 1994; 308: 945-948.
- 8) 厚生労働省. 「国民生活基礎調査」
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa18/index.html> (2019年11月11日アクセス可能)
- 9) 會退 友美, 衛藤 久美. 共食行動と健康・栄養状態ならびに食物・栄養素摂取との関連 - 国内文献データベースとハンドサーチを用いた文献レビュー 日本健康教育学会誌 2015; 23: 279-289.
- 10) University of Oxford. TRANSPARENT REPORTING of SYSTEMATIC REVIEWS and META-ANALYSES 2015
<http://www.prisma-statement.org/> (2020年3月23

日アクセス可能)

11) National Institute of Health. Study Quality Assessment Tools

<https://www.nhlbi.nih.gov/health-topics/study-quality-assessment-tools> (2019年11月11日アクセス可能)

12) 森実敏夫、福岡敏雄、中山健夫、他：C. 医学研究の分類と臨床医学研究デザインの種類。EBM実践のための医学文献評価選定マニュアル。東京：ライフサイエンス出版。2004; 27-30.

13) 上田菜央、信太直己、岩垣穂大、他。高齢者における居住・食事形態とQOLとの関連。日本食生活学会誌 2018; 29: 99-104.

14) 赤利吉弘、小林知未、小林千鶴、他。成人における年代別・性別の共食頻度と生活習慣、社会参加および精神的健康状態との関連。栄養学雑誌 2015; 73: 243-252.

15) 松野恭子、中津井貴子、萩原裕子、他。中山間地域高齢者の低栄養に関連する要因の検討～低栄養化予防対策への一考察～。山口県立大学学術情報 2015; 16: 109-118.

16) 山之井麻衣、田高悦子、田口(袴田)理恵。地域在住自立高齢者の栄養状態の実態と関連要因の検討―口腔状態、食行動・食態度、食環境に着目して―。日本地域看護学会誌 2013; 16: 15-22.

17) 吉田礼維子、長谷川幸子、白井英子。農村部における在宅高齢女性の食生活および生活の満足に影響する食行動の要因。日本公衆衛生学雑誌 2012; 59: 151-160.

18) 藤井暢弥、児玉小百合、渡部月子、他。要介護状況別にみた都市郊外高齢者の食生活状況と3年後生存との関連。社会医学研究 2014; 31: 109-117.

19) 齋藤郁子、笹谷美恵子、山内美穂、他。高齢者における食環境と社会活動の関係―恵庭市長寿大学受講者の場合―。日本未病システム学会雑誌 2007; 13: 303-304.

20) 梶井文子、島内節。在宅虚弱高齢者の栄養状態と食行動・食態度―在宅介護支援センター利用者の筋たんぱく量による評価―。日本在宅ケア学会誌 1999; 3: 25-32.

21) Tani Y, Kondo N, Noma H, et al. Eating alone yet living with others is associated with mortality in older men: The JAGES cohort survey. Journals of Gerontology: Social Sciences 2018; 73: 1330-1334.

22) Tani Y, Sasaki Y, Haseda M, et al. Eating alone and depression in older men and women by cohabitation status: The JAGES longitudinal survey. Age and Ageing 2015; 44: 1019-1026.

23) Tani Y, Kondo N, Takagi D, et al. Combined effects of eating alone and living alone on unhealthy dietary behaviors, obesity and underweight in older Japanese adults: Results of the JAGES. Appetite 2015; 95: 1-8.

24) Kuroda A, Tanaka T, Hirano H, et al. Eating alone as social disengagement is strongly associated with depressive symptoms in Japanese community-dwelling older adults. The Society for Post-Acute and Long-Term Care Medicine. 2015; 16: 578-585.

25) Kimura Y, Wada T, Okumiya K. et al. Eating alone among community-dwelling Japanese elderly: Association with depression and food diversity. The Journal of Nutrition, Health & Aging. 2012; 16: 728-731.

26) 内閣府。第2次食育推進基本計画
<http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/33079/1/H230817siryou7.pdf?20170928133414>
(2019年11月3日 アクセス可能)

27) 清野富久江。「共食」に期待すること - 「第2次食育推進基本計画」「食育ガイド」から -。名古屋学芸大学健康・栄養研究所年報 特別号 2014; 6:34-42.

28) 吉田祐子、鈴鴨よしみ、岩佐一。地域高齢者における性別・居住形態別にみた食行動の実態。老年社会科学 2019; 40: 384-392.

高グルコース培養条件が筋芽細胞 C2C12 と間葉系細胞 C3H10T1/2 の骨芽細胞への分化に及ぼす影響の検討

棚橋 浩 (常磐大学人間科学部)

The effect of hyperglycemia on osteogenic differentiation of C2C12 myoblast and C3H10T1/2 mesenchymal cells

Hiroshi TANAHASHI (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)

Abstract

Recent studies have demonstrated that many diabetic patients suffer from an increased risk of fracture. It has been reported that bone fragility is due to bone quality deterioration. During the process of bone formation, osteoblasts play an important role in maintaining bone strength and quality and change into osteocytes, which account for more than 90% of cells in bone. Hyperglycemia is a representative symptom of diabetes mellitus and hyperglycemic condition can affect various cellular functions, including the modulation of osteogenic differentiation.

In this study, I examine the effect of hyperglycemia on osteogenic differentiation of C2C12 myoblast and C3H10T1/2 mesenchymal cells that are converted the differentiation pathway into that of osteoblast lineage by bone morphogenetic protein-2 (BMP2). Osteogenic differentiation was analyzed by histochemical and biochemical analyses of alkaline phosphatase activity, which is a marker in the initial stage of differentiation. Although further studies are needed for confirmation, the evidence that I provided suggests that high glucose treatment in a short period led to no great differences between normal and hyperglycemic culture with respect to the alkaline phosphatase activity.

1. 序論

糖尿病の患者は骨折しやすいという報告が1948年に報告(1)されて以来、糖尿病と骨粗鬆症との関連性が報告されてきた。骨の強さは骨塩量を骨幅で割った値「骨密度」と骨の構造や骨を形作る材料の特性「骨質」が関係している(2,3)。骨芽細胞を増やす作用のあるインスリンが欠乏するI型糖尿病では骨量

が減少し骨折頻度が増加するという報告(4-8)はインスリンの生理作用から説明できるが、高血糖状態によりインスリン抵抗性が引き起こされインスリン作用不足になるII型糖尿病では報告が様々であり、骨量を測定すると大きな変化が認められないのでII型糖尿病は骨折のリスクになっていないとする報告もあった(5,9,10)。I型に関する5つの論文とII型に関する

8つの論文を合わせたメタ解析の結果から骨密度の低下から予想される大腿骨近位部骨折リスクがI型糖尿病では1.42であるのに実際の骨折リスクは6.94と5倍近い開きがあり、II型糖尿病でも骨密度から予想される大腿骨近位部骨折リスクが0.77と減少しているのに関わらず実際の骨折リスクは1.38に増加していた事から骨密度に依存しない骨折リスクの増加、つまり「骨質」の劣化が重要な要因である事が認識された(11)。

「骨質」の劣化が生じる原因として骨基質を構成するコラーゲン繊維は生理的なコラーゲン架橋により秩序だった構造をとるが、高血糖によりコラーゲン繊維間に終末糖化産物 (advanced glycation end products: AGEs) が非酵素的な糖化反応により架橋して蓄積する事により生理的なコラーゲン繊維間の分子架橋の形成を阻害し、「骨質」のしなやかさが失われてしまう事が自然発症した糖尿病ラット WBN/Kob (12) やI型糖尿病患者の骨生検 (13) を用いた研究によりわかっている。またII型糖尿病患者で脆弱性骨折を伴う患者では皮質の多孔性が増加していること (14,15) や海綿骨微細構造の緻密度を評価する Trabecular Bone Score (TBS) が低下していることが報告されており、これらが骨粗鬆症の病態に関連している可能性が示されている (16,17)。

高血糖により蓄積するAGEsはその受容体 receptor for AGEs (RAGE) を介して骨芽細胞にアポトーシスの促進や石灰化障害を引き起こす (18)。この石灰化障害にはAGEsが骨芽細胞分化に重要な転写因子 Runx2 と osterix の発現を抑制するためであるという報告もある (19,20)。また骨芽細胞はコラーゲン繊維間の生理的架橋の形成に必須の酵素である lysyl oxidase (LOX) を生産しているので骨芽細胞のアポトーシスや分化抑制はコラーゲン繊維の生理的架橋の低下を招くことになる。糖尿病ではインスリンの作用不足により肝臓での糖新生が亢進しており、ビタミンB群が不足し酸化ストレス誘導因子であるホモシステインの血中濃度が上昇すると考えられている。このホモシステインが骨芽細胞の酸化ストレスを誘導することによりアポトーシスやLOX発現抑制による生理的コラーゲン繊維架橋形成の減少を引き起こすという報

告もある (21)。この様に糖尿病に伴う骨粗鬆症には骨芽細胞が影響を受けることにより生じる「骨質」の劣化が重要な病態として位置付けられている。

筋芽細胞 C2C12 は低血清濃度培養条件下では筋管細胞に分化するが、骨形成因子2 (Bone morphogenetic protein-2: BMP2) を添加して培養すると骨芽細胞に分化する (22)。間葉系細胞由来の多能性幹細胞 C3H10T1/2 はDNAのメチル化を阻害する5-アザシチジン (5-AC) により筋管細胞、骨芽細胞、軟骨細胞、脂肪細胞に分化し (23)、BMP2 添加では骨芽細胞に分化する (24)。本研究では、これらの細胞を用いて糖尿病患者を模倣した高グルコース培養条件が「骨質」を維持するために重要な役割を担っている骨芽細胞への分化に及ぼす影響をアルカリフォスファターゼ (ALP) 活性を分化マーカーとして調べた。

2. 材料及び方法

2-1. 細胞培養

マウス筋芽細胞株 C2C12 は理化学研究所バイオリソースセンター細胞材料開発室より分譲してもらい10% ウシ胎児血清 FBS (Biowest) と 450 mg/dL 高濃度グルコース含有ダルベッコ改変イーグル基礎培地 DMEM (Sigma-Aldrich) を使用し、炭酸ガス培養器の温度は37℃、炭酸ガス濃度は5%で継代培養した。マウス間葉系幹細胞株 C3H10T1/2-clone8 細胞は国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 JCRB 細胞バンクより分譲してもらい10% FBS 添加イーグル基礎培地 (Sigma-Aldrich) で継代培養した。

2-2. 培地中のグルコース濃度の測定

C2C12 細胞は 2×10^4 cells/cm² で24 ウェルプレートにサブカルチャーし、24時間後にほぼコンフルエントになっていることを確認し、実験培地としてグルコース濃度を標準の100 mg/dL ならびに高グルコース濃度450 mg/dL に設定した2% ウマ血清 (Sigma-Aldrich) 含有フェノールレッド不含 DMEM (ナカライテスク) に交換後、0、3、8、18、24時間後に培地を4 μL 回収し、培地中の残存グルコース濃度をラボアッセイ™ グルコース (富士フィルム和光純薬) を用いて紫外可視分光光度計 ASUV-1100 (アズワン)

で505 nmの吸光度を測定した。C3H10T1/2-clone8細胞は 3×10^4 cells/m²でサブカルチャーし、24時間後に標準ならびに高グルコース濃度に設定した10% FBS含有フェノールレッド不含DMEMにて培養し、同様に培地中の残存グルコース濃度を測定した。

2-3. C2C12細胞とC3H10T1/2-clone8細胞の分化誘導

C2C12細胞は上記条件でサブカルチャーし、24時間後に標準ならびに高グルコース濃度に設定した300 ng/mL ヒト組み換えBMP2 (GIBCO) と2%ウマ血清含有DMEMで分化誘導をかけて6日間培養した。グルコースの消費が激しい為、培地は12時間ごとに交換した。C3H10T1/2-clone8細胞は上記条件でサブカルチャーし、24時間後に標準ならびに高グルコース濃度に設定した10% FBS添加イーグル基礎培地に300 ng/mL BMP2を加えて分化誘導をかけて6日あるいは8日間培養した。培地は12時間ごとに交換した。またC3H10T1/2-clone8細胞は5 µg/mL 5-AC(東京化成)で3日間分化誘導をかけた後、5-AC不含の培地に変えて更に4日あるいは7日間培養した。培地は12時間ごとに交換した。

2-4. ALP活性の測定

ALP活性を組織化学的に検出する為に細胞を10%ホルマリン溶液で室温で2分間固定しPBS(-)で3回洗浄後、染色液(100 mM 2-アミノ-2-メチル-1-プロパノール pH9.6 [関東化学]、100 mM NaCl、5 mM MgCl₂、330 µg/mL 5-プロモ-4-クロロ-3-インドリルリン酸2ナトリウム1.5水和物(BCIP) [東京化成]、165 µg/mL ニトロブルーテトラゾリウム(NBT) [富士フィルム和光純薬]、9.9 µL/mL N,N-ジメチルホルムアミド [ナカライ]) 中37℃で2時間染色後、20 mM EDTA含有PBS (-) で反応を止め、後固定を1時間した後、培養顕微鏡CKX53 (オリンパス) で画像を撮影した。ALP活性を生化学的に測定する為に細胞を溶解液(50 mM トリス緩衝液 pH7.5、0.1% ポリオキシエチレン (10) オクチルフェニルエーテル [富士フィルム和光純薬]、5 mM ベンジルスルホニルフルオリド [富士フィルム和光純薬]) で回収し、凍結融解を2度繰り返した後、14 kGで20分遠心後に上清を回収して解析に使用した。蛋白質量をPierce® 660 nm Protein Assay Reagent (Thermo

SCIENTIFIC) で定量し、蛋白質量を合わせた細胞溶解液60 µLを300 µLの基質緩衝液(100 mM 2-アミノ-2-メチル-1-プロパノール pH10.3、2 mM MgCl₂、6.7 mM p-ニトロフェニルリン酸2ナトリウム(pNPP) [ナカライ]) 中で室温で90分間反応した後、240 µLの0.2 M NaOHを加え反応を止め405 nmの吸光度を測定した。

3. 結果

3-1. C2C12細胞とC3H10T1/2細胞の培養に伴う培養上清中のグルコース濃度の変化

C2C12細胞とC3H10T1/2細胞を用いて糖尿病患者を模倣した高グルコース培養条件が骨芽細胞への分化に及ぼす影響を調べるために対照は、なるべく正常血糖値に近い条件で培養する必要がある。C2C12細胞をマイトジェン刺激を抑えた2%ウマ血清含有培地で培養したところC2C12細胞は急速にグルコースを消費し、8時間の培養でも培養上清中のグルコース残存濃度は100 mg/dLから 53.9 ± 1.3 mg/dLに減少していた。またC3H10T1/2細胞では、 71.1 ± 2.09 mg/dLに減少していた(図1)。C2C12細胞では100 mg/dLに培地交換24時間後には細胞のダメージが大きく48時間後では多くの細胞が培地中に浮かんでいた。そこで両細胞とも12時間ごとに培地の交換を行う事とした。

3-2. 高グルコース濃度での培養がC2C12細胞とC3H10T1/2細胞の骨芽細胞への分化に及ぼす影響

C2C12細胞を標準あるいは高グルコース濃度含む2%ウマ血清含有培地に終濃度300 ng/mLのBMP2を加えて12時間ごとに培地を交換し、6日間培養したところBMP2で分化誘導した細胞は、標準あるいは高グルコース濃度でも細胞の一部がALP活性の検出染色試薬BCIP-NBTで染色されたが、BMP2を加えていないものは染色されなかった(図2)。染色像は骨芽細胞様のpolygonalな形状であった(図2C,D)。

同様にC3H10T1/2細胞をBMP2で分化誘導させ4~8日間培養すると4日目から標準あるいは高グルコース濃度でも細胞の一部がBCIP-NBT試薬で染色さ

れたが、BMP2を加えていないものは染色されなかった(図3A,B,C)。またC3H10T1/2細胞は5-ACで3日間分化誘導をかけた後、5-ACを含まない培地に変えトータル7,10日培養した。10日間培養したもの

が最も染色されたが標準あるいは高グルコース濃度で培養したもの間に著しい染色性の差はなかった(図3D,E)。

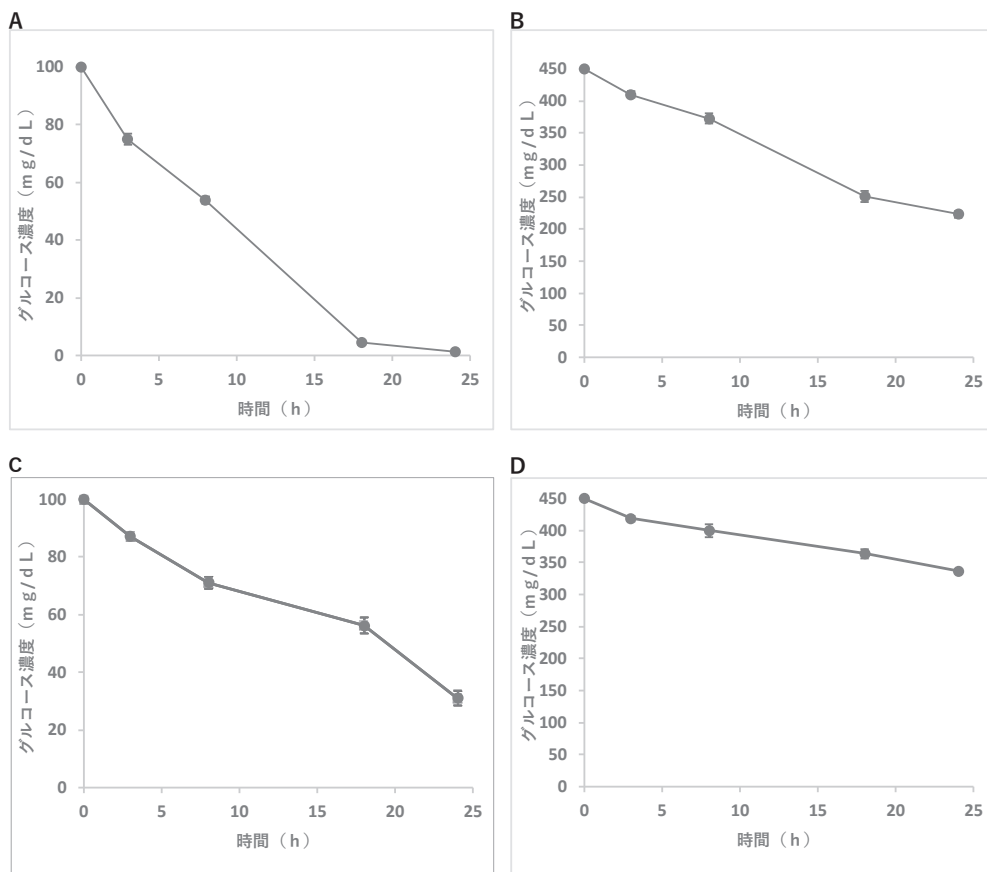


図1. ほぼコンフルエントになったC2C12細胞(A,B)とC3H10T1/2細胞(C,D)を100mg/dL(A,C)と450mg/dL(B,D)グルコース含有培地に交換後3時間、8時間、18時間、24時間の時点における培養上清の残存グルコース濃度。データは3検体の平均値でSD値をエラーバーで示しているが非常に小さい。

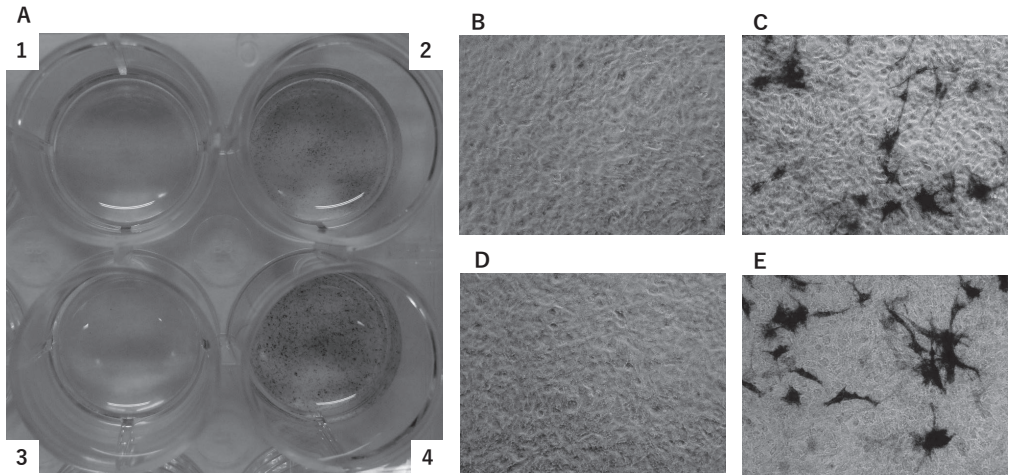


図2. C2C12細胞を培地中のグルコース濃度(100mg/dL, 450mg/dL)を変えてBMP2で骨芽細胞に分化誘導をかけ6日後にBCIP-NBT試薬でALP活性を組織化学的に検出した。
 (A1) 100mg/dLグルコース, BMP2なし、(A2) 100mg/dLグルコース, BMP2あり、(A3) 450mg/dLグルコース, BMP2なし、(A4) 450mg/dLグルコース, BMP2あり (B), (C), (D), (E)はそれぞれを拡大したもの。
 グルコース濃度の違いによる著しい差は見られない。

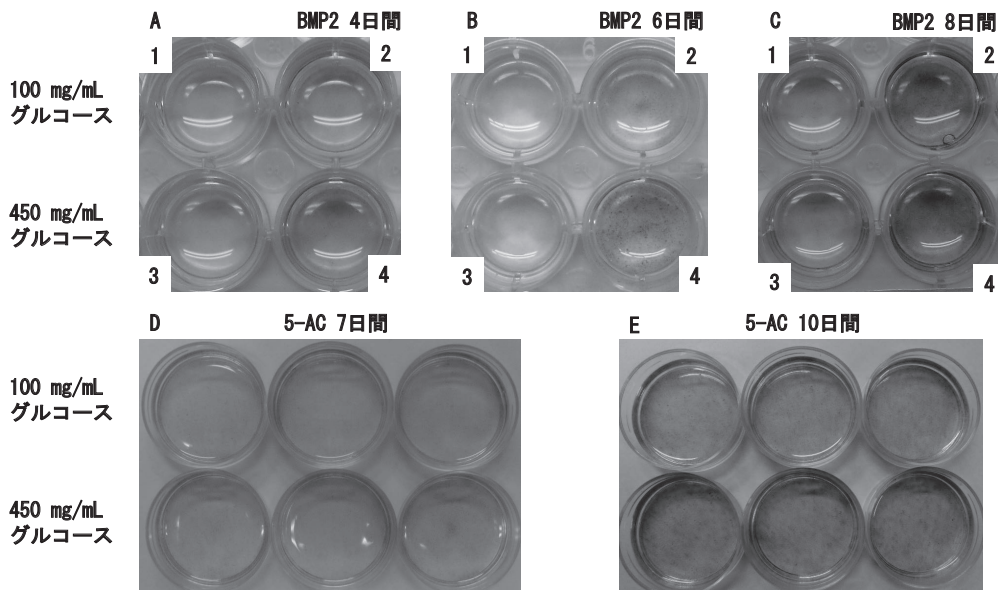


図3. C3H10T1/2細胞を培地中のグルコース濃度(100mg/dL, 450mg/dL)を変えてBMP2(A, B, C)あるいは5-AC(D, E)で骨芽細胞に分化誘導をかけ図に示す日数培養した後にBCIP-NBT試薬でALP活性を組織化学的に検出した。(A, B, C, D, E)とも上段が100mg/dLグルコース, 下段が450mg/dLグルコース(A, B, C)の(1, 3)はBMP2なし、(2, 4)はBMP2あり、グルコース濃度の違いによるALP活性の著しい差は見られない。

次に ALP 活性を pNPP 基質試薬を用いて生化学的に定量したところ C2C12、C3H10T1/2 両細胞とも標準あるいは高グルコース濃度で培養したものの ALP 活性に著しい有意差はなかった (表 1)。

表 1. 高グルコース下培養が骨芽細胞分化マーカーの ALP 活性に及ぼす影響

| 細胞と分化誘導条件 | ALP 活性 | |
|---------------|-----------------|-----------------|
| | 100 mg/dL グルコース | 450 mg/dL グルコース |
| <C2C12> | | |
| BMP2 処理 6 日後 | 1.00±0.07 | 1.14±0.09 |
| <C3H10T1/2> | | |
| BMP2 処理 8 日後 | 1.00±0.08 | 1.11±0.09 |
| 5-AC 処理 7 日後 | 1.00±0.05 | 1.05±0.04 |
| 5-AC 処理 10 日後 | 1.00±0.05 | 0.92±0.14 |

それぞれの条件で 3 検体を測定し、100 mg/dL グルコース培養条件での平均値を 1.00 として 1.00±SD で表した。100 mg/dL グルコース濃度で培養した検体の ALP 活性と 450 mg/dL グルコース濃度で培養した検体の ALP 活性に有意差はない (t-テスト)。

4. 考察

本研究では細胞株を用いた実験で短期間の高濃度グルコースへの暴露は骨芽細胞への分化に顕著な影響を与えなかった。しかし、本実験は持続的な高濃度グルコースへの暴露による影響を見ているわけではなく、糖尿病患者を模倣した長期間にわたる高グルコース培養が及ぼす影響も調べる必要がある。これまでに高濃度のグルコースへの暴露によるエピジェネティックな変化も報告されており (25)、今後の課題である。また骨芽細胞への分化のマーカーとして ALP 活性を用いたが、骨型 ALP は骨芽細胞への初期の分化マーカーであり、後期の分化マーカーであるオステオカルシンも測定する必要がある。実際に糖尿病患者では骨型 ALP 活性に有意な差が見られず、オステオカルシンの発現が有意に下がっているとの報告も見られ、検討の必要がある (26)。

引用文献

1. Albright F, Reifenstein E. Bone development in diabetic children: a roentgen study. (1948) *Am J Med Sci* 174, 313-319.
2. Kanis JA. Assessment of fracture risk and its application to screening for postmenopausal osteoporosis: Synopsis of a WHO report. WHO Study Group. (1994) *Osteoporos Int* 4, 368-381.
3. Klibanski A, Adams-Campbell L, Bassford T, Blair SN, Boden SD, Dickersin K, Gifford DR, Glasse L, Goldring SR, Hruska K, Johnson SR, McCauley LK, Russell WE. Osteoporosis prevention, diagnosis, and therapy. (2001) *JAMA* 285, 785-795.
4. Hui SL, Epstein S, Johnston CC. A prospective study of bone mass in patients with type 1 diabetes. (1985) *J Clin Endocrinol Metab* 60, 74-80.
5. Tuominen JT, Impivaara O, Puukka P, Rönnemaa T. Bone mineral density in patients with type 1 and

- type 2 diabetes. (1999) *Diabetes Care* 22, 1196-1200.
6. Kemink SA, Hermus AR, Swinkels LM, Lutterman JA, Smals AG. Osteopenia in insulin-dependent diabetes mellitus; prevalence and aspects of pathophysiology. (2000) *J Endocrinol Invest* 23, 295-303.
7. Videman T, Battié MC, Gibbons LE, Kaprio J, Koskenvuo M, Kannus P, Raininko R, Manninen H. Disc degeneration and bone density in monozygotic twins discordant for insulin-dependent diabetes mellitus. (2000) *J Orthop Res* 18, 768-772.
8. Vestergaard P, Rejnmark L, Mosekilde L. Relative fracture risk in patients with diabetes mellitus, and the impact of insulin and oral antidiabetic medication on relative fracture risk. (2005) *Diabetologia* 48, 1292-1299.
9. Kelsey JL, Browner WS, Seeley DG, Vevitt MC, Cummings SR. Risk factor for fractures of the distal forearm and proximal humerus. (1992) *Am J Epidemiol* 135, 477-489.
10. Krakauer JC, McKenna MJ, Buderer NF, Rao DS, Whitehouse FW, Parfitt AM. Bone loss and bone turnover in diabetes. (1995) *Diabetes* 44, 775-782.
11. Vestergaard P. Discrepancies in bone mineral density and fracture risk in patients with type 1 and type 2 diabetes: A meta-analysis. (2007) *Osteoporos Int* 18, 427-444.
12. Saito M, Fujii K, Mori Y, Marumo K. Role of collagen enzymatic and glycation induced cross-links as a determinant of bone quality in spontaneously diabetic WBN/Kob rats. (2006) *Osteoporos Int* 17, 1514-1523.
13. Farlay D, Armas LAG, Gineyts E, Akhter MP, Recker RR, Boivin G. Nonenzymatic glycation and degree of mineralization are higher in bone from fractured patients with type 1 diabetes mellitus. (2016) *J Bone Miner Res* 31, 190-195.
14. Burghardt AJ, Issever AS, Schwart AV, Davis KA, Masharani U, Majumdar S, Link TM. High-resolution peripheral quantitative computed tomographic imaging of cortical and trabecular bone microarchitecture in patients with type 2 diabetes mellitus. (2010) *J Clin Endocrinol Metab* 95, 5045-5055.
15. Samelson EJ, Demissie S, Cupples LA, Zhang X, Xu H, Liu CT, Boyd SK, McLean RR, Bone KE, Kiel DP, Bouxsein ML. Diabetes and deficits in cortical bone density, microarchitecture, and bone size: Framingham HR-pQCT study. (2017) *J Bone Miner Res* 33, 54-62.
16. Dhaliwal R, Cibula D, Ghosh C, Weinstock RS, Moses AM. Bone quality assessment in type 2 diabetes mellitus. (2014) *Osteoporos Int* 25, 1969-1973.
17. Iki M, Fujita Y, Kouda K, Yura A, Tachiki T, Tamaki J, Winzenrieth R, Sato Y, Moon JS, Okamoto N, Kurumatani N. Hyperglycemia is associated with increased bone mineral density and decreased trabecular bone score in elderly Japanese men: The Fujiwara-kyo osteoporosis risk in men (FORMEN) study. (2017) *Bone* 105, 18-25.
18. Ogawa N, Yamaguchi T, Yano S, Yamaguchi M, Yamamoto M, Sugimoto T. The combination of high glucose and advanced glycation end-products (AGEs) inhibits the mineralization of osteoblastic MC3T3-E1 cells through glucose-induced increase in the receptor for AGEs. (2007) *Horm Metab Res* 39, 871-875.
19. Okazaki K, Yamaguchi T, Tanaka K, Notsu M, Ogawa N, Yano S, Sugimoto T. Advanced glycation end products (AGEs), but not high glucose, inhibit the osteoblastic differentiation of mouse stromal ST2 cells through the suppression of osterix expression, and inhibit cell growth and increasing cell apoptosis. (2012) *Calcif Tissue Int* 91, 286-296.
20. Notsu M, Yamaguchi T, Okazaki K, Tanaka K, Ogawa N, Kanazawa I, Sugimoto T. Advanced glycation end product 3 (AGE3) suppresses the mesenchymal stem cells by increasing TGF- β expression and secretion. (2014) *Endocrinology* 155,

2402-2410.

21. Kanazawa I, Tomita T, Miyazaki S, Ozawa E, Yamamoto LA, Sugimoto T. Bazedoxifene ameliorates homocysteine-induced apoptosis and accumulation of advanced glycation end products by reducing oxidative stress in MC3T3-E1 cells. (2017) *Calcif Tissue Int* 100, 286-297.

22. Katagiri T, Yamaguchi A, Komaki M, Abe E, Takahashi N, Ikeda T, Rosen V, Wozney JM, Fujisawa-Sehara A, Suda T. Bone morphogenetic protein-2 converts the differentiation pathway of C2C12 myoblasts into the osteoblast lineage. (1994) *J Cell Biol* 6, 1755-1766.

23. Taylor SM, Jones PA. Multiple new phenotypes induced in 10T1/2 and 3T3 cells treated with 5-azacytidine. (1979) *Cell* 17, 771-779.

24. Katagiri T, Yamaguchi A, Ikeda T, Yoshiki S, Wozney JM, Rosen V, Wang EA, Tanaka H, Omura S, Suda T. The non-osteogenic mouse pluripotent cell line, C3H10T1/2, is induced to differentiate into osteoblastic cells by recombinant human bone morphogenetic protein-2. (1990) *Biochem Biophys Res Commun* 172, 295-299.

25. El-Osta A, Brasacchio D, Yao D, Poci A, Jones PL, Roeder RG, Cooper ME, Brownlee M. Transient high glucose causes persistent epigenetic changes and altered gene expression during subsequent normoglycemia. (2008) *J Exp Med* 205, 2409-2417.

26. Starup-Linde J, Eriksen SA, Lykkeboe S, Handberg A, Vestergaard P. Biochemical markers of bone turnover in diabetes patients: A meta-analysis, and a methodological study on the effects of glucose on bone markers. (2014) *Osteoporosis Int* 25, 1697-1708.

日本昔話において結果の相違を引き起こす主体に関する考察 (3) － 複合型 －

永野 勇二 (常磐大学人間科学部)

Consideration about the subject participating in the difference in result
in Japanese old tales (3) – composite type –

Yūji. NAGANO (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)

本論文を書き始めてから、前回の (2) を書いてから、もう 10 年経ってしまった。ある意味驚きである。これはタイトルに対する懸念にあった。結果の相違を引き起こす主体が存在するのだろうか、と考へだしたら、そんなものないんじゃないかとか考へて、筆が進めなくなったのである。しかし実験的研究ではない以上は、本人の切り口に任せてもらえたと考へた。しかし 10 年は行き詰った。これは、私の生き方の行き詰まりでもあった。しかも複合型は、すべての集大成で、全部を集約している、つまり全部複合型ではないかと考へだしたら、切りがなくなってしまったのである。でも私は私の切り口で書いて行こうと思った。あと 1 巻だから。終わらせることにしようと思う。

これを書く数年前に犬がお伊勢参りをするという、犬の神格化というべき本に飲まれて、やはり犬という存在は神的な存在と思われていたのかなと思ってた (仁科, 2013)。この辺から広がって、なかなか筆が進まなかったのを覚えている。

結果に相違をもたらす要因としては、他者に原因を帰属できる場合と自分に原因を帰属できる場合と、その二つが見られる複合型の 3 つに分けることができる。この前者 2 つは、永野 (2005) と永野 (2009) に

それぞれ記載している。そちらを見ていただければと思う。今回はこの 2 つの要因が重なって見られる複合型要因を見て行くことにする。なお、このタイプの昔話は隣の爺型と呼ばれる昔話であり、正直爺婆が幸せになって、隣に住む欲張り爺婆が懲らしめられたり、不幸な目に遭うことになっている。良く知られた話である。

さて、私が複合型と呼ぶ話は、二人の爺の対照的な場面が複数ある話の場合に表れる。そして同じ他者要因が例えば二つの場面で出て来ても、その各々は、下位要因の超自然的存在者の介入と理由が不明なものに分かれる場合がある。また一方、他者要因と自分要因に分かれる場合もある。しかしそれらの要因は解釈によって左右される。まず有名な「花さか爺」(関編、1956b) から取り上げてみよう。

昔むかしあるところに、爺さんと婆さんがいた。爺さんは山へ柴刈りに、婆さんは川へ洗濯に行った。そしたら川へでっかい桃が流れて来た。婆さんはそれを持って帰り、搗臼 (つきうす) の中へ入れておいた。爺さんが帰ってきて、何かないかとたずねた。婆さんが搗臼の中にでっかい桃があると言うので、行ってみる

と、かわいい犬がいた。二人はその犬を大事に育て、だんだん大きくなっていった。ある時、その犬がものを言った。「爺さん、爺さん。おれに鞍つけさい」「お前にかわいい鞍つけらりよかい」「だんない(差し支えない)、つけさい。」鞍をつけると「爺さん、爺さん。おれに吠(かます)つけさい」「お前にかわいい吠つけらりよかい」「だんない、つけさい。」吠をつけると、「爺さん、爺さん、おれに銚つけさい」「お前にかわいい銚つけらりよかい」「だんない、つけさい。」そして「おれの後からついていらさい」というので、ついて山へ入って行った。「爺さん、さあて掘らさい」というので、銚と吠を降ろして、そこを掘った。すると小判から大判から二分から一朱からたくさん出た。犬は「そうれ、吠につめておれにつけさい」といった。「お前に、かわいいよつけらりよかい。おれかついで行く」「だんない、つけさい。」吠をつけると、「爺さん、爺さん、おれの上に乗らさい」「お前に、かわいいや乗らりよかい」「だんない、乗らしゃい」と言い、こうして山を下って来た。隣の婆さんはそれを聞き、犬を借りて行った。犬は隣でも「おれに吠つけさい」といった。欲爺欲婆は「お前に吠つけようと思うて借って来た」といい、銚をつけるときも、「お前につけるためだ」、爺さんが乗るときも、「お前に乗るためだ」とばかりいった。そうして山へ行くと、犬が「ここ掘らさい」というので掘ると、大蛇から蛙から百足から、ありとあらゆる嫌なものばかり出て来た。隣の爺さんは怒って犬を殺し、その脇へ埋めて、柳の木を一本さして帰った。最初の爺がそれを聞いて、「何とかかわいことをさしゃった」といって、翌日そこへ行って見ると、小枝が大きな柳の木になっていた。かわいい犬の形見と思って、それを伐って来てひき臼をこしらえた。そして臼をひいてみると、驚いたことに爺さんの前には大判、婆さんの前には小判が出て来た。隣の婆さんはそれを聞いて、今度は臼を借りて行った。帰って臼をひくと、爺さんの前には馬糞、婆さんの前には牛糞が出た。二人は怒って、臼をたたき割って囲炉裏の中へ焼いてしまった。最初の爺さんはそれを聞いて、何ともったいないことをしたかといって、そこらの灰をもらって帰った。そして木にのぼって、「日本一の灰まき爺」といった。するとそこへ

立派な侍が通りかかった。「そこへいるのは何者だ」「ここは日本一の灰まき爺」「では一つまいて見せ」灰をまくと、美しい桜の花や梅の花が咲いた。侍はたいそうほめて、金をたくさんおいていった。その一部始終を隣の欲婆に話すと、またその灰を借りていった。欲婆は爺さんに木にのぼらせ、侍の来るのを待つようにいった。すると侍が来た。「そこにいるのは何者だ」「日本一の灰まき爺」「では一つまいて見せ。」爺がまくと、侍の目に入ってえらく怒られた。

前半部分の最初の爺さんと犬との問答は、味わい深いものがある。「お前に、かわいや・・・・つけらりよかい」「だんない、つけさい」という、お互いのことを思い合っている会話とその方言の響きが面白い。その類似の表現が繰り返され、結局犬に導かれて、爺は山へ入って行く。そしてそういった情愛の交流の中で、爺は自然に富まされていく。またひき臼を作るときも、かわいい犬の形見にと思って作る。

他方、隣の爺と犬との会話は少し異なる。犬は同じように「吠つけさい」というが、爺は「お前に吠つけようと思つて借つて来た」といい、銚をつけたり乗るときも、「お前につけるためだ」「お前に乗るためだ」といって山へ行く。そこには、情愛の交流といったものは、かけらも見られない。犬から一方的に富を得ようとしているのである。昔話の中では、このような爺婆が、富まされることはない。自分から富を遠ざけているようなものであるのに、そのことに気づくこともない。

最初の爺は、犬が小さい時から大事に育て、その結果としての報恩という形で、思いがけなく富を得るわけだが、隣の爺の行動はすべて、富を得るためという意図が常に先行している。「・・・ようと思つて」「・・・するためだ」という言い方からも、それがわかる。ひき臼も富を得ようとして借り、灰をまくときも、侍が来るのをじっと待つわけである。

本例では、二人の爺との間に三つの対照的な場面が出てくる。1) いわゆる「ここ掘れ、ワンワン」、2) ひき臼、3) 灰まき、の三つである。1の場合、行動(会話)自体が異なることは記述したが、それは誘因であって、結果を左右したのは、やはり犬だと考えら

れる。しかし2と3の行為の場合、同じ行為を行ったにも関わらず、結果が異なっている。これには私見では、三つほどの解釈が可能である。

ひとつには、超自然的な解釈で、犬の靈魂というか怨念が白や灰に残っていて、それが隣の爺さんの失敗に影響したというものである。これによると、すべての場面の結果を犬が左右していることになる。従って、他者要因の超自然的存在者の介入の分類に入ることになる。

別の考えでは、意図的行動と非意図的行動との結果の違いである。行為に欲とか私心とかが入ると、幸運から自らを遠ざけてしまう結果になってしまう。逆に無心の挙動が幸運の糸口になるのである。

最後に因果思想という考えであるが、これを持ちだすと、前の二つの解釈とも混ざり合ってくる。悪因悪果、隣の爺は悪いことをしたから、悪い結果を得たのだという考えである。これらは同じ事を、様々な角度から見ただけに過ぎないかもしれない。まあ、いくつかの見方ができるということである。

なお、瀬川 (1978) は、「物語の基本的な対立点は、正直爺の類型的な葛藤ではなく、相反する欲望の対立、しいて言えば生産的な欲望と非生産的な欲望の対立を基盤にしている」という。即ち欲が深いとか少ないというより、欲望の性質が違うというわけである。そして前者は「創造的欲」、後者は「相手の創造物を横取りしながら、ただ富を得るための利己的欲」でありそのためには手段を選ばない。また瀬川氏は、前者の欲望を、自然の条理にかなった、自然本能を思わせる欲望であると述べた。この観点からすれば、後者の欲望は自然の条理を外れ、自然本能を超えてしまうような欲望であろう。このようなわけで、隣の爺は自ら失敗の道へ踏み込んでしまったと考えられる。

鹿儿島県大島郡の「灰まき童児」(関編、1956a) という話も、「花さか爺」と似ている。ただ前半において、犬を手に入れるまでのくだりが、詳しく語られている。東(あがり)長者と西(いり)長者がいて、後者は母と十五の息子だけの貧乏暮らしであった。年の夜に、西長者の息子は、東長者の家から米一升と味噌一椀を借りに行くが、断られる。母は死んだときのため

にとあって、とっておいたばし布の着物を取り出し、米一升と取り替えて来るようにいう。息子は行く途中で、三人の子どもたちが子鼠をいじめているのに出くわす。そこでその大事な着物と子鼠を交換してしまう。子鼠は息子のふところから出て、財布をくわえて帰ってくる。それには銭が二十両入っている。母の夢の中で、そのお金で、まだらの三つある犬を買ってくるように、子鼠がいう。こんな調子で、不思議な能力を持つ犬が手に入るわけである。「灰まき童児」でも三つの場面が出て来るが、「花さか爺」とは少し異なる。最初の場面では、犬がときどき猪をくわえて来て、そのおかげで母と子は金持ちになる。一方、犬を借りて行った東長者の方には、犬は死んで腐った猫や豚の子ばかりくわえて来た。東長者は怒って犬を殺す。次の場面では、西長者の息子は犬の死骸を持ち帰って、庭の築山に埋めた。やがてその上に、と一だいという大きな竹が生えて来て、天までとどき、天の米倉をつき破ってたくさんの米俵を落とした。東長者は犬の骨を借りて行き、庭の築山へ埋めた。するとやはり、と一だいが生えて天までとどき、天のせつちんを突き破ったので、汚いものが落ちて来た。東長者は犬の骨を浜で焼いた。最後の場面では、息子がその灰をもって山へ行く。猪が五匹いたので、「お前はもとは達者な犬であったぞ」といって灰をまくと、その灰が猪の目に入った。猪は同士討ちを始めて、一匹はかみ殺された。息子はそれをもって帰り、猪料理をした。東長者は灰を借りて行くと、猪が四匹出て来る。東長者が、「お前はもとは達者な犬であったぞ」といって灰をまくと、「昨日、おれたちの仲間を食った奴だ」といって、食い殺されてしまう。

結末はこちらの方が残酷であるが、類型としては「花さか爺」と似ている。

兄弟譚の「ものいう亀」(関編、1957) は、前半部は、「歌の上手なカメ」と同じく、カメがものをいうかわないかで、兄弟の運命に差が生じる。しかしこの話には後半もついていて、それは「花さか爺」とも似ている。兄が亀を打ち殺して、弟は死骸をもって帰り、それを庭へ埋める。するとその上に大きな竹が生える。弟がこの竹を一節伐ると金が出て、二節伐ると上白米、三節、四節と伐っていくうちに、いろんな珍

しい宝物が出て、弟は大金持ちになった。兄が亀のかけらをもらって同じようにすると、一節伐ると尿が、二節伐ると糞が出た。三節、四節伐るうちに泥水やきかないものが出てきた。この後半の部分は、兄が弟と同じ事をしたにも関わらず、失敗している。従って一見すると、理由が不明である。しかし「花さか爺」の所で考察したように、ここでも三つの解釈が可能であろう。

「雁とり爺」(関編、1957)も、「花さか爺」と似ている。関(1978)も、「雁とり爺と花さか爺とは一つの話からわかれた二つの亜型であろう」と述べている。

ただ、犬が登場するいきさつが、異なっている。上田おうじは川上に梁をかけ、下田おうじは川下に梁をかけた。すると上田おうじには木の根っこばかり、下田おうじには雑魚がうんと落ちて来た。上田おうじはねたんで、下田おうじの方へ木の根っこをなげてよこした。下田おうじは、乾かせば薪になるだろうと思って、もって帰った。そしてその木の根をわると、中から犬の子が出て来る。

その後は、やはり三つの場面があって、交互に失敗と成功を繰り返す。あるとき、犬が「爺さま、爺さま、山さしし(鹿)捕りにえあでござい」という。爺は「そんだら、山さししとりに行ってくべがな」といって、一緒に山へ行った。「爺さま、爺さま。爺さまは難儀だべから、俺さ道具みんな背負わせてござい」「うんにゃ、何でもないで」「爺さま、爺さま。遠慮するこたあないで、俺あ背負って行きます」こうして犬がみんな背負って行った。そして「爺さま、爺さま、俺さ乗ってござい」「うんにゃ何でもないで」「何でもなくない。ぜひ乗ってござい」「うんにゃ何でもないで」「何でもなくない。ぜひ乗ってござい」「したて、うな(お前)難儀だべなあ」「さっぱり難儀でないます」といって、犬は爺さまを乗せて山へ行った。この辺は、先の「花さか爺」での会話と同じように、方言がうまく生かされ、情愛の交流がほのぼのと伝わってくる。

なお、柳田(1968)によると、このような話には「二つの点において、前代の至って大切な趣向を認め得る」という。一つは「犬をただ飼っていたのではな

くして、我児として愛育していたことである」。そして姿が犬ではあっても、「本来は仮の形で現実には親子の仲であった」。そしてだからこそ、畳の上で育て、人語して、親を富貴にしたのであるという。二つめは人間の言葉を喋るところである。これは各地方の方言に訳され、児童の気に入るように節をつけられている。「花さか爺」や、この「雁とり爺」でも見てきたように、犬と爺との会話などから、この二つの要素は、明らかに見て取れるであろう。

さて、「雁とり爺」の続きであるが、山へ行って、犬は「あっちのししもこっちのししもみんな来い」と呼ばわると、あっちこっちの山からししどもがたくさんやって来た。それを持って帰って、しし汁を食べていた。そこへ隣の根性のきたなしうばこ(婆)がやって来て、その話を聞く。翌日、その犬を借りて行った。そして道具を全部犬につけて、乗れといわれぬのに乗って、早く歩け、早くあるけといじめながら山へ行った。また犬にはろくにももの食わせないで、自分だけでご飯を食っていた。犬は怒って「あっちのばち(蜂)もこっちのばちも、みんな来て、爺あきん玉刺す食え」とさげんだ。するとあっちの蜂もこっちの蜂もみんなとんで来て、爺のきん玉を刺した。爺は怒って、犬を殺した。死骸を米の木の下に埋めて、その上に米の木の標(しるし)を立ててきた。

次の場面で下田おうじはその話を聞いて、山へ行くと、挿した米の木には美しい花が咲いていた。木を伐って来て、座敷に飾って、金ふれざくざく米ふれざくざくという、銭だの金だの米だの、ざくざくと落ちて来た。隣の婆はそれを聞いて、米の木を借りて行った。そしていちどにうんとためになるものを出そうと欲を深くして、「ためになるものあ降れ、べだがだ、ためになるものあ降れ、べだがだ」と振り回すと、そこらじゅうべこ(牛)の糞だの馬の糞だの犬の糞だのべだぐだと降った。爺と婆は怒って、米の木をなたでずたずたに伐って、火にくべてしまった。

最後の場面では、「花さか爺」と同じように、下田おうじは米の木を焼いた灰をもって帰る。そしてあるとき雁がとんで来たので、下田おうじは屋根のてっぺんに登って、「雁のまなぐさ(眼)さはいれ、ぼっぼっ。雁のまなぐさはいれ、ぼっぼっ」と、灰をまく

と、雁の眼に灰が入って雁がぼたぼたと落ちてきた。雁汁を煮て食っていると、根性きたなし婆こが来たので、詳しく聞かせてやった。婆に言われて、隣の爺は灰を借りて、天気の良い日に屋根に登った。すると雁がとんで来た。爺は「雁の眼さはいれ」というのをまちがえて、「爺あまなぐさはいれほっほっ、爺あまなぐさはいれほっほっ」というと、爺の眼に灰が入って、屋根から転げて落ちた。下にいた婆は、大きな雁が落ちてきたと思って、槌だのまっかだのでついたり、叩いたりしてつき殺してしまった。そして雁汁だと思って煮て食ってみると、かまれないところがあった。よく見ると、それは耳だった。そのとき初めて、爺を煮て食ったことが分かった。

以上の物語は、普通で考えたらおかしいところが多い。真似の失敗をしているが、爺が雁に自分の眼に入れと言うが、明らかに間違いと気づかなかったのだろうか？また婆は、爺を殺して料理する途中で爺だと気づくはずである。耳を食べているところで初めて気づくのはおかしい。まあ、昔話は、そんなものが多いのである。

こうして最後は滑稽ではあるが、残酷な結末になっている。ところで「灰まき童児」や「花さか爺」では、二番目と最後の場面の運命の差に、はっきりとした理由があらわれていなかった。すなわち同じことをするのに、結果が異なるのである。しかしこの「雁とり爺」においては、言い間違いが起こっている。最初の場面では明らかに、犬が運命の差を生じさせたのであるが、後の二つの場面では本人の言い間違い、つまり真似の失敗に因っている。そこでこの話の構成は、他者要因+自分要因と言えよう。だから複合型に入れたのである。

但し佐竹(1973)によると、秋田県平鹿郡で採集された「雁とり爺」では、隣の爺は「雁の眼にみな入れ」と正直爺と同じ言葉を使うが、雁の眼に入らず、殿様の眼に入ってしまう。これは「花さか爺」と同じパターンである。二つの話は「一つの話からわかれた二つの亜型」(関、1978)であるから、このような重複も見られるのであろう。

このように昔話の類型には非常に面白いものがたくさん見られる。筆者は二十代から三十代の頃、大学院の博士後期過程から就職する前までは、霞を食うような生活を送っていたので、このように昔話に耽溺できたのであろう。就職してからはすっかり忘れてしまった世界である。

引用文献

- 1) 佐竹昭広 1973 民話の思想 平凡社
- 2) 瀬川拓男 1978 民話=変身と抵抗の世界 一声社
- 3) 関敬吾編 1956a こぶとり爺さん・かちかち山—日本の昔話(I)— 岩波書店
- 4) 関敬吾編 1956b 桃太郎・舌きり雀・花さか爺—日本の昔話(II)— 岩波書店
- 5) 関敬吾編 1957 一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎—日本の昔話(III)— 岩波書店
- 6) 関敬吾 1978 日本昔話大成 角川書店
- 7) 永野勇二 2005 日本昔話において結果の相違を引き起こす主体に関する考察—他者に原因を帰属できる場合— 松山東雲女子大学人文学部人間心理学科人間心理第5号
- 8) 永野勇二 2009 日本昔話において結果の相違を引き起こす主体に関する考察(2)—自己に原因を帰属できる場合— 常磐大学人間科学部紀要 人間科学第27巻第1号 21-30頁
- 9) 仁科邦男 2013 犬の伊勢参り 平凡社
- 10) 柳田国男 1968 定本 柳田国男集 第六巻 筑摩書房

参考文献

- 1) 永野勇二 1987 日本の昔話における<動機の純粋性>に関する考察—正直爺と欲張り爺との比較— 昭和六十二年度 特選題目研究論文 九州大学教育学研究科 未公開
- 2) 永野勇二 1988 動機の純粋性に関する考察—日本昔話における— 人間性心理学研究第6号 日本人間性心理学会

いた翠兄は、月並句合においても俳書を景品にしたり、奉納句額には投句者全員の句を掲載するなど、きめ細やかな指導を実践した。茨城県南部、千葉県北東部を中心に三百名を超える門人を擁した翠兄は、社中の規模としては突出してはいないが、国学者として大成した沢近嶺をはじめ多くの門人たちに影響を与えた。庶民層を対象に俳諧道場を運営した翠兄は、化政期関東俳壇における優れた宗匠の一人として認知されるべきである。

〔注〕

- 1 「生成期の月並句合」加藤定彦 『関東俳壇史叢稿』 2013 若草書房
- 2 「葛飾蕉門と雪門との交渉」中村俊定 『俳諧史の諸問題』 1970 笠間書院
- 3 『俳人今井柳荘と善光寺の俳人たち』矢羽勝幸・田子修一・中村敦子 2017 ほおずき書籍
- 4 「一茶江戸漂泊期における関東の月並句合」二村博 2019:3 常磐大学研究紀要『人間科学』第37巻第1号
- 5 「秋元双樹宛新出書簡集」二村博 2017 『連歌俳諧研究』第133号
- 6 「其堂 矢羽勝幸 二松学舎大学人文論叢」 2015:3 常磐大学研究紀要『人間科学』第32巻第2号
- 7 「遅月上人と水戸俳壇」二村博 1975 『俳句』二四・四・五・六・九
- 8 「月並俳諧の実態(一)〜(四)」尾形仿 2018 『連歌俳諧研究』第百三十五号
- 9 「対松館漣漪と対松一派の周辺・大名俳人と月並一派設立」服部直子 1994 『美浦村史研究』第9号
- 10 「筑波庵翠兄と美浦の俳諧」茂呂量平
- 11 「民俗と芸術 東奥紀聞」太田三郎著

12 『俳人鈴木道彦の生涯と作品』 矢羽勝幸 1948 新紀元社 P180に掲載

13 「一茶と利根川下流域の俳壇・元夢・翠兄・月船・近嶺・素迪をめぐって」 加藤定彦 『関東俳壇史叢稿』 2013 若草書房

14 「幕末江戸月並俳諧資料・投句募集ちらし張込帖所見」今栄蔵 1977 『中央大学文学部紀要』39号

15 『続日本随筆大成』第八巻付録「沢近嶺」柳生四郎 1980 吉川弘文館

〔付記〕

本稿を執筆するにあたり、加藤定彦氏、中根誠氏には翠兄の編著資料をこ貸与いただきました。ここに記して深謝申し上げます。

ころもがへ二日は常の日なりけり

『反故さがし』

竹の皮あさく人におつるなり

(文化十年 百二編) 所収

北嵯峨や人の来ぬ日も松葉ちる

『なにぶくろ』

わたり鳥けさもならへのひとしきり

(文化九年 一峨編) 所収

朝寒やあじろ木にきて鳥のなく

『手くりぶね』

柿の木にありきたりたる日ざし哉

(文化十年 金堤編) 所収

中／＼につくらぬぎくのほひ哉

『異玖集』 所収

さたなしにかれてをりたる柳かな

『異玖集』 所収

ゆふぐれやとりとめがたき雪のふる

『異玖集』 所収

から鮭の師走がましきはしらかな

『異玖集』 所収

なほおもひいでぬれど、寝をびれごとひとしければもらしつ。

『異玖集』 所収

(A) にみえる布川の古田月船は翠兄の門人で、一茶に布川の定宿を提供していた人物である。文化三年四月、一茶は布川で翠兄の母の死を知る。近

嶺もまた父のように暮った月船の所にしばしば滞在していた。月船の家業は

海鮮問屋とも宿屋とも言われるが、屋号は翠兄と同じ伊勢屋で、伊勢商人と

して翠兄と近縁であったと思われる。

(B・E) では近嶺が十四歳の頃、友人に勧められて翠兄に俳諧を学び、

一字のわかまえもなかった状態からのめり込んでいった様子が述べられている。

翠兄の手ほどきによって俳諧に夢中になった近嶺はめきめきと力をつけて

いったのである。

(C) では生業と両立させて文芸に勤む農工商の庶民層の尊さを強調し

ている。この点に関して近嶺は農家出身の一茶と同じ価値観を持っており、

多数の平民を指導した翠兄のことを生涯親愛の情を持ち続けたのである。

(D) では火災で焼失して惜しまれる俳人からの来翰は、成美、一茶、翠

兄のものだけであると断言している。

(F) では自身が俳諧から歌人に転身した経緯を述べているが、詩人歌人には悟り難い味わいが俳諧にはあり、「我これをよくさとりえぬ。」と翠兄に俳諧を学んだことを誇っている。

(G) では自身の改号の経緯を述べている。砦(取手)に因んで翠兄から

此石亭の号を贈られたこと、吐嵐から近嶺と改号するために十数案の号を翠

兄に考えてもらったこと、一時は宗房と名乗ったが最終的には翠兄から贈ら

れた近嶺号を名乗るようになったことなど、翠兄の面倒見のよさ、近嶺の亡

師を慕う気持ちが伝わってくる。

(H) では、焼失した自身の句の中で、翠兄、士朗、一茶、成美に認めら

れた自信作十三句を書き留めている。翠兄評高句集『異玖集』下巻に入集

している句が六句あるが、伝本不明の上巻に収録された句もあったことだろ

う。

柳生四郎氏は近嶺のことを、「田園歌人として独特の素朴な持味を出して

行った」と評価している[注15]。『沢近嶺歌集』より近嶺の和歌を挙げると、

筑波嶺のみどりと不尽の白雪をかすみ分たる武蔵野の原 近嶺

かやりびし跡ハ夢みるミじか夜にねざめの里はなのミ也けり 近嶺

といった作品がみえる。彼の和歌の素朴な持ち味の根底には、「無味の味」

を理想とした翠兄の俳諧観があり、近嶺はそれを「詩人歌人のさとりがたき

事」として大切にしていたのではないだろうか。

『春夢独談』は近嶺が五十歳の頃に執筆されたものだが、これは翠兄の没

後から二十四年経っている。国学者として大成した近嶺が、十四歳から手ほ

どきを受けていた亡師のことを生涯にわたって深く敬愛していたことは、近

嶺の述懐の随所から滲み出ている。翠兄はこのように俳諧によって多くの初

学者を導き、常総地方の庶民層の文化水準を高めたのである。

結語

筑波庵翠兄の俳諧道場ははじめ、雪中庵派の常総地方における一勢力の拠

点として機能していた。文化期に入ると翠兄は雪中庵派を離れ、江戸の成美

グループと親しくなる。成美、道彦、遅月らと合評を行い多くの初学者を導

(C) 農工商の三民は世のたからにて、おの／＼業をいそしむつとむるを是とするものなれば、大かた文言なるはもとよりの事也。さてその農工商の中には、学問する人も歌よむ人もある也。農工商のなりはひにおこたらずして、かたへのわざに詩を作り歌をよみなんは、誠にみやびたりとも申すべし。また農家の桑麻をかたり、商人の利市をかたるは、みなおほやけごとにてめでたき事也。何ぞは、つるところならん。士農工商の人をおきて、**因是**(葛西因是。儒学者。昌平貴講官。)がいふ詩人といふものは何ものならん。みな農人のすねをくらふむしなるべし。しかるをこの詩を作り歌をよみて世をわたり、あるは俳諧の宗匠、狂歌師などいひて口にのりするものどもをたふとみて、農工商の良民をいやしめおとすめる論はおのれとらざる也。

(D) (火災で焼失したせうそ、こぶみの) 中にもをしきは**織錦大人**(村田春海)の**答書一通、随齋成美が答書一通、一茶入道がよせられし書三通、安田躬弦**(福井藩医、歌人)が**答書一通、清水濱臣**(国学者)が**答書一通、陸其章**(沼尻修平)よりよせられし書一通、**筑波菴翁**が贈答書教通、この外はをしとはおもはず。

(E) おのれは四書の素読をさへしらでさてよきものとおもひて日をくらしけるが、十四歳の夏より友だちにすゝめられて、父翁にはかくれて俳諧の狂句をつくりいでけり。それも一字のわきまへなくて、めくらよみにつゞりいでけり。さて十六歳のころはやゝすゝみて人にもほめられけり。されど父はよろこび給はず、行すまいかなるものにならんずらんとぞいはれける。

(F) 十七歳のとし、**東春郷**(東貞威。歌号は源直道。江戸の人。取手に来て手習い師匠をし、官学も教えた。取手長全寺に墓碑がある。官学直道誇示。)戸井夫人来りて、おのが里にすまれけり。この人いとしぢやう(自重)なる人にて、わらはが手習の師をなりはひになして、かたはら素読をもをしへられければ、この人にしたがひて**孝終**、**学記**、**大学**、**中庸**、**論語**、**詩経**、**文選**とよみけり。しかるにこの人また歌をもよまれ

ければ、この人にいさめられて俳諧の狂句をすてゝ歌よむ事とはなりぬ。しかるに今おもへば、俳諧の連歌にあそびしも、さらにいたづらにはあらざりけり(決して無駄ではなかつた)。そをいかにといふに、俳諧の狂句の趣向を其まゝに歌にとりなしたる事をり／＼あり。また俳諧の句といふもの、この道に入たらずしては、さらにあちはひるるべからず。詩人歌人のさとりがたき事あるもの也。我これをよくさとりえぬ、かかれは俳諧にあそびしもいたづらならずとはいふなり。

(G) 若きときは**血氣定まらざれば、心もさま／＼にみだるゝものなり**けり。おのれ若かりしほど、我が名にあく／＼せありけり。さるは古への世の名人、今の世のきこえ人などは、何となくうるはしくよき名つけたるこゝちして、ひとりうらやましくおもひけり。そのかみおのれは俳諧に遊ぶ時の表徳を吐嵐といひけり。**筑波菴の翁**これに**此石亭**といふ別号をおくられぬ。こは皆の字をわりてなづけられしなりけり。さてあるほどに、やがて吐嵐といふ名にあきければ、**筑波菴老翁**にこひて名をあらたむ。その時さるべき名十ばかり書ておこされしをえらびて、**近嶺**といふ名はつけられたり。さてそのゝち歌よむ事となりては、宗房と名のりぬ。とかくするうちこの名にもあきたりければ、表徳の号なる**近嶺**を名としけり。

(H) **近嶺むかし吐嵐**といひし頃の俳諧狂句の集二巻ありけるが、ことしやきつしなひぬ。こはうせてめでたき也。おのが若き頃と今とはうつりかはれる事年々歳々の流行なれば、今おもへばいたくおくれたりといふべし。されどいさゝかこゝにかいつく。こは**翠兄翁**ならびに**尾張の士朗**、**信濃の一茶**、**江戸の成美**などに見せて其時よしとつべなはれしのみ也。

ともし火に露おく春の月夜かな
菜の花やにほひある水のそこらゆく
松風や花見た人の耳をふく

『異玖集』所収
『異玖集』所収
『名なし草紙』
(文化九年 竹里編) 所収

『増山井』（寛文七年 季吟著）は、季語を四季別月順に列挙し、注記を加えたもので、実作に役立つようにまとめられた季寄書である。『真砂子哥』（安永五年 蓼太編）は、去嫌（連歌俳諧の制限規定）を歌にして、いろは順に配列した書籍である。「14 筑波庵評一万句合」では、天に『五元集』、地に『玄峯集』、人に『未來記』が贈られている。『五元集』（旨原編）は一万六千句以上の其角の発句、句合、漢句、狂歌等を取めた書籍である。『玄峯集』（旨原編）は嵐雪の発句四百二十二句を収録した嵐雪句集である。『未來記』は『俳諧未來記』（明和二年 蓼太編）のことで、芭蕉の発句「両の手に桃とさくらや草の餅」に始まる芭蕉、其角、嵐雪による三吟歌仙を収録した書籍である。

高点者の景品として俳書を贈ったのは、俳諧連歌蕉風道場を標榜した指導者翠兄の特質を示している。引札に景品の書籍名を掲載するということで、投句者全員に今後の研鑽を促す効果もあっただろう。「22 翠兄成美評秋五題句合」では、天地人の高点者に二見形文台が贈られている。二見形文台は芭蕉が使用した文台の一つで、西行が二見浦で扇を文台にした故事による。表に二見浦と松を描いた扇面の墨絵、裏に「ふたみ うたがふな潮のはなも浦の春」の句を記している。天地人に贈られたのは勿論レプリカであろうが、二見形文台の存在を門下生に認知させる効果がある。その他、表紙付小冊、額面摺、扇面といった景品も俳諧道場に相応しいものであり、蛇の目傘や浴衣、小皿等が贈られた幕末の月並句合とは一線を画している。

また、翠兄評による奉納句額の引札には、「額面は点にか、はらず一句づつ加入いたし候。」とあり、投句者全員の作品を額に掲載して奉納していたことがわかる。これは句作をはじめたばかりの者にとっては大きな励みになる。それと同時に五点以上の作品は摺物に掲載することで、熟練者まで幅広く対応した指導を可能にしている。俳諧道場筑波庵はこのようなきめ細やかな配慮をしながら運営されていた。

引札によれば筑波庵評の入花料は、一句あたり十文から二十文、または銀三匁程度であった。当時はそば一杯が八文程度であるから、多少の生計と意欲があれば入門することができた。翠兄の門下生に、商家を十七歳で継いで

家業の傍ら翠兄に俳諧を学び、のちに国学者として大成した人物がいる。取手の沢近嶺（一七八八―一八三八）である。翠兄の門人には、成田の素妲、布川の不浅（『利根川図志』の著者赤松宗旦の父）、月船等がいたが、出世頭は近嶺である。

近嶺は通称与兵衛。月の舎、梧桐庵と号した。はじめ翠兄に俳諧を学び、のち村田春海に和歌を学ぶ。国学では高田与清、清水浜臣とともに三傑と称された。吐嵐から近嶺に改号したのは文化四年で、「月次三題」（享和元年 翠兄編）、「むらさきくさ」（享和二年 翠兄編）、「春乱題」（文化三年 翠兄編）、「両判筆の綾」（文化四年 成美・翠兄評）には吐嵐号で入集しているが、「天王奉納額面」（文化四年 翠兄評）では近嶺号になっている。天保九年八月二十二日没、五十一歳。法名月堂近嶺居士。

『春夢独談』は天保八年、近嶺が自己の経歴、師友との交渉を述懐したものである。同書には、初学者の近嶺が翠兄に俳諧を習いはじめた経緯や自身の句が記録されており、彼の俳諧観も垣間見える。以下、『春夢独談』より八カ所を抜粋し、便宜的に（A）～（H）の記号を付した〔注15〕。

〔資料10〕『春夢獨談』天保八年 近嶺著

（A）ことしむつきばかり、布川の里の古田月船翁身まかられけり（天保八年一月二十日）。さるはおのれ父にひとしくおもう給へらるゝ人なるに、わきてまたいひ残さるゝことありとて、ふりはへて使おこせければ、いまそかりし時よりまかりてみとりつゝ、身まかられし後もすなはちその喪にこもりてこゝに日をくらしけるに、二月廿三日の朝、つとめてちまたの人のいふをきけば、夜べ取手の宿に火のわざはひあり。

（B）近嶺は天明八年五月十七日に生まれ侍りて、わらはに侍りしほどの事はこゝえまつるすさびも侍らず。享和元年十四歳になりける年、俳諧の狂句をうそびぎいで侍りて、そをよろづよりをかくおほえ侍りて、龍崎の里なる杉野翠兄大人にとひまなぶほどに、この大人また皇國のいにしへ学（国学）をこのまれば、手にを葉仮字つつかひなどは、この大人のさとしによりてその心を得はべりき。

- 4 『紫草』
享和二年(一八〇二)か 三句(三句吐) 記載なし
- 5 『句勸進秋大角力』
文化二年(一八〇五)六月 百五十孔(十句吐)
大関『増山井』
関脇『真砂子哥』
小結 糸衣
幕之内 扇子
- 6 『野田太子堂奉納額』
文化二年(一八〇五)閏八月 百孔
五十以上奉書摺
額面一句ずつ加入
- 7 『神崎大明神額面奉納』
文化二年(一八〇五)九月 百字(一句吐)
額面一句掲載か
- 8 『句勸進冬大角力』
文化二年(一八〇五)十月 百五十孔(十句吐)
景品秋之通呈上
- 9 『筑波庵評四季の風雨』
文化三年(一八〇六)正月 五十孔(十句吐)
天地人風景五十以上
摺物
- 10 『筑波庵評月次三題』
文化三年(一八〇六)冬 二十八字
五十以上摺物
- 11 『筑波庵評春夏秋冬乱題』
文化三年(一八〇六)か 百字(十句吐)
五十以上冊銘々
- 12 『牛頭天王拜殿額面奉納』
文化四年(一八〇七)正月 百五十孔(五句吐)
三才へ風景
額面摺銘々
- 13 『滑河観世音奉納額』
文化四年(一八〇七)正月 三句(一句吐)
額面一句掲載か
- 14 『筑波庵評二万句合』
文化四年(一八〇七)か 三文目(五十句吐) 天『五元集』
地『玄峯集』
人『未来記』
- 15 『取手長禪寺栄螺堂奉納額』
文化四年(一八〇七)以前 百五十孔(一句吐)
額面一句掲載か
- 16 『常州栗山観音堂奉納額』
文化五年(一八〇八)正月 百字(五句吐)
五十以上摺物
額面一句加入
- 17 『常州小野観音堂額面奉納』
文化五年(一八〇八)六月 百字(五句吐)
五十以上摺物
額面一句加入
- 18 『筑波庵翠兄評五節句』
寛政十一年か文化八年 百字(十句吐)
画入五巻軸
(五節句の絵)
- 19 『成田不動尊奉納額』
寛政十二年か文化九年 南鏡一片
額面一句掲載か
- 20 『成美翠兄評発句合大角力』
文化二年以降 五十穴
奉書錦摺画入并
番附銘々
- 21 『成美遅月翠兄評春乱題』
文化三年〜八年 百五十拾銅(五句吐)
天地人表紙付小冊
五十以上摺物
- 22 『翠兄成美評秋五題句合』
文化十年(一八一三) 百字(五句吐)
両評合点天地人
二見形文台
- 翠兄が贈った景品で注目されるのは俳書である。「5句勸進秋大角力」と「8句勸進冬大角力」では、大関に『増山井』、関脇に『真砂子哥』が贈られている。
- 卷中秀逸天地人扇面

成美、道彦らに接近した。これは、一茶が葛飾派と距離を置き、成美グループに出入りした経緯と似ている。組織の強化に注意を払った葛飾派や雪中庵派よりも、成美グループの方に個性あふれる有力な作家が集うようになった。文化期の翠兄は「無味の味」を醸し出す作風を理想としながら、個人的な句作を認め合う当時の著名人たちに刺激を受けるようになっていたのである。

三、翠兄の俳諧指導

本章では、俳諧連歌道場を標榜した翠兄の指導実態について考察する。筑波庵は天明六年（一七八六）頃に完成し、最盛期には五、六人の庵裡（竹里、文義、蜂子、月兔、桂文、能阿）を雇いながら、月並句合、三節、四季乱題等を発行した。また、各地の寺院に奉納する句額の評点を行い、奉納記念として摺物を発行している。それらの引札（募集チラシ）には、高点者への景品について示されている。「寸景」「美景」「鹿景」などであるだけで、何が景品として贈られたのか不明なことも多いが、具体的に記されている場合もある。幕末の引札を紹介した今栄蔵氏の論考〔注14〕より、月並俳諧の景品の具体例を以下に拾い出してみよう（末尾の括弧は論稿の引札番号）。

〔資料8〕幕末江戸月並句合の景品

- 三才（天地人）「極上染付菓子皿」、十客「箱入猪口」（十六）
- 三才「極上桐蓑盆」十客に「風流手拭掛」（十六）
- 三光「桐唐机」秀逸「扇面」、天「縁莞蓆」地人「雁皮半切三百枚」、三光「金革文庫」（二一）
- 三才「風流染付小皿十人前」十客「半切言袋」、三才「金皮大文庫」十客「箱入猪口」、
- 天「蠟燭」箱」地人「半切三百葉」、天「上半紙二十帖」地人「半切三百葉」（二三）
- 三才「歌仙経引」（二四）
- 天地人外五客「名所見立案景」（二九）

天地人「広蓋一枚」、天地人「手拭地一反」、天地人「桐唐机言脚」、天地人に「ゆかた地一反」（四九）

三才「蛇の目傘忝本」十客に「手拭言筋」（五七）

天「浴衣地一反」地「風流唐机一脚」人「藍染付大皿」十客「箱入猪口」（五九）

天「上桐巾広引出し附大机」地人「本箱」十客「懐中詠草一冊」、天地人「更紗一反」十客「さらさ風呂敷」、天地人「紀文形ぬり蓋付唐胴鍋」十客「酒

席之具」、天地人「烏石好あまはた台硯」十客「文房之具」、天「真鍮燭台箱入」地人「火色袂落し手提灯」十客「好染手拭」、天地人「道幸好鉄瓶」、

天地人「好形落し付手焙」（七七）

天「博多帯地一反」地「アメリカ型両天傘」人「唐形縮張扇子」、

二十客「名古屋形雁皮張扇子」（八六）

天「博多男帯」地「蛇の目傘」人「細両てん」、

天「二対幅箱入掛物」地「桜炭十俵」人「唐桑小机」四十客「手拭」（八八）

様々な景品があるが、全体的な傾向として調度品、実用的なものが多かったことがわかる。翠兄と同時代の例としては、巢兆が発行した「秋香菴月並句合兼題」（文化十一年）の引札〔注8〕がある。入花料は三十二孔（三十二

文 二題一組）で開巻は毎月十三日、五点以上を返草に掲載し、高点者には「画賛景物」を贈った。俳画の名手だった巢兆ならではの景品である。景品

は点者の裁量であるから、そこに独自性を出すこともできた。翠兄がどのような景品を出していたのか、引札から確認してみよう。

〔資料9〕筑波庵評月並句合の入花料と景品

- | | | |
|---------------|----------|------------|
| 引札発行年 | 入花料 | 景品 |
| 1 筑波庵評五千句合 | | |
| 寛政十二年（一八〇〇）三月 | 五匁（五十句吐） | 天地人に文台 |
| 2 筑波庵評月次三題 | | |
| 寛政十二年（一八〇〇）冬 | 二十八字 | 五点以上摺物 |
| 3 風篋庵山茶花塚追悼 | | |
| 享和二年（一八〇二）二月 | 二匁（一句吐） | 冊子（句碑堂立目的） |

川のながれ近く住む人に紫雪といへる烏帽子着せし人は彼の玄峯の
二字を伝べし。新治の隠士筑波庵主の物好きと聞し。

むらさきの夜明の風やほととぎす 暹月(暹月句集)

一句目の前書によればこの時が両者の初対面だったようである。ホトトギスの声が響く夏の一夜に両者が意気投合した様子が詠まれている。

二句目の前書は、芭蕉が吉野では其角の句「明星や桜さだめぬ山かづら其角」(『五元集』)が優れているから句を詠まず(「其角が櫻さだめよといひしに氣色をとられて、吉野には句もなかりき。」「去来抄」)、筑波山を見た際には風雪の「雪は不申先むらさきをつくばかな 風雪」(『鹿島紀行』)を紹介したことを踏まえている。また、翠兄が紫峰(筑波山)に因んだ「紫雪」という烏帽子を被っていたこと、「玄峯」号を継承したことが述べられている。夜明けの筑波山を詠んだ暹月の二句目と前書は、郷土常陸に根差した俳人翠兄の存在を称えている。翠兄の郷土愛の深さは、紫雪という烏帽子を被っていたこと以外にも、日本武尊の片歌問答からとった「異玖」「用加」「称菟流」の点印(評点用の印)を用いていたこと、編著に『むらさきくさ』(享和二年)、『統美奈廻川』(文化元年 原本未見)と名付けたことなどからも窺い知れる。

成美・暹月・翠兄の合評で「春乱題」が企画されたことは「資料8・22」の通りだが、常陸俳壇とともに牽引した暹月の俳諧観に翠兄は影響されたのかもしれない。暹月は著作『俳諧志藪』(天明八年前著)において、作句の方法は様々であるから凝り固まるべきではないという主張をしており、含蓄のある作品のみをよしとする風潮に警鐘を鳴らしている(「注7」)。

翠兄の発句は、管見では170句確認できた。その中から雪中庵派時代と成美グループ交流時代の作品を挙げてみよう。

引て行馬に湯気立みぞれ哉

翠兄 『新類題発句集』寛政五年 蝶夢編

はるの草軽き草履の売れにけり

翠兄 『三節』寛政十二年 翠兄編

跡じさりくすゝきに入日かな

翠兄 『新題林発句集』享和元年 史公編

右は雪中庵派時代の翠兄の作品である。季語の持つ本質的な味わいを生かし情景と響き合うことで、「無味の味」を醸し出す秀句になっている。

八ツ過の浦さびしくも心太

翠兄 『統雪まろげ』文化四年 素檠編

けふも赤しきのふも赤し烏丸

翠兄 『名なし草紙』文化九年 竹里編

文化期に入ると「さびし」「赤し」といった形容詞を用いた句もみられる。翠兄自身の俳諧観の変化を述べた文章がないので憶測の域を出ないが、「無味の味」一辺倒から句作の幅を広げるための試みがなされたようである。しかし、翠兄は生涯炭俵調の句風を理想としていたように思う。翠兄評高点句集『異玖集』(文化七年頃 能阿編 伝本は下巻のみ)の作品傾向を加藤定彦氏は、「日常生活における偶感や季節の移ろいとともに自然景に美的情趣を捉えようとするやや繊巧ともいえる作風」と評している(「注13」)。

冬の日のとり落しては海くれぬ

翠兄 『俳諧何袋』文化九年 一峨編

古雛に胡粉の過ぎし余寒かな

道隣 『ひさごものがたり』文化十年 太筈編

右の句のような季語と情景が響き合う優れた作品を見ると、翠兄が十分な力量を備えた点者であったことがわかる。二句目の「道隣」号は、翠兄最晩年の文化十年に剃髪して名乗った俳号である。同年九月、翠兄は師蓼太の二十七回忌にあたり、蓼太句碑「たましひのいれものひとツ種ふくべ 雪中庵蓼太」を龍ヶ崎医王院に建立する。碑陰には、「常陸しもふさの我をしへし子等と力を勤せ遠つ海の石を運びて瑠璃光山に分骨を納む。」とある。雪中庵四世の完来、午心とは袂を分かつことになった翠兄だが、蓼太のことは生涯師として尊崇していたのである。

翠兄は文化二年以降、雪中庵派と決別し、化政期関東俳壇の中心となった

翠兄が書簡で述べている「一己の俳諧」とは、ひとりよがりの作風ということだが、これは言い換えれば各人の個性を尊重し合いながら切磋琢磨していたということである。ここに円熟期の翠兄と交流した化政期関東俳壇の著名俳人とその作品をいくつか紹介しておこう。

ふはとぬぐ羽織も月の光かな 成美 『成美家集』

魚食ふて口なまぐさし昼の雪 成美 『成美家集』

夏目成美（一七四九～一八一六）は清雅な作風の秀句を遺したが、多様な他者の作品を評価した成美に翠兄も感化されたはずである。先述した通り、成美と翠兄は文化二年以降度々合評を行っていた。これらは翠兄からの依頼に応じで実施されたものであろうが、成美が翠兄を認めていたからこそ継続的に行われたのである。

成美は温厚で広い付き合いをしたが、世話の焼ける相手には苦言を呈することもあった。例えば、須賀川の石井雨考（一七四九～一八二七）が『青かげ』（文化十一年）を発行した際には、印刷、配本を成美が請け負っていたが、一通りの支援を終えた成美は雨考に対して、「野老は苦ぬげに御座候。ア、さつぱりとして快御座候。さてくよほど世はの焼るもの、もはや是にこり果申候故、此後はどこから頼来ても請負申さぬ積に御座候。」と漏らしている【注11】。

老いぬれば西瓜に江る踊かな 巢兆 『菅波可里』

芒より蚊の出る宿にとまりけり 巢兆 『山吹集』

千任の建部巢兆（一七六一～一八一四）は洒脱な中にも気品の高さがうかがわれる秀作を遺している。巢兆と翠兄に交流があったことは、双樹宛翠兄書簡【注4】から察せられる。

武隈の松のかれしをくかしがり 道彦 『ざるをがせ』

花を見るころは親もをしへぬぞ 道彦 『蕪本集』

鈴木道彦（一七五七～一八一六）（一七四九～一八一九）は人の意表をつく句を多く詠んだ【注12】。右のような直截的な表現の句を雪門時代の翠兄は容認しなかったはずである。だが、文化三年には「秋三題句合」によつ

て成美・道彦・翠兄の合評が実現している。

雪行けく都のたはけ待おらん 一茶 『七番日記』

どかくと花の上なる馬ふんかな 一茶 『七番日記』

一茶（一七六三～一八二七）は、自身の句が個性的であることを自認していた。文化十三年の冬からヒゼン（伝染性の皮膚病）にかかったことを友人の佐藤魚淵に伝える書簡（文化十四年一月六日）には、ヒゼンにかかった原因について「あまり新句吐くゆへ、和歌三神（住吉大社・玉津島明神・柿本人麻呂）の天窓敲き給ふにや。」とおどけている。

一茶と翠兄の交流については以下のことが確認できる。寛政三年（一七九二）豊前の龍歩、翠兄、一茶の三吟歌仙、翠兄と一茶の両吟歌仙三巻が巻かれる（『連句稿』）。享和二年（一八〇二）三月二日、一茶は翠兄に手紙を出す（『急通記』）。文化三年（一八〇六）四月十三日、一茶が翠兄の母の追悼句を詠む（『文化句帖』）。文化十年（一八一三）三月一日、柏原に帰郷した一茶に翠兄（道隣）からの手紙が届く（『志多良』）。一茶と親交した布川の古田月船と取手の沢近嶺は、どちらも翠兄の門下生である。

水見ても笑ふがごとし春の月 遅月 『三韓人』

行秋や四十女の眉の色 遅月 『遅月句集』

遅月庵空阿（一七五〇～一八一二）は備中出身の俳僧で、寛政期から文化期にかけて常陸俳壇において活動している。水戸に住んだのは寛政五年（一七九三）から彼が没する文化九年（一八一二）までで、翠兄の宗匠活動期と同時期である。遅月が筑波庵を訪問したことは、『遅月句集』（稿本）によって確認できる。訪問年代は翠兄が雪中庵派から離れた文化二年（一八〇五）から遅月が没する前年の文化八年（一八一二）頃の間であろう。

筑波庵主を訪八んつけ此龍ヶ崎にたづね入れバはたして一面舊識
のこころ

ほととぎす夜ひとよ聞て朝寝せむ 遅月（遅月句集）

吉野筑波に蕉翁（芭蕉）の吟なき八晋子（其角）が「桜定めぬ」玄
峯（嵐雪）が「先紫の」といへる先吟に譲られしと聞し。其みな

うになる。結城にはかつて蕪村を庇護した砂岡雁石(?)一七七三がいた。雁石は雪中庵派と激しく対立した江戸座(作風は軽妙な人事句、人情句)の論客である。雁石と雪中庵派の蓼太の作風の相違を確認してみよう。

女孺達の物驚きや今朝の秋 雁石 『俳諧新選』
稻懸て里しづかなり後の月 蓼太 『蓼太句集』

女孺は掃除や点油等を行った女官のこと。秋の朝、女孺達の驚嘆の音が響きわたる様子を詠んだ江戸座風(軽妙な人事句)の作品である。一方、蓼太の句は長月十三夜に照らされた刈り入れ後の風景を詠んでいる。季語の持つ本質的な味わいを重視した正統派の作品である。

雪中庵三世の蓼太に手ほどきを受けた翠兄は文化二年以降、雪中庵派と距離を置くようになったが、この転機によつて翠兄の作風に変化は生じたのであろうか。

翠兄が宗匠として立机した頃の俳諧観を知る資料に、茂呂村(現茨城県美浦村)の門人東吹に宛てた翠兄書簡がある[注10]。以下、その全文を紹介し、注釈と考察を加える。

【資料7】東吹宛翠兄書簡 享和元年頃 一月十九日(推定)

此間は御入来忝存候。乍併何之風情も不致早々之仕合御残多御坐候。其節御持参之御巻引墨返上致し候。俳諧御捨不被成御風流感心致し候。をしき事二御一己之御俳諧當時之調二不進候。月次其外句合等御加入被成人の句も御覽被成候へば、おのづから当時の風調に御移り被成候。兎角當時ハ一句の理屈なく無味の味と申処肝要二御坐候。従是句合等御加入被成候。江戸二而一家をたていたす人の流行におくれしと申も皆一己の俳諧ゆゑに御坐候。江戸而巴区々御坐候。尾張より伊勢上方辺、北国、奥羽、南部、越路までも当時同調相成候。当国下総も過半当時しらへにおし移り候。乍慮外我門に御遊びながら当時の調に不進候ハ心外之御事二候。其又御執心二付恐れも不顧申入候。能々御工夫可被成存候。其内寛々得實意御物語可申候。雲里子、浪花子へもくれぐれ宜御伝被下候。頓首。

正月十九日 翠兄

東吹様

猶々御持参の短冊認遣候。扱々墨つきあしく認めあぐ三候。四季之外春二句とも詰る処一数字すら余我無之候。其段御断申候。以上。

○雲里・栗山氏。木原洪の名主武兵衛か。霞ヶ浦連の筆頭。墓碑が木原台永藏寺山門内側にあり、辞世句「置いてゆくわが寝姿や秋の雲」が刻まれている。

○浪花・桑名氏。郷中の人。老杉窟浪花と号した。

○東吹・根本氏。茂呂村の名主。香澄亭。『三節』(寛政十二年、享和元年)、『筑波庵評月次三題句合』(享和元年)、『むらさきくさ』(享和二年)『異玖集』(文化七年頃)に入集している。

書簡は茂呂村の東吹が龍ヶ崎の筑波庵まで赴き、批点を依頼したことに對する返送である。翠兄が宗匠として立机したのは寛政十二年春だが、東吹はその頃から「三節」や翠兄の月並に投句をしている。初学者の東吹に翠兄が句作の指針を示している書簡の内容からして、東吹が翠兄の下で一年ほど学び終えた享和元年頃に認めたものであろう。

翠兄は東吹に「一己之俳諧(ひとりよがりの俳諧)」ではなく、当時の風調に即した「無味の味」を醸し出すような句作を勧めている。雪中庵蓼太に師事した翠兄は、芭蕉晩年の「かるみ」を理想とした炭俵調こそが理想的な作風であると考えていた。「我門に御遊びながら当時の調に不進候ハ心外之御事二候」と戒める所に翠兄の頑なな一面が垣間見えるが、指導者として駆け出した翠兄は初心者を導く使命感を強く感じていたのだろう。一方で、「其又御執心二付恐れも不顧申入候。」と東吹の向学心を称えるフォローも忘れていない。

雪門時代の翠兄は、「無味の味」に重きを置いた炭俵調を当世風として鼓吹し、「一己の俳諧」とならぬように戒めていた。このような指導方針は文芸を嗜んだことがない階層の初学者にとつてはわかりやすいものであった。

面白いのは、翠兄自身が「江戸而巴区々御坐候。」と批判していた江戸俳壇の宗匠たちの仲間、のちのち翠兄も入っていくようになることである。

天保十年（一八三九）正月 対山 約180人 550句
 二月 対山 約170人 507句

『雪中菴評月並三題句合』

天保九年（一八三八）九月 対山 約3330句
 十月 対山 3813句
 十一月 対山 約3140句
 天保十年（一八三九）二月 対山 3018句

対山は300人から400人ほどの投句者を擁していたことがわかる。雪中庵派は月並全盛期においても順調な広がりを見せていた。

本章では雪中庵派を中心とした天明期から天保期までの関東地方における月並句合と対照することによって、翠兄の筑波庵社中の規模について検証を試みた。月並俳諧が流行しはじめた寛政末期から文化期にかけて活動した龍ヶ崎の翠兄は、常陸、下総の庶民層を中心に、300名を越えるほど門人を擁していた。化政期関東俳壇の宗匠としては、十分に功成り名を遂げたいえよう。

二、文化文政期の関東著名俳人と翠兄の作風

文化二年（一八〇五）、順調に勢力圏を拡大していた翠兄の宗匠活動に転機が訪れた。それは雪中庵派との決別である。文化二年十一月十八日の双樹宛翠兄書簡はそのことについて次のように言及している（注5）

扱野生も近比は無事繁多之上俳諧殊之外流行いたし草庵へも隨身五六輩
 ズ、不絶有之点取おもしろし参候而昼夜無寸暇中く心心の俳諧たのしみ候
 事も相成かね候。いづれ工夫致しちと閑を得候様二心がけ居候速茂、遂
 隠者之内と寛く御風交も相成間敷候。御庵より乍懼巢兆宗へも其段宜御
 伝声可被下候。雪門之方は相断退坐致し候へども、いまだ此辺日く客差
 つどひ心のどかならず候。ちと俳諧の閑を得候やうに心がけ居候。

「隨身五六輩」とは、筑波庵裡の能阿、竹里、文義、蜂子、月兎、桂文のことである。彼ら六名が翠兄の宗匠活動を補佐していたが、それでも多忙で

心から俳諧を楽しみむ余裕はなかったようで、「ちと閑を得候様に心がけ居候」という表現を繰り返している。「雪門（雪中庵派）之方は相断退坐致し候へども」という箇所から雪中庵派と決別したのが文化二年（一八〇五）であったことが判明する。雪中庵派の俳書入集状況を見ても、『芳春帖』（午心編）の寛政十年、享和二年、文化元年、文化二年本には翠兄の句がみえるが、それ以降は入集がない。文化二年刊の『大矢数』（午心編）、『慎の小庭』（夢松編）にも翠兄は入集するが、文化元年まで雪中庵派との交流があったことを示唆する。文化三年以降、雪中庵派の歳旦等に翠兄の名は見られなくなり、『資料4』の5「筑波庵評春乱題」（文化三年）以降の翠兄の編著には、完全、午心らの作品は一切掲載されていない。これらの入集状況は雪中庵派との決別を述べた書簡の内容と合致している。

文化二年以降の翠兄は、江戸の成美、道彦、常陸の遅月といった当代著名俳人と協力して常総の門人たちの句の合評を行うようになる。翠兄の編著及び引札から確認できる提携者別句合は以下の通りである。

成美 「秋三題句合」〔資料4・7〕 『両判筆之綾』〔資料4・10〕

「発句合大角力」〔資料8・20〕 『春乱題』〔資料8・21〕

「秋五題句合」〔資料8・22〕

道彦 「秋三題句合」〔資料4・7〕

遅月 「春乱題」〔資料8・21〕

特に成美との提携が目立ち、文化三年から翠兄が没する文化十年まで成美の協力を得ていた。道彦、遅月との合評は現状では一点しか確認できないが、「秋三題」「春乱題」といったシリーズ物の句合を定期的に共同選句していたようだ。『秋三題句合』と『両判筆之綾』の入集者は常総の筑波庵社中が中心であるから、翠兄が自身の門人のために当代著名人の成美、道彦から選句を受ける機会を与えようとして企画したものであろう。翠兄は雪中庵派の牛後として与するよりも、地元筑波山下の門人たちへの手厚い指導を施すことにしたのである。

文化三年（一八〇六）以降の翠兄の編著には結城の俳人たちが散見するよ

みよう。

発行年月 評者 投句者数 寄句数

『震柳対山評夏秋三句合』

文化十二年(一八一五) 六月 対山 約490人 約1450句

『震柳対山評連月四句』

文化十三年(一八一六) 五月 対山 63人 252句

『震柳庵対山月並三句合』

文化十二年(一八一五) 一月 対山 約400人 約1200句

文化十三年(一八一六) 五月 対山 約310人 約930句

八月 対山 約270人 約800句

閏八月 対山 約400人 1205句

九月 対山 約290人 約860句

十月 対山 約330人 980句

『震柳庵対山選角力三句合』

文化十四年(一八一七) 三月 対山 約270人 約800句

対山の句合の投句者数は300〜400人平均で、一人三句または四句吐である。規模の大きさと注目されるのは、雪中庵派の大名俳人漣漪の月並である。

『対松館漣漪子評月並五句合』

文化十三年(一八一六) 六月 漣漪 約230人 1170句

八月 漣漪 923人 4615句

文化十四年(一八一七) 二月 漣漪 610人 3050句

三月 漣漪 1050人 6290句

『秋雪菴午舷子楽評月並五句合』

文化十四年(一八一七) 正月 漣漪 約280人 約1380句

二月 漣漪 約420人 約2100句

『秋雪菴午舷子評角力会春混題六百合』

文化末 春 午舷 約571人 約3430句

対松館漣漪は、越前大野藩五代藩主土井利義とよのりである。病に倒れ三十代で隠居し、寛政七年以前に完来に師事した。文化十三年(一八一六)六月から月並宗匠となり、妻子や側付きの女房等の門人を多数擁したが、文化十五年(一八一八)に四十一歳で没する。上毛・駿府・遠州を中心に、多い時には約千人から六千句ほどが集まった「注9」。投句数の多さは、武家が藩ぐるみの組織力を発揮したことが大きく影響したのだろう。次に天保期の雪中庵対山の句合を見てみよう。

発行年月 評者 投句者数 寄句数

『雪中菴評月並一旬合』

天保九年(一八三八) 八月 対山 360人 360句

九月 対山 345人 345句

十月 対山 368人 368句

十一月 対山 378人 378句

十二月 対山 240人 240句

天保十年(一八三九) 正月 対山 370人 370句

『雪中菴評月並二旬合』

天保九年(一八三八) 八月 対山 約350人 約790句

九月 対山 約340人 約780句

十月 対山 約330人 約750句

十一月 対山 約420人 約840句

十二月 対山 約170人 約330句

『雪中菴評月並三旬合』

天保九年(一八三八) 八月 対山 約350人 約1040句

九月 対山 約340人 約1020句

十月 対山 約270人 約810句

十一月 対山 約270人 約820句

十二月 対山 約170人 約510句

行徳連（千葉県行徳） 5名

糸道①③④ 春客①

神崎連（香取郡神崎町・寺内・大戸・香取・郡） 14名

森々①③④ 仙子①③④ 玉沙① 金花（女）①③④ 百川①③④ 雪貞①

素兄①③ 石紫① 道明（杏林改）①③④ 南山亭介石③④ 石紫③

萬年④ 免影④ 龜山④

成田連（成田市） 21名

太山亭素迪④ 蘭交連大宇④ 鳳苔④ 北阜④ 好之④ 霞夕④ 巴人④

莎磨④ 野蹟④ 載路④ 自思（女）④ 葛羅④ 仙杏④ 汶水④ 柳枝④

其友④ 里橋④ 素山④ 左株④ 文器（雲水）④ 峨琴④

上毛藤岡連（藤岡市） 3名

州旭① 露暎① 穩我（二陽履）①

小見川千草園連（香取市） 15名

秋左④ 臥牛④ 吟左④ 乙雨④ むら人④ 魚秋④ 左目④ 専林④

鼠文④ 曲左④ 放牛④ 左水④ 巴明④ 鱗々④ 正母④

仙台嘉定庵連（仙台市） 2名

大江① 石叟①

春生亭連（かずみがうら市・美浦村・稲敷市） 12名

三千丈④ 免爰④ 清狂④ 漱石C 颺（易↓馬）夫C 文審C 其水C

芦舟C 芳喜久C 湖月④ 十雨④ 雄雉④

龍ヶ崎には合計24名の門人がいるが、それよりもさらに多い26名の門人を確認できるのが、喫茶庵連である。喫茶庵連は寛政期までは銀雨亭連と名乗っていたが、享和元年から喫茶庵連に名称を変更している。茨城県稲敷郡河内町、千葉県香取郡、成田市の利根川南岸沿いの門人たちである。彼らは翠兄からの信任が厚く、筑波庵二世から六世までは喫茶庵連の所屬者（翠雪・葛良・松楽・梅馨・鶴声）が継承している。

〔資料5〕の各連の所屬者を合計すると264名になるが、これは享和二年までの門人であり、文化期以降に翠兄に師事しはじめた数を加えると、翠

兄に手ほどきを受けた者は少なくとも300名は超えるだろう。「天地開闢筑波山下俳諧連歌蕉風道場」と刻んだ印の通り、翠兄は着実に常陸、下総地方に俳諧文化を浸透させていったのである。

翠兄は文化十年（一八一三）に没するが、その後月並俳諧はいっそう盛んになっていく。爆発的に流行した近世後期の月並俳諧の全貌を明らかにすることは困難だが、尾形仍氏が「月並俳諧の実態」〔注8〕に紹介している文化十一年（一八一四）〜天保十二年（一八四二）に発行された雪中庵月並句合の寄句数を確認しておこう。ただし尾形氏は寄句数のみを記しており、投句者数を示していないので、ここでは投句者数を算出して示した。例えば「雪中庵評連月十句合」であれば、一人十句ずつの投句であるから十で割るという算出方法である。まずは雪中庵四世完来判句合の投句者数、寄句数を見よう。

〔資料6〕翠兄没後の雪中庵月並句合

| 発行年月 | 評者 | 投句者数 | 寄句数 |
|----------------|----|-------|--------|
| 『雪中庵評連月十句合』 | | | |
| 文化十一年（一八一四）十二月 | 完来 | 約220人 | 約2200句 |
| 文化十二年（一八一五）四月 | 完来 | 約170人 | 約1070句 |
| 『雪中庵評連月八句合』 | | | |
| 文化十三年（一八一六）七月 | 完来 | 40人 | 約300句 |
| 八月 | 完来 | 約50人 | 約400句 |
| 閏八月 | 完来 | 60人 | 500句 |
| 九月 | 完来 | 約50人 | 約400句 |
| 十月 | 完来 | 約25人 | 約200句 |
| 十一月十二月合 | 完来 | 約60人 | 約500句 |
| 『雪中庵完来撰月次十句合』 | | | |
| 文化十二年（一八一五）九月 | 完来 | 116人 | 1160句 |

一人あたりの投句数が十句または八句と多く、投句者数は数十名から200名前後である。次に完来から雪中庵五世を継承した対山の句合をみて

- 鍋子曙庵連 (印西市小林・稲敷市・藤倉川岸・角崎・小巻) 7名
 利川③ 秋峰③④ 百林③ 池泉③ 楚山③ 萬石③ 耕雪③
 霞ヶ浦連 (稲敷郡美浦村・木原・江戸崎・茂呂・安中・余郷・船子) 14名
 雲里①③④ 浪花①③④ 子才①③ 馬川①③④ 巨牛①③④ 一鵬①③
 秋声① (③では江戸崎連) 文好① 東吹①③④ 茂萍①③④ 鶴童①
 湖隣③ 花摘③ ト笑③④
 船子連 A (Bから霞ヶ浦連に加入) (2名)
 ト笑① (③) ト亀①
 土浦連 (土浦市) 2名
 千里① 花好①
 風篁庵連 (龍ヶ崎市若柴) 2名
 鴨波① 籟保①
 筑波根連 (つくば市小田・大形・平沢・北条・土浦市本郷) 17名
 虚魂 (虚霊) ①③④ 壺仙①③④ 眠雀① 青羅①③④ 湖舟① 曉雲①③
 山水①③ 一巴①④ 花鏡① 岩楓① 素川① 可笑①③④ 眠石①③④
 眠霍①③ 春芳④ 素川④ 岩楓④
 筑波根吉沼連④ (つくば市吉沼・つくば市高崎) 3名
 五桂④ 豊秋④ 錦江④
 翡翠軒連 AB (つくば市吉沼・稲敷市大島) 8名
 雪衣①③ 豊秋①③ 如水① 幾世 (女) ① 五桂①③ 梅柴① 明動③
 麦留③
 江戸崎連 (稲敷市江戸崎) 3名
 秋声③ 文舟③ 岷江③
 関本連 (筑西市関本) 6名
 巴堂①④ 梅香①④ 柳角① 一子① 春晴①④ 三兵④
 銀雨亭連①・喫茶庵連③④ (稲敷郡河内町・十三間戸・金江津・成田市四谷・
 高・野馬込・中里・源田・平川・松崎・小浮・小野) 26名
 翠雪①③④ 素雪① 和考①③ 鶴声①③④ 意外①③④ 雪羽①③④
- 雅山① 老顧①③ 子芳①③ 山暁①③ 祐齋① 葛良①③④ 梅雪①③
 鷺雪①③④ 寛竜① 梅馨①③④ 里暁①③ 慶岷③ 梨月③ 霞江③
 松楽 (松島歌童改) ③④ 梨月④ 雪芦④ 舶香④ 鳳尾④ 立志④
 田竜窟連 (神崎町) 4名
 茂桂① 嵐翠① 川柳① 頓吾①
 森戸連 (香取市森戸) 8名
 飛雪① 烏角①③ 蘿月① 雲和① 柳翠① 都暁① 柳雪①
 二英 (尼) ①
 龜山亭連①③佐原連④ (香取市佐原) 13名
 仙郎①③④ 楫取 (雲路改③) ①③④ 雪花①③④ 友于①③④ 文足①
 周平①③④ 洲滄③ 土木③ 玉木④ 素雪③④ 夏柳③ 里江③ 周平④
 牧野連①④ (香取市佐原・津之宮・笮原) 6名
 銀江 (二世) ①③④ 瓦松①③④ 雨石① 白鷗①④ 文鳥① 梅風③
 笮原時假庵③ (香取市香取・竹之内・成田・宝田) 7名
 文鳥③ 白鷗③ 梅暁③ 唯我③ 載路③ 柳枝③ 千秋③
 長沼連 (つくばみらい市長沼) 3名
 柳風①③④ 雲英①③④ 端水①③④
 河原代連 (龍ヶ崎市河原代・和田・山王・寺田・稲村) 11名
 洗車① 祭魚①③④ 活哉①④ 文紫①③ 柳里① 竜水①④ 其扇①③④
 雪歩①③④ 斗玄①③④ 稻波①③④ 柳舎④
 一陽窟連 (取手市) 9名
 潮風 (花風改) ①③ 露水①③④ 可笛①③④ 浦風①③ 水花①
 潮石①③ 里石③ 吐嵐 (近嶺) ④ 湖風④
 布川連 (北相馬郡利根町布川) 5名
 祇来① 不浅① 素綾① 月船①④ 石苗③
 葛飾連 (野田市・宝珠花・岡田・桐ヶ作) 5名
 素牛①③④ 蒼石① 隣江①④ 桂浦①④
 作好 (舞台寓居・桐ヶ作) ①③④

文化三年（一八〇六）秋 成美・道彦・翠兄

無記 無記 119句

8 『天王奉納額面摺』

文化四年（一八〇七）六月 翠兄 73名 365句 73句

9 『筑波庵評四季一万句合』

文化四年（一八〇七）八月 翠兄 200名 1000句 355句

10 『両判筆之綾』

文化四年（一八〇七）八月 翠兄・成美 無記 5640句 355句

11 『異玖集 下巻』

文化七年（一八一〇）頃 翠兄 無記 589句

翠兄への投句者数は雪中庵派を継承した蓼太（200名程度、完来500名程度）には及ばないものの、同門の午心（160名程度）に比肩する。

筑波庵社中の範囲は『歳旦歳暮』（天明三年 蓼太編）には、翠兄を筆頭とした常陸龍ヶ崎筑波庵連十八名の句がみられた。筑波庵連には龍ヶ崎の翠兄、太如、山鶴、雪客、再可、布引、笠歌、宮淵（龍ヶ崎市宮淵）の休文、小卷（行方市小牧か）の翠弟、耕雪、三枝、万トシの龜明、古渡（稲敷郡府古渡村）の馬雪、測珠、連城、可長、花元、筑波山の野泉がいる。天明期に形成された筑波庵連はその後勢力を拡大して、翠兄が宗匠となった頃には170名程度に増加している。

文化期における常陸俳壇は、水戸、平潟を拠点とした遅月庵空阿（一七五〇～一八一二）と龍ヶ崎の翠兄が庶民層を導いた双壁である。遅月には門人156名、知人110名、計266名もの人々との交流が確認できる〔注7〕。翠兄は「9『筑波庵評四季一万句合』では200名からの句を集めており、遅月に優るとも劣らない。翠兄が「常州一方之宗匠」（大統寺翠兄墓碑 亀田鵬斎撰文）として君臨していたことが数値で裏付けられる。

〔資料4〕で挙げた翠兄の編著のうち、1『三節』（寛政十二年版）、3『三節』（享和元年版）、4『むらさきくさ』（享和二年版）は、雪中庵派の『歳旦歳暮』の形式を踏襲しており、一門の俳人の歳旦・歳暮・春興（三節）の句を

毎春出版したものである。この三冊はいずれも「珥比磨利隠士筑波庵主玄峯翠兄」と署名した翠兄の三句を巻頭に掲げ、巻末は雪中庵四世完来の句で締め括っている。これは由緒ある雪中庵派の「玄峯」号（風雪・吏登・蓼太と継承されてきた）を翠兄が継承することを、完来も認定していたことを示唆する。また、『三節』（享和元年版）からは巻末に「天地開闢筑波山下俳諧連歌蕉風道場」と刻んだ五・三種四方の印が押されており、筑波庵が「筑波山の周辺地域を勢力圏とした俳諧道場」であることを標榜している。筑波庵社中が形成した連（小グループ）の存在を確認することで、その勢力圏を明らかにしてみよう。

〔資料5〕 筑波庵社中における連の形成

以下は、①『三節』（寛政十二年）、②『三節』（享和元年）、④『むらさきくさ』（享和二年）の三冊に入集した翠兄の門人たちを連毎に記載した一覧である（入集俳書名は①③④で示した。連に属さずに投句している個人投句者はこの一覧に含まれていない。）

龍ヶ崎連（龍ヶ崎市） 13名

玄露①③④ 再可①③④ 可能（不一改）①③④ 可来①③④ 至分①③④

其水① 玄圃（玄露男）① 白羽①③④ 秋蜂（紫山改）① 桂文（庵裡）

①③④ 湘君③④ 五石④

清風居連（龍ヶ崎市） 4名

湘君①（③④では龍ヶ崎連） 雪人① 春好① 鬼丸① 清暁①

昇仙亭連（龍ヶ崎市） 7名

叟下①③④ 五中①③④ 花仙①③④ 玄夫① 藤六①③④ 里雀①③

楚英①

琵琶窓連① 古城窟連③④（仙台市・水戸市） 11名

千六①③④ 柏峨①③④ 山子（水戸）①③④ 机月①③ 吐雲①③④

烏白①④ 仙木①③ 玉泉①③④ 蘭水（仙台）③ 客之③ 木端③④

銀雨亭連① 長竿連③（稲敷郡河内町・長竿） 3名

古秋亭伊昔①③④ 道古（女 菊明改）①③④ 衷白①③

る。各月の丁摺の冒頭には通番が記されており、一三九会(享和三年二月)から一四九会(享和三年十二月)の八点の月並発行が確認できる。其日庵句合の第一会は逆算すると寛政三年(一七九二)頃始まったようである。判者の白芹は馬喰町で宿屋を営んでおり、入集者も馬喰町、亀井町、通油町といった町人地(東京都中央区近辺)が多い。また、麴町、日比谷(千代田区)、菊川町(墨田区)、深川、小名木(江東区)、虎ノ門、赤坂(港区)、住吉町、牛込(新宿区)といった武家地、万年町、柳橋(台東区)などの寺社地の門人もいる。

葎雪庵午心(？一八一七)は雪中庵派の重鎮である。投句者数は160人余り、寄句数は800句程である。投句者の範囲は、千葉県松戸市、野田市、富津市、東金市、君津市、館山市、茨城県古河市、取手市、板越、埼玉県川越市、飯能市、静岡県清水市、沼津市、下田市等である。雪中庵派は完来と午心が協力して傘下を広げ、寛政末期にはさらに翠兄が宗匠となって、勢力を強固にしていた。

葛齋恒丸(一七五一～一八一〇)は陸奥三春藩領常葉村(福島県田村市常葉町)の出身で、文化三年から下総佐原(千葉県香取市佐原)に葛齋を結んで宗匠活動を行った。勢力圏は千葉県香取市、成田市、銚子市、旭市、茨城県潮来市、石岡市、銚田市、小美玉市等で、500句以上の寄句数を集めている。双樹宛恒丸書簡によれば、700句ほどの投句を集めた月もあった[注5]。恒丸の月並は、摺物への掲載句は投句数の6～7%ほどである。

春秋庵其堂は寛政から天保期の俳諧師で生没年は未詳。年々庵と号し、前号は婦童。加舎白雄門で、寛政十年、倉田葛三の後を継いで春秋庵四世となった。寛政十二年に号を其堂に改号する。文化八、九年頃には春秋庵を葛三に返上している。天保四年頃の没か[注6]。テリトリイは長野県、群馬県が中心である。

右に挙げた十四点の月並はすべて翠兄が宗匠活動をした時期と同時代の発行である。それらと比較して、筑波庵社中の規模はどの程度のものであったのだろうか。翠兄の編著十一点を以下に掲げる。

〔資料4〕翠兄の編著

| 発行年月 | 評者 | 投句者数 | 寄句数 | 掲載句数 |
|----------------|----|--------|-------|------|
| 1 『三節』 | | | | |
| 寛政十二年(一八〇〇) 正月 | 翠兄 | 門人177名 | 531句 | 571句 |
| | | 知友40名 | 40句 | |
| 2 『筑波庵評月次三題句合』 | | | | |
| 享和元年(一八〇一) 正月 | 翠兄 | 111名 | 333句 | 38句 |
| 二月 | 翠兄 | 86名 | 258句 | 60句 |
| 三月 | 翠兄 | 111名 | 333句 | 38句 |
| 四月 | 翠兄 | 83名 | 249句 | 41句 |
| 五月 | 翠兄 | 86名 | 258句 | 38句 |
| 六月 | 翠兄 | 92名 | 276句 | 52句 |
| 七月 | 翠兄 | 56名 | 168句 | 20句 |
| 八月 | 翠兄 | 82名 | 246句 | 38句 |
| 九月 | 翠兄 | 86名 | 258句 | 31句 |
| 十月 | 翠兄 | 96名 | 288句 | 32句 |
| 十一月 | 翠兄 | 82名 | 246句 | 22句 |
| 3 『三節』 | | | | |
| 享和元年(一八〇一) 正月 | 翠兄 | 門人139名 | 417句 | 465句 |
| | | 知友48名 | 48句 | |
| 4 『むらさきぐさ』 | | | | |
| 享和二年(一八〇二) 正月 | 翠兄 | 門人165名 | 495句 | 543句 |
| | | 知友48名 | 48句 | |
| 5 『筑波庵評春乱題』 | | | | |
| 文化三年(一八〇六) 正月 | 翠兄 | 166名 | 1660句 | 279句 |
| 6 『四季乱題』 | | | | |
| 文化三年(一八〇六) 四月 | 翠兄 | 104名 | 無記 | 104句 |
| 7 『秋三題句合』 | | | | |

来、催主午心 茨城県立歴史館蔵）を見てみよう。これも刊年は記されていないが、「酉年」とあり閏六月の発行があるので寛政元年（一七八九）のも
 と確定できる。十三ヵ月分全てが半紙本一冊にまとめられている。同書には
 鈴木莊丹（一七三二〜一八一五 はじめ門瑟門、のち蓼太門。江戸の人で
 のち武蔵国与野に住む。）の序文があり、一年分の月並をまとめて見られる
 よう蓼阿（蓼太門人）が刊行したものであることが述べられている。

〔資料2〕『雪中庵評月次三題句合』（未完評）

| 発行年月 | 評者 | 投句者数 | 寄句数 | 掲載句数 |
|------------|-----|------|------|-------|
| 寛政元年（一七八九） | 正月 | 完来 | 270名 | 810句 |
| | 二月 | 完来 | 425名 | 1279句 |
| | 三月 | 完来 | 448名 | 1344句 |
| | 四月 | 完来 | 554名 | 1662句 |
| | 五月 | 完来 | 500名 | 1500句 |
| | 六月 | 完来 | 670名 | 2010句 |
| | 閏六月 | 完来 | 539名 | 1617句 |
| | 七月 | 完来 | 558名 | 1674句 |
| | 八月 | 完来 | 602名 | 1806句 |
| | 九月 | 完来 | 535名 | 1605句 |
| | 十月 | 完来 | 550名 | 1650句 |
| | 十一月 | 完来 | 450名 | 1350句 |
| | 十二月 | 完来 | 446名 | 1338句 |

投句者の所書は駿河、遠江、江戸、武蔵、相模小田原、伊勢津、奥州白
 河、奥州棚倉、上総、木更津などで、蓼太の月並と大差ない。入集者のうち
 不齋子、有隣子、錦衣子、時中子、申和子といった特権階級の武家も散見さ
 れる。三題に沿った三句ずつの投句で、投句者数はおおむね500名前後で
 あるが、多い月には670名が投句している。掲載句数は寄句数の一割程度
 で、150句前後を選んで摺物に掲載している。三年前の蓼太評月並よりも
 享受者人口は倍以上になっており、月並句合の流行が加速し、雪中庵派がさ

らに強大になっている。

雪中庵主以外の月並にも目を向けてみよう。翠兄と同時代の白芹、午心、
 恒丸、其堂による十四点の月並句合の概要を以下に挙げてみよう〔注4〕。

〔資料3〕関東における同時代の月並句合

| 発行年月 | 評者 | 投句者数 | 寄句数 | 掲載句数 |
|--------------|-----|------|------|------|
| 『其日庵白芹評句合』 | | | | |
| 享和三年（一八〇三） | 二月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 三月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 四月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 五月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 六月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 七月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 八月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 九月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 十月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 十一月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| | 十二月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| 『其日庵白芹評句合』 | | | | |
| 文化二年（一八〇五） | 閏八月 | 白芹 | 無記 | 無記 |
| 『律雪庵午心評月次句合』 | | | | |
| 享和三年（一八〇三） | 六月 | 午心 | 161名 | 805句 |
| | 七月 | 午心 | 168名 | 840句 |
| 『恒丸評葛齋月並』 | | | | |
| 文化五年（一八〇八） | 六月 | 恒丸 | 無記 | 636句 |
| | 閏六月 | 恒丸 | 無記 | 553句 |
| 『春秋庵其堂評月次』 | | | | |
| 文化五年頃の十一月 | 其堂 | 無記 | 無記 | 51句 |

当時の月並句合には必ずしも寄句数との投句者数が明記されていたわけ
 はないので数値の比較は難しいが、投句者の所書を確認することによつて各
 宗匠の勢力圏が把握できる。

其日庵白芹（一七五六〜一八一七）は、一茶が所属した葛飾派の五世であ

一八五三)になると月並句合の享受者人口はさらに増加する。

本章では雪中庵派を中心とした関東俳壇における月並句合を年代順に辿り、投句者数、寄句数(総投句数)、掲載句数を比較することによって、翠兄が営んだ筑波庵社中の規模を検証する。

まずは天明五、六年(一七八五、八六)に発行された『雪中庵蓼太評月次三題抜書』(評者蓼太、催主白麻、矢口丹波記念文庫蔵)を分析してみよう。

同書は半紙本一冊に天明五年(一七八五)三月から(四月は欠)翌天明六年十二月までの月並がまとめられている。発行年は記されていないが、「已三ヶ月分」から始まり、翌年の午年分には閏十月がある。よって蓼太晩年(蓼太は天明七年九月七日没)の天明五、六年(一七八五、八六)の発行と推定できる。

投句者数(惣連)と寄句数(句員)は、天明五年八月分から記載が始まっている。ただし、天明五年十一月分は投句の遅れが多かったのか寄句数が記されておらず、翌十二月分に追加掲載がされている。そのため天明五年十二月分は掲載句数が他の月より多くなっている。同様の増減は天明六年にもみられ、十二月には1200句が集まっている。

〔資料1〕『雪中庵蓼太評月次三題抜書』

| 発行年月 | 評者 | 投句者数 | 寄句数 | 掲載句数 |
|--------------|----|------|------|------|
| 天明五年(一七八五)三月 | 蓼太 | 無記 | 無記 | 21句 |
| 五月 | 蓼太 | 無記 | 無記 | 43句 |
| 六月 | 蓼太 | 無記 | 無記 | 21句 |
| 七月 | 蓼太 | 無記 | 無記 | 49句 |
| 八月 | 蓼太 | 184名 | 552句 | 33句 |
| 九月 | 蓼太 | 179名 | 537句 | 42句 |
| 十月 | 蓼太 | 245名 | 735句 | 53句 |
| 十一月 | 蓼太 | 無記 | 無記 | 21句 |
| 十二月 | 蓼太 | 270名 | 810句 | 83句 |
| 天明六年(一七八六)正月 | 蓼太 | 137名 | 411句 | 16句 |
| 二月 | 蓼太 | 193名 | 576句 | 48句 |

| 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 閏十月 | 十一月 | 十二月 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|
| 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 | 蓼太 |
| 182名 | 226名 | 208名 | 255名 | 207名 | 200名 | 269名 | 221名 | 242名 | 165名 | 400名 |
| 486句 | 678句 | 624句 | 765句 | 621句 | 600句 | 807句 | 663句 | 726句 | 495句 | 1200句 |
| 51句 | 36句 | 32句 | 44句 | 37句 | 45句 | 73句 | 25句 | 47句 | 21句 | 79句 |

入集者の所書によれば、駿河、遠江、東都、上総、上毛、小田原、信濃、陸奥、白河、豊後、浪花、安房からの投句がみられる。これらは江戸勤番の武士たちの出身地である可能性がある。蓼太の門人には大名や旗本などの特権階級が多い。例えば入集が散見される不審子(一七五五〜一八四〇)は豊後府内藩主である。天明五年十二月には信州善光寺の今井柳莊(一七五一〜一八一三)の一句「鉄漿おほくろに笑ふが如し董艸 信州柳莊」が確認できる。柳莊の蓼太俳書への初出は天明三年の『むさしの三歌仙』で、柳莊が蓼太に師事したのは蓼太が没する天明七年までの三、四年ほどの期間であった(注3)。

一方、翠兄は天明元年(一七八〇)には龍ヶ崎に蓼太を迎え、『筑波紀行』を蓼太との共編で出版しており、天明三年(一七八二)『歳旦歳暮』(天明三年 蓼太編)には翠兄を筆頭とした常陸龍ヶ崎筑波庵連十八名が入集する。にもかかわらず右の月並には翠兄を含む常陸俳人の句が一切確認できない。

『雪中庵蓼太評月次三題抜書』はおそらく特権階級を含む定府の武家(柳莊は代官)たちが中心となって形成された月並だったのだろう。平均的には毎月約200名が投句している。

次に蓼太から雪中庵四世を継承した大島完来(一七四八〜一八一七)が寛政元年(一七八九)に興行した『資料2』『雪中庵評月次三題句合』(評者完

筑波庵翠兄の俳諧道場

二村 博 (常磐大学人間科学部)

Tsukuba-an Suikei's Haikai Dojo

Hiroshi NIMURA (*Faculty of Human Science, Tokiwa University*)

Abstract

This paper surveys the haiku writer Suikei, who was active during the middle and late Edo period. Suikei opened a haiku school called Tsukuba-an in Ryugasaki, Ibaraki. He taught many students by using haiku that was popular at the time.

I compared the implementation status of Tsukinami Haiku in the Kanto region at that time with Suikei's Tsukinami Haiku, and examined what Suikei's Haiku instruction was like. The survey also revealed that Suikei had taught over 300 students, mainly in Ibaraki and Chiba prefectures. Suikei interacted with the famous haiku poets of the Kanto region at the time and refined his own haiku skills. He provided haiku instruction that was easy for beginners to understand, and was supported by students. This paper examines Suikei's excellent haiku activities through various materials such as haiku collections and letters from the Edo period.

はじめに

杉野翠兄(一七五四～一八一三)は、常陸龍ヶ崎に俳諧道場筑波庵を開き、江戸時代中期から後期にかけて常陸地方の庶民層に広く俳諧を普及させた宗匠(俳諧指導者)である。雪中庵三世の大島蓼太(一七一八～一七八七)に俳諧を学び、寛政十二年(一八〇〇)には宗匠として立机している。翠兄は筑波庵を拠点に、三節(歳旦・歳暮・春興)句集刊行、月並句合興行、寺社への句額奉納などを通じて常陸、下総地方を中心に三百名ほどの門人に指導した。本稿は、常陸地方の庶民文化発展に貢献した翠兄の俳業について検証するものである。

一、関東地方の月並句合と翠兄の筑波庵社中

関東地方における月並句合は、宝暦期(一七五一～一七六四)の建部涼袋、安永・天明期(一七七二～一七八八)の加舎白雄、大島蓼太、多少庵秋瓜、松露庵烏明らによって形成され始めた(注1)。宝暦元年(一七五二)、雪中庵派(嵐雪系)の大島蓼太、葛飾派(素堂系)の溝口素丸と小林竹阿、採茶庵派(杉風系)の白兔園宗瑞によって『統五色墨』が刊行され、雪中庵派が台頭する。雪中庵派の勢いを警戒した葛飾派の素丸は宝暦九年(一七五九)『青あらし』を刊行し、「全く江戸の点取の句にて正風体のすべき句にあらず。是を流行と言は蕉門の滅亡たるべし。」と蓼太を非難し、蓼太と素丸は十二、三年ほど疎遠になったが、晩年(一七七二～一七八七頃)には交流を再開している(注2)。享保期には浮世風(軽妙な人事句、人情句)の江戸座(其角系)が主流だった江戸俳壇は、炭俵調(芭蕉晩年のかるみを理想とした俳風)を基調とした雪中庵派が中心となって関東俳壇を席卷しはじめたのである。

翠兄は雪中庵三世の蓼太に師事したが、彼の宗匠活動が確認できるのは寛政十二年(一八〇〇)から彼が没する文化十年(一八一三)までである。活動拠点は、多数の武士階級がひしめく江戸ではなく、平民が中心の常陸である。この頃には俳諧は地方にも広まり、天保・嘉永期(一八三〇)

執筆者一覧 (掲載順)

| | | |
|-------|--------|-------|
| 飯野 令子 | 人間科学部 | 准教授 |
| 崔 蘭 英 | 人間科学部 | 准教授 |
| 北原スマ子 | 日本女子大学 | 客員研究員 |
| 田中基晴 | 人間科学部 | 教授 |
| 菅原直美 | 看護学部 | 専任講師 |
| 二村 博 | 人間科学部 | 准教授 |
| 棚橋 浩 | 人間科学部 | 教授 |
| 永野 勇二 | 人間科学部 | 専任講師 |

編集委員

Kevin McManus 田中 基晴
崔 蘭 英 永野 勇二 渡邊 洋子

常磐大学人間科学部紀要 人間科学 第38巻 第1号

2020年9月30日 発行
非売品

編集兼発行人

常磐大学人間科学部 〒310-8585 水戸市見和1丁目430-1
代表者 水嶋 陽子 電話 029-232-2511 (代)

印刷・製本 山三印刷株式会社

HUMAN SCIENCE

(Faculty of Human Science, Tokiwa University)

Vol. 38, No. 1

September 2020

CONTENTS

Articles

- Understanding the Experiences of Students Studying Abroad and Using them
for Future Guidance: Focusing on listening to student life stories
..... R. Iino 1
- A Fundamental Research on the Human Network of Intellectuals in East Asia
from the Transitional Stage to “Modern Times”: Focusing on the “Kanjin
Hitsuwa” (韓人筆話) L. Cui & S. Kitahara 17
- Investigation on the Relationship between Eating Behavior and Health of the
Elderly in Japan – A systematic review of domestic and international
literatures – M. Tanaka & N. Sugawara 31
- Tsukuba-an Suikei's Haikai Dojo H. Nimura 74 (一)

Research Notes

- The effect of hyperglycemia on osteogenic differentiation of C2C12 myoblast
and C3H10T1/2 mesenchymal cells H. Tanahashi 43
- Consideration about the subject participating in the difference in result in
Japanese old tales (3) – composite type – Y. Nagano 49
-